

平成 26 年度

年 次 報 告 書

神 戸 常 盤 大 学
神戸常盤大学短期大学部

刊行の辞

大学の教育・研究・運営を巡る状況は少子高齢化の進行とともに、いよいよ厳しさを増してきました。国立大学の文系学部縮小への要請はその最たるものといえますが、私立大学・短期大学でもその多くが定員割れに陥って既に久しく、統廃合や閉校の動きは加速する気配を見せています。このような時こそ、自分の依って立つ大学がどのような状況にあるか、時々刻々見極め、正しい進路を見出して行く努力が求められるでしょう。

本学では、平成4年に自己点検・評価委員会を設置して以来、教育活動を中心に毎年自己点検・評価を行ってきました。平成12年度からはこの点検結果を「自己点検・評価報告書」にまとめて刊行するとともに、平成18年度からは「学生による授業評価」を加え、さらに学内の各組織・委員会と個人の活動およびFD活動の報告を合わせて「年次報告書」を刊行してきました。平成21年度からは、前年の点検・評価で明らかになった課題や問題点に対する対応の評価を加えました。さらに、情報公開の一環として、年次報告書を平成25年度分から本学ホームページで公開しております。また昨年度は日本高等教育評価機構による大学認証評価を受け「適合」の評価を得ることができました。日本高等教育評価機構の評価結果も、本学ホームページに情報公開しております。

平成26年度報告書には、昨年度に発足した教育イノベーション機構の年間活動報告が加わりました。また、第5部として日本高等教育評価機構による認証評価受審に向けた取り組みを報告しています。

「年次報告書」は各人、各組織が一年間の活動成果を取りまとめ、自己評価して、次の改善に役立てることに意義がありますが、自己の成果を評価することは本質的に難しいことです。安易な目標設定が安直な評価につながる一方で、目指す目標に上限がないからです。適切な目標設定と公正な達成度評価、さらに未達成課題の綿密な分析が必要です。

本学は現在なお大きな変革の途上にあります。この「年次報告書」が学内外から批判と評価を得て、さらなる飛躍のためのインセンティブの種となることを期待します。関係各位には是非一度本書に目を通し、忌憚のないご批評をお寄せいただくようお願い申し上げます。

平成27年6月

神戸常盤大学

神戸常盤大学短期大学部

学長 上田 國寛

目次

頁

刊行の辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
------------------------------	---

第1部 各組織年間活動報告書

I. 学科別 年間活動報告書

1. 保健科学部 医療検査学科・・・・・・・・	4
2. 保健科学部 看護学科・・・・・・・・	7
3. 育学部 こども教育学科・・・・・・・・	11
4. 短期大学部 口腔保健学科・・・・・・・・	14
5. 短期大学部 看護学科通信制課程・・・・・・・・	17
6. 教育イノベーション機構・・・・・・・・	20

II. 学内組織別 年間活動報告書

1. 入試広報委員会・・・・・・・・	22
2. 教務委員会・・・・・・・・	25
3. 学生委員会・・・・・・・・	27
4. 自己点検・評価委員会・・・・・・・・	29
5. F D委員会・・・・・・・・	30
6. カリキュラム等検証委員会・・・・・・・・	33
7. 図書・紀要委員会・・・・・・・・	34
8. 広報紙編集委員会・・・・・・・・	36
9. 倫理委員会・・・・・・・・	38
10. 研究倫理委員会・・・・・・・・	39
11. 個人情報保護委員会・・・・・・・・	40
12. ハラスメント防止対策委員会・・・・・・・・	41
13. 危機管理（災害）委員会・・・・・・・・	42
14. I C T推進委員会・・・・・・・・	43
15. 高大連携委員会・・・・・・・・	45
16. 就職委員会・・・・・・・・	47
17. 国家試験対策委員会・・・・・・・・	56
18. 臨地実習委員会・・・・・・・・	62
19. 通信教育委員会・・・・・・・・	69
20. 遺伝子組換え実験安全委員会・・・・・・・・	71
21. 国際交流センター・・・・・・・・	72
22. 地域交流センター・・・・・・・・	74

23. 神戸常盤ボランティアセンター	76
24. ライフサイエンス研究センター	79
25. 口腔保健研究センター	81
26. K T U 大学教育研究開発センター	83
27. 健康保健センター	85
28. 神戸常盤大学子育て支援センター・「子育て広場えん」 .	87
29. 教職支援センター	90
30. 事務局	91
 第 2 部 本年度の「学生による授業評価」学科別のまとめ .	93
 第 3 部 自己点検・評価委員会 年間活動方針報告	121
 第 4 部 「卒業生へのアンケート調査結果」報告書 . . .	122
 第 5 部 神戸常盤大学の平成 26 年度大学認証評価結果について . . .	139

第1部 各組織年間活動報告書

I. 学科別 年間活動報告書

1. 保健科学部 医療検査学科（M科）年間活動報告書

学科長 松田 正文

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	95	95	0	0	0	0	
2年	93	93	4	0	0	0	
3年	100	93	2	1	0	0	
4年	94	102	1	3	17	0	84
休退学等の理由：休学：進路再検討 ※在籍者数はH26.5.1現在、他欄は年度中の動向 退学：進路変更							
学科目標資格取得状況							
61回臨床検査技師 国家試験	受験者数	84	合格者数	79	合格率	94 %	
平成26年度細胞検査士 認定試験	受験者数	15	合格者数	12	合格率	80 %	
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	71 (90 %)	進学者数 (率)	5 (6.0 %)	その他 (率)	0 (0 %)		
本年度の課題							
1. 第61回臨床検査技師国家試験全員合格を目指し指導する。 2. 平成26年度細胞検査士養成課程受講者全員が細胞検査士認定試験に合格するよう指導する。 3. 社会活動・研究活動を活発にする。							
本年度の目標・方針							
1. 第61回臨床検査技師国家試験の合格率100 %を目指す。 2. 平成26年度細胞検査士認定試験の合格率100 %を目指す。 3. 基礎教育・学習支援を充実させ、新カリキュラムを順次実施して行く。 4. 社会活動・研究活動を活発に行う。							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1. 平成25年度に続き新カリキュラムを実施して、平成27年度入学生からの新カリキュラム全面適用に備えた。その中で、改訂前カリキュラム（旧カリキュラム）が適用される学生の扱いに注意すべき点のあることが判明したので彼らに不利益が生じないように引							

き続き配慮した（医療検査学科カリキュラム委員会報告）。

2. 基礎教育・学習支援が、専門教育の内容に沿っていない場合があった。教員間の意見交換を一層密にして教育・支援の充実を図った（医療検査学科会議議事録）。
3. 第61回臨床検査技師国家試験の結果は上に示す通りであり、第60回のそれよりも良いものであった（国家試験対策委員会年間報告書）。履修すべき科目の再試験などを受けることなく順調に進級して行く学生とそうでない学生とでは国家試験合格率に差があることに配慮して、前項との関連の下に一層確実に充実した教育に努めたが、本年度目標には到達しなかった。
4. 平成26年度細胞検査士認定試験の結果は上に示す通りで、教員・学生の努力により合格率は上昇した（医療検査学科会議議事録）。

目標達成度の評価：1.できた ②ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1)教科運営、カリキュラム

① 基礎学力の充実と専門科目履修の効率化を目指す科目設定と学習支援

教員間の討論（例：生理系教員による検討会など）・意見交換を適宜実施し、学科独自の基礎科目（例：数学、理科、日本語など）を設定し、専門科目に繋いだ。

② カリキュラムの検討

今年度発足した教育イノベーション機構と連携して基礎学力の向上を目指すカリキュラムの検討を行った（2014 年度講義要項、医療検査学科会議議事録）。また、アクティブラーニングを一層拡大するためにも必要なこととして、カリキュラムのスリム化を検討した（医療検査学科会議議事録）。

③非常勤教員への対応

新規あるいは継続非常勤を区別せず、年度初めにアドミッションポリシー、ディプロマポリシーを伝えるとともに、学生に関する重要情報（性同一性障害学生の存在など）を伝えた（医療検査学科会議議事録）。

④実習科目の運営

実習科目の運営方法は、基本的には担当者間の検討によっている。臨地実習は規模も大きく学科全体が関わって行くものなので、実習協力病院との連携を密にしながら、効果的な実習を行った（医療検査学科会議議事録）。

2)学生支援

① 科目修得への支援

前年度までに続いて、科目担当者、担任、サポート委員などが連携して支援し、滞りなく科目履修が進むよう支援した。さらに、「学生による授業評価」に記載された事項を参考にして授業に工夫を加えた（医療検査学科会議議事録）。

② 生活に問題のある学生への対応（上記①と関連する）

学科として情報を共有し担任が中心となっており、アルバイトと学業とに関する基本的な考え方やその両立について、きめ細かく指導・支援した（医療検査学科会議議事録）。

③ 国家試験対策 学科独自の教材、通常の授業以外での教育（補習授業の充実）などによって学力向上を図った（医療検査学科会議議事録：国家試験対策委員会）。 ④ 就職・進学に関する支援 学科の就職委員、担任などが中心となって、医療機関を中心とした就職先だけでなく医療機器メーカーなどにも目を向けるよう支援するとともに、進学（臨床工学技士、医学系大学院）を指導し、実現した（医療検査学科会議議事録、就職委員会年間活動報告、卒業研究報告書）。 3) FD への取り組み 全学的取り組みと学科単位の取り組みとがあった（FD 委員会年間活動報告）。 ① 学科内では実習レポート作成指導などが議論された（医療検査学科会議議事録）。その他、a. ①にも記載した。 ② 本学の認証評価受審では、学科としても問題点を指摘されることはなかった。 4) 医療検査学科会議の開催 原則として毎月第1月曜日に開催した。会議では上述の事項に止まらず、さまざまな議論を行ったが、その中で全学的に関連のあるものを含めて、主なものを列挙する。 ○「学生による授業評価」などを参考に、自己点検・評価を一層推進する ○卒業研究と国家試験との取り組みかたに工夫する。 ○医療検査学科常勤教員の動き - 退職3名、新規採用2名であった。 ○本学科の教員4名も参加して教育イノベーション機構が発足し、本学科の教員4名は教育イノベーション機構の教員を兼ねることになった（医療検査学科会議議事録）。 c. <u>社会活動、研究活動、など：</u> 社会活動は、長田区を中心に看護学科との協働活動などを継続して行った。 学内のテーマ別・ジョイント研究、学外の科研費申請については例年通りに積極的な課題提出・申請に向けて学科内で指導等を行った。テーマ別研究は5件が採択された。 その他詳細はK T U大学教育研究開発センター年間活動報告書を参照されたい。	次年度の課題 1. 臨床検査技師国家試験および細胞検査士認定試験合格率を向上させ、いずれも100%を目指す。 2. 教育イノベーション機構との連携の下に基礎教育（教養教育、基幹教育）を充実させる。
---	--

2. 保健科学部 看護学科（N 科）年間活動報告

学科長 鎌田 美智子

基礎データ							
	入 学 者 数	在 籍 者 数	退 学 者 数	休 学 者 数	留 年 者 数	転学科者	卒 業 者 数
1年	89	89	1	0	0		
2年	90	90	0	0	0		
3年	85＋編入 2	86	2	0	0		
4 年	85＋編入 2	96	2	1	8		86(秋卒業 7名含む)
休退学等の理由：進路変更 ※在籍者数はH26.5.1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格取得状況							
看護師国家試験受験資格		受験者数	83人	合格者数	80人	合格率	96.4%
保健師国家試験受験資格		受験者数	68人	合格者数	68人	合格率	100%
養護教諭免許取得		受験者数		合格者数	16人	(9月卒含)	
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	76人 (96.2%)	進学者数 (率)	1人 (0.01%)	その他 (率)	※未定者：養護教諭非常勤登録し、待機中		
本年度の課題							
1. 日本高等機関「大学機関別認証評価」に向けて点検内容を的確に準備、審査を円滑に受ける。 2. 教員の研究活動をさらに高め、研究の質の向上をはかり、研究時間量の確保他、研究環境を整える。							
本年度の目標・方針							
1. 平成24年度（5期生）から保健師養成課程の選択制を導入し2年目迎え、その導入に伴う学修支援を円滑に行う。 2. 本学科カリキュラム運営による教授・学修過程の成果として、看護師・保健師の国家試験受験の結果、全員が合格基準に達する。 3. アドミッションポリシーに基づく資質の高い入学生確保の維持（近隣看護系大学の増設の中、本学科は高い受験生数を維持しており、その継続）。 4. 日本高等教育機構の「大学機関別認証評価」受審後も、円滑な教育運営のために、学科運営の総括的な点検を行う。							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1. 保健師養成課程の選択制導入（平成 24 年度入学 5 期生）に伴う学修ガイダンス。 従来の統合カリキュラムと異なり、選択制では、人数の制限が必要となり、したがってこの課程の学修では保健師課程の到達基準（指定規則）を念頭に、保健師活動のイメージを明確に描き、慎重な科目履修が必要となる。そこで 2 年前から組織している保健師課程							

養成員会を開催し（3 回の実施）、指導内容や指導方法の検討後、教務委員を中心に入学時の履修ガイダンスや、2 年次の保健師課程選択のアンケート等を基に履修ガイダンスを強化し、適切に選択できるよう支援した。この結果 34 人（編入生 2 名）が選択確定した。しかし、実習施設である県内の保健所等では、県内 14 大学との配分の課題があり、定員を 4 人オーバーしている。これに対しては人数を、県内看護系大学の調整会議において確保する必要がある。次年度から定員オーバーした場合、事前テストなど、新たな履修条件を検討する課題が残った【根拠資料：保健師課程履修ガイダンス資料、平成 28 年度県内保健所実習計画表】

2. 国家試験の成果は、看護師国家試験では合格率 96.4%で、全国平均 90.8%（既卒者を含む）を大幅に上回った。不合格は 3 名であった（昨年度合格率不合格 1 名）。不合格者の自己採点上の得点率を分析してみると、2 人が必修問題、1 人が一般・状況設定問題において、僅差で合格基準に達していなかった。これらの学生は、学修への取り組みに時間を要する傾向がみられており、4 年次当初から個別指導を行い、本人も真摯に取り組んでいたものの、結果として時間量不足が影響したものと思われる。受験生全体の正答率は、成人看護学、小児看護学以外はすべて 70%以上に達し、臨地実習での知識の統合等の分野では、94.1%と、高い評価となっている。しかし前記の 2 つの領域は、それぞれ 63.8%、60.5%と、やや低く、次年度の指導強化が必要である。特に成人看護学領域は、他領域より低い傾向が続いており、単位数が基礎看護学に次いで多いことから、授業上の内容精選や学修指導上等、総点検することが必要である。保健師国家試験では全員合格（昨年 67.3%）と、飛躍的な成果をあげており、次年度も支援を継続していく。【学科会議議事録「国家試験結果の資料」、総括学科会議録】

4. 応募者数の増加と、資質の的確な選抜に関しては、従来からオープンキャンパス等で、本学科の教育内容を丁寧に伝えていくこと等の継続と、カリキュラムポリシーに基づいた的確な教科運営により、ディプロマポリシーの確実な到達を導くことで、結果に繋がると考えられ、実践してきた。今年度の応募総数は、466 人で、昨年度より 110 人減少している。これには県内に 2 大学の 신설、全国的にも看護系大学が激増し、かつ 18 歳人口の減少等が影響していると思われる。しかし、合格者に対する入学者の割合は昨年度よりも増加し、全体の歩留まり率が高くなっていること、受験生の高校評定値も高くなっていることから、いわゆる偏差値が高い層が増えており、それに伴い基礎力テストに対しても高い学力保持層が増していることがうかがえる。さらに一般入試の歩留まりは、昨年に続き高く、「本学科を選択しての入学」という応募スタンスが確立し始めている印象を受ける。

【看護学科総括会議議事録、入試広報委員会選抜試験総括資料】

目標達成度の評価：①.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1. 教科運営（授業運営）

（1）教科運営に関しては、各専門領域（教養・専門基礎領域、基礎看護学、健康支援看護学、母子支援看護学、療養支援看護学）の教授が主宰する領域会議（月 1 回程度）で、教

育内容等の検討を行っている。さらに学科会議（月 1 回）において、必要時、検討を行い、年度末には総括学科会議を設け、各専門領域からの教育評価（総括）を行った。また看護学科の総括的な運営においては、看護学科教授会（月 1 回）において審議検討し、学科会時の履修ガイダンスや、2 年次の保健師課程選択のアンケート等を基に、ガイダンス内容を強化した。【根拠資料：領域会議議事録、学科会議議事録、看護学科教授会議事録】

（２）「大学機関別認証評価」の円滑な受審に関しては、学科長を含めた準備委員会を中心に、各専門領域の教員、各種委員会に所属する委員からの点検内容を、必要時学科会議で検討した。この点検において、看護学科の将来構想に関しては、各領域でのそれぞれの検討内容を用い、看護学科教授会で審議し、「学部教育の充実、大学院設置の必要性等」の方向性を定め、学科会議で論議した。受審結果に、特段の問題は見られていない。【根拠資料：認証評価準備委員会議事録、看護学科教授会議事録、看護学科会議議事録】

（３）非常勤講師への対応は、学期初めと終わりに、学科長が教育内容と、昨年度の成果に関して講師との面談を行った。必要時、授業展開のサポートを教務委員が行っている。【根拠資料：学科会議議事録「非常勤講師との対応」】

（４）臨地実習科目の運営に関しては、「臨地実習委員会」が中心となり、実習配置計画や実習要領の検討、さらには「臨床指導者研修会」の開催等と、でき得る限りの連携を密にし、円滑な運営を意図した。【根拠資料：臨地実習委員会議事録】

2. 学生支援

（１）学生の学修支援に関しては、学生個々のニーズに応じて、4 大開設時に導入したチューター教員が支援し、クラス担任、さらに、各専門領域の授業担当者が、可能な限り学生個々のレディネスに応じて対応できるようにしている。また大学生活全般において、特に地方出身学生の大学生活の支援として、チューターの役割が大きく効果もあげており、今年度の退学者は全学年で 4 人と、全国平均に比べて少数にとどまっている。国家試験対策は、対策委員会の活発な活動により、学生たちが主体的に学習会を設けたり、模擬試験に挑戦したりと、さらには教員による補習等により、成果を上げている（前述）。就職支援に関しては、就職委員会の活動により、病院・保健所等への希望者は、100%の内定であった（養護教諭に関しては、7 人中 3 人が未定で待機中。内定率 96.2%）。また 1 期生からの課題であった実習病院への就職は、昨年から全病院に卒業生が 1 人以上決定している。

3. F D 活動

学生による授業評価の結果は、学科長が教育評価の観点から、「内容の精選、授業方法、評価方法」として学科会議に提供し、各教員の教育力を高めるために活用されている。また、学科内の組織的な F D 活動としては、大学教育の特性に応じた指導方法等を実習指導者と共に検討し、指導力を高めることをねらった。また臨床指導者研修会において（3 月実施、テーマ「学生の主体的な支援を考える」で、本学教育学部の大森教授の基調講演に続きグループワーク。参加者 60 人、教育側と臨床側の交流を図った。【臨地実習委員会議事録】

c. 社会活動、研究活動、など：

1. 社会活動：蓮池婦人会のデイサービス・介護プログラム事業には、述べ12人の教員が、

健康相談・講義、さらには健口体操等を12回実施し、30人が参加している。さらに看護協会本学拠点「まちの保健室」活動では、述べ23人の教員が計8回実施し、総計271人の参加が見られた。高大連携では県立明石南高校の「基礎看護Ⅰ、Ⅱ」の講師として3人の教員が協力。また三田市民病院との地域連携入試協力では、病院側との連絡調整を学科長が中心に入試広報委員等が密に行っている。今年度、三田市民病院には、地域看護を担うべく意欲を持った8人の卒業生が就職している。【総括学科会議議事録】

さらに、看護系大学との組織的連携においては、日本看護系大学協議会・日本私立看護系大学協会・全国保健師教育機関協議会・日本養護教諭養成大学協議会に加盟しており、それぞれの総会に関係教授を参加させ、連携を深めた。また4年前に設立した県内看護系大学協議会には、2回の会議に学科長と、地域看護学教授が参加している。

加えて、学科長が理事をしている私立看護系大学協会の研修会「看護専門職としての看護学教育を実現する教育評価・専門職のコアコンピテンシーと国家試験：梶田叡一氏の基調講演及びディスカッション」を、2月11日に大阪で開催し、全国から228人の多数の参加者があり、活発な討議や交流を行った。

2. 研究活動：科研費の応募に積極的に取り組み、今年度3件（通信制課程含む）が採択されている。また学内のテーマ別研究や神戸常盤学術フォーラムに発表、その他、JACAAの草の根事業研究や、看護系の学会等に多数の研究発表を行っている。さらに一昨年のM科と合同で採択されている「私立大学戦略的基盤形成支援事業」の成果に続き、E科を加え「災害対応を組み込んだ機動的サポートシステム神戸常盤モデルの構築」が採択され2年目の質問紙調査を実施している。

次年度の課題

1. イノベーション機構の教養教育の改正に伴い、本学科のカリキュラム点検を行い卒業時の到達度との関連等を、検証していく。
2. 学科の将来的展望内容を検討し、今年度は看護学科教授会を中心に以下の2つの課題を検討する。
 - (1) 「大学院設置の構想」を検討し、その妥当性等の情報分析を行う。
 - (2) 「編入学」に関する学士入学の検討を行う（入試広報委員会との情報連携）。

3. 教育学部 こども教育学科（E科）年間活動報告

学科長 後藤 晶子

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	92	92	2	0	—	—	
2年	89	89	0	1	—	—	
3年	92	87	0	0	—	—	
4年	—	—	—	—	—	—	
休退学等の理由：退学：進路変更 休学：体調不良							
※在籍者数はH26.5.1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格取得状況							
—		受験者数		合格者数		合格率	%
—		受験者数		合格者数		合格率	%
—		受験者数		合格者数		合格率	%
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	—	進学者数 (率)	—	その他 (率)	—		
本年度の課題							
① 教育課程の不断の検証は設置認可における留意事項であり、今年度も課題とする。							
② 1年2年3年それぞれに相応しい有効なキャリア支援を実施運営する。							
③ 卒業空白期間の中で、保育・教育現場に対する研修の機会提供をして連携を図る。							
④ 学生の質を勘案しながら、学習効果を上げる工夫を続ける。							
本年度の目標・方針							
① 入学生の質を踏まえた完成年度以降の教育課程を含めた学科体制を検討する。							
② 学年ごとにそれぞれの学生に見合ったキャリア支援を具体的に展開する							
③ 保育・教育現場に対して研修の機会を提供し、連携を深める。							
④ 学生の質を勘案しながら、学習効果を上げる工夫を続ける。							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：							
① 学科将来構想委員会を再編成し、資料に基づき精力的・効果的な検討を進め、学生の質に合わせたコース制の導入を考えた。理事長・学長の了解も得、具体的なカリキュラムについて検討中である。（学科会議議事録、学科将来構想委員会資料）							
② これまで希薄だった進路としての施設理解を促し、保幼希望者には保育サポーターを展開した。また小学校希望者と公立保幼希望者には、教職支援センターと連携して学習を促した。（保育サポーター配置表、教職支援センター議事録、学科会議議事録）							
③ 年度末に 3・1（2の希望者を含む）年生の保護者をそれぞれ対象とした懇談会を開催し、学生の進路支援についての取り組みを説明し連携を深め、学生のキャリア支援を							

強化した。（案内状、アンケート、学科会議議事録）

- ④ 研修会として「谷川俊太郎&賢作 詩と音楽のひととき」を3月1日に開催した。保育・教育現場から大勢来られ、神戸芸術センターの大会場をほぼ埋め尽くす参加者から好評をいただく会となり、現場との連携を十分に深めた手ごたえがあった。

（研修会案内チラシ、案内状、実施要領、AC委員会議事録、学科会議議事録）

- ⑤ 授業評価について、結果と各教員の改善策を学科会議で共有し、それぞれ対策をとってもらった結果、昨年度に比して各項目で0.1ポイント上昇した。（学科会議議事録）

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1)教科運営（上記aで記述した内容以外）

①非常勤教員への対応

年度開始前あるいは最初の授業時に学科長から学科の教育運営についてのお願いの挨拶をするとともに、教務委員から、授業運営にかかわる注意依頼事項の説明と書式による報告依頼をしている。その他必要に応じて随時学科長および関連科目担当教員が対応している。（学科会議議事録・教務委員からの依頼状と様式）

②実習科目の運営方法の検討

実習委員会を中心に、基礎実習Ⅰ、幼稚園実習Ⅰ、小学校基礎実習、基礎実習Ⅱの効果的運用について協議した。保育・施設実習については近畿厚生局の指導に基づいた内容を隣地側と共有し、教育実習についても、年2回神戸市教育委員会と協議会で話あっている。（実習委員会議事録、教員の資質向上神戸市連絡協議会資料、学科会議議事録）

2)学生支援

①1年生には入学1ヶ月後と1年後期、2年生には後期開始後、3年生は進路別に時機を選び全員に個別面接で、適応状態や進路志望等の確認をした。これはキャリア支援にかかわる目標②とも連動したものである。（学科会議議事録、面接周知案内）

②基礎学力テストの結果を学科で共有し、学科会議で学生の学力その他の実態を報告し合い、対策を検討した。（学科会議議事録）

③学科会議、及び教員間メールで欠席情報を共有し、担任から学生に注意を喚起している。未修得科目の多い学生は、担任が呼び出して指導をしている。（学科会議議事録）

④その他授業のグループ討論やゼミで個別の学生の状況把握を心がけた。授業料滞納学生については担任がケアし、学科会議で報告している。（学科会議議事録）

3)FDへの取り組み

①再履修率の高い教員はいない。

②学科内FD研修は、学科将来構想が学科FDそのものであり、将来構想委員だけでなく学科全員の教員が意見を出し合い、ワーキンググループに加わっている。

（学科会議議事録、学科将来構想委員会資料）

c. 社会活動、研究活動、など：

① 科研費は 3 名が研究続行中であり、テーマ別研究には筆頭研究者 1 名、連名研究者 4 名が採択された。（教授会議事録）

③ 幼稚園との連携　ときわキッズクラブの開催（放課後専任教員の専門性を活かしたプログラムを実施）、研修会、子育てセミナーの講師を務める（学科会議議事録）

次年度の課題

- ① 完成年度を迎え、養成課程を滞りなく展開し、一期生の卒後の進路を確保する。
- ② 留意事項である養成課程の不断の検証の結果として、カリキュラム改訂を整える。
- ③ 完成年度以降を見据えた学科内教員組織の整備を図る。

4. 短期大学部 口腔保健学科 (O 科) 年間活動報告書
 学科長 野村 慶雄

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	転学科者数	卒業者数
1年	79	79	3	0	0	0	59（秋卒業1名含む）
2年	88	86	6	1	0	0	
3年	75	69	1	0	9	0	
4年							
休退学等の理由：進路変更、経済的理由 ※在籍者数はH26.5.1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格取得状況							
歯科衛生士国家試験：新卒			受験者数	59人	合格者数	59人	合格率 100%
歯科衛生士国家試験：既卒			受験者数	1人	合格者数	0人	合格率 0.0%
			受験者数		合格者数		%
卒業後の進路							
就職内定者数 (率)	58 人 (98.3%)	進学者数 (率)	1 人 (1.7%)		その他 (率)		
本年度の課題							
① 歯科衛生士を目指すためのモチベーション向上と早期退学者の減少							
② 平成28年度にカリキュラム改正を目指した検討と対策							
③ 卒業生のキャリアアップを図る（進学、リカレント教育）							
④ 学科内FD活動・研修会の活性化							
本年度の目標・方針							
① 教養ゼミの定着							
② 平成28年度カリキュラム改正を目標にした定期的な検討会議開催							
③ 歯科衛生士リカレント教育の実施							
④ FD活動を通しての教員の資質向上を図る							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：							
① 平成 25 年度に開始した 1 年生前期の教養ゼミ（グループ制）を引き続き実施し、教員と学生間の交流を通して人格形成を促すことができた。また、「学びのしおり」を発行し、当学科の教育理念等や学修する上でのノウハウを提供した。当学科の課題であった早期退学者を 1 名に留めることができた背景として評価できる。（根拠資料：学科教授会議事録、学科会議議事録）							
② 平成 28 年度カリキュラム改正を目指し、毎月 1 回のカリキュラム検討小委員会を開催し、教養分野・専門基礎分野・専門分野の科目名称・開講時期・単位数などについて検討した。その際、教育課程の編成の基本となる従来の「ディプロマポリシー」を見直し、新しい「ディプロマポリシー」に基づくカリキュラム編成を検討した。一部、							

教養分野に関しては、教育イノベーション機構の基幹教育との整合性を図りながら継続的にカリキュラムを検討する。（根拠資料：カリキュラム検討小委員会議事録、学科教授会議事録、学科教授会議事録）

- ③ 平成 25 年度「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」に基づく、「歯科衛生士リカレント教育 キャリアアッププログラム」を学校教育法の「履修証明制度」に対応したプログラム（歯周疾患管理・口腔機能管理・歯科医療管理コース）として設定した。その結果、3 名が 1 年間受講し、3 名の履修証明書を発行した。（根拠資料：教授会議事録、学科会議議事録）
- ④ 教員の資質向上のために、学科教員の授業公開や「学生による授業評価」の結果を前年度のものと比較し検証を行った。研究活動の活性化に向け、外部資金の獲得として学科教員が、科学研究費の申請を 4 件行った。その結果、継続 1 件、新規 1 件が採択された。また、学内のテーマ別研究費申請では、6 件の申請が有り 5 件が採択された。（根拠資料：公開授業記録、KTU 外部資金獲得状況記録）

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1) 教科運営（授業運営）

上記のaに一部含まれる。（①教養ゼミの定着、②平成28年度カリキュラム改正を目標にした定期的な検討会議開催）

③臨地実習施設への研修会

臨地実習の施設指導者に大学教育の実態を理解してもらうための研修会を臨地実習指導者会議で行い、歯科衛生士教育の現状を理解していただくことができた。（根拠資料：臨地実習指導者会議議事録）

2) 学生支援

上記の a に一部含まれる。（①教養ゼミの定着）

②未修得単位の多い学生への対応・支援

歯科学基礎分野での定期試験不合格者が多く、希望者に対して集中的に補習を行った。担任は前後期の単位取得状況を把握し、時には保護者を交えて今後の対策を話し合い前向きな解決策を検討した。

③学生生活に問題のある学生への対応・支援

担任が学生面談を通して指導することに加え、中には学生相談室を紹介するなど積極的に支援した。（根拠資料：面談記録表）

④国家試験対策

専門基礎・専門分野の補講並びに校内模試・業者模試を実施し、現役卒業生を全員合格させることができた。過年度生の 1 名は当学科の国家試験対策支援を受けず、個人で取り組んだが不合格となった。（根拠資料：国家試験対策委員会議事録、学科会議議事録）

⑤ 就職・進学支援 国家試験合格者の内 58 名が病院・診療所・企業などに就職し、1 名は東京医科歯科大学大学院に進学した。（根拠資料：学科会議議事録） c. 社会活動、研究活動、など： ①口腔保健研究センターでは、附属幼稚園・常盤女子高校・ときわ健康フェアにて歯科健診ならびに口腔機能に関する検査を行い、口腔の健康維持に努めている。 ②子育て支援センター「えん」にて、出前講座を行うとともに、子供のフッ素塗布を実施している。 ③長田区における地域保健事業（こどものむし歯予防のための検討会、長田区民まちづくり会議のにこやか部会など）に参画している。 ④グランフロント大阪の「大学都市KOBE！発信プロジェクト」にて、6月20日～7月19日と1月23日～2月20日の2回、人の健康に関わる歯科衛生士の魅力を発信した。
次年度の課題 ① 新採用教員4名を迎えての更なる歯科衛生士教育の充実を図る ② 平成28年度のカリキュラム改正を実現する ③ 過年度生増加の要因を分析し、学生の学力向上の方策を考える ④ 教員の資質向上を図る

5. 短期大学部 看護学科通信制課程 (CCN) 年間活動報告書
 課程長 高宮 洋子

基礎データ							
	入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	在籍延期者数		卒業者数
1 年	181	181	6	0			
2 年～	204	371	37	14		175	148
休退学等の理由：本人の健康問題、家族の介護、経済的困難、学習力の不足 ※在籍者数はH26.5.1現在、他欄は年度中の動向							
学科目標資格：看護師国家資格取得状況							
受験者数	147人	合格者数	111人	合格率（％）	75.5％		
既卒者	102人		45人		44.1％		
本年度の課題							
1．関東地域における学生確保、実習地確保の強化 2．学修支援の強化、特に在籍 3 年目、4 年目の学生の学習の進捗状況の確認と指導 3．国家試験対策の強化 4．実習評価についてさらに検討を継続して、教育内容の向上を図る							
本年度の目標・方針							
1) 関東地域における学生確保および臨地実習指導者との交流を深め安定的な実習施設の確保を図る。 2) 国家試験対策の強化—国家試験対策委員会の提案の確認と実施・既卒者への対策強化 3) 学修支援強化—入学時学習ガイダンスの充実、学修困難学生への個別指導。 入学予定者のプレカレッジの充実。 4) 教育内容の充実では、学生の授業評価をふまえて各領域における教育力の充実をはかる。また実習評価の妥当性の検討を継続し、教育力の充実を図る。							
主な活動内容							
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1) について 関東地域における広報活動は、関東進出委員会を中心に精力的に実施した。問い合わせ数も増加し、今年度関東地域からの受験生は全体の 22.3％であった。実習施設については、卒業生やインターネット情報等を駆使して訪問活動を展開し、東京・千葉・神奈川・静岡の各都県において実習施設を確保し、現時点での学生数に必要な全領域の実習施設の確保ができた。また今年度実習を依頼した施設の看護部長推薦を受けての受験も数件あった。今後とも広報活動を強化し関東地域の学生数を増加させることと、それに見合う安定的な実習地確保は課題である。（関東進出委員会記録、通信教育委員会記録、臨地実習検討委員会記録） 2) について 国家試験対策への支援の強化は課題であり、国家試験対策委員会を中心として活動を強							

化した。1つは入学式後の時間を学習の場と位置付け、学習の進め方の説明と共に国家試験対策として、関連業者の協力も得て学習への動機付けとした。また在籍学生に対しては各領域の概論および実習スクーリングにおいて国試対策の学習支援を行った。課題である既卒性へは電話による励ましや情報の提供の強化を図った。結果的に新卒者 75.5%、既卒者 44.1%と昨年度を上回ることができた。しかし在籍者の日常学習強化と国試への取り組み、既卒生対策強化が今後の課題である。（国家試験対策委員会記録、課程会議記録）

3) について

入学時学習ガイダンスは事前に入学生に周知し、学修進度と教科目全体像のイメージ化をしやすいよう改善し、時間も十分に使って学習説明を行ったことで、学習の進め方等の理解が深まったと考えられる。その後の学修相談では学習の進め方よりも、学習内容に対する質問や相談が増えたことから、学習の導入に効果的であったと評価する。入学予定者へのプレカレッジは毎年内容の検討をしており、今年度参加者は95名で入学予定者の約半数であった。受講後のアンケートでは自主学習の重要性や文献検索についての理解の深まりが読み取れ、全体としてレポートを書くことへの意識付けとなっている。

学修支援については、全学生に学習の進捗状況に応じた手紙を送るとともに、各教員による個別指導を行ってきたが、さらに個別指導を強化することが課題と考えられる。

学修相談の特別企画として、看護学概論、病原微生物・免疫学、母性看護学の学習会を実施し参加者には好評であった。予約制の学修相談は28名にとどまった。電話による予約外の相談が33名となっていることは、学生の置かれている学習環境の反映とも考えられる。CCNのQ&Aの活用を学生に進めているが一部の学生にとどまっており、さらに周知が必要である。3年目、4年目の学生への学修支援には課題を残した。（課程会議記録、教務委員記録、入試広報委員会記録、学修相談記録）

4) について

学生による授業評価については、各教員の自己評価と課題について課程内での確認もされ、授業内容への工夫が図られている。又実習評価の妥当性についてはすべての領域について課程内FDにおいて論議し、全体としての総括を行った。共通の成果として各領域の具体的な見直し、評価方法の基本の学びと確認ができ、更なる改善点が各教員において明確になったことである。（自己点検評価委員記録、課程会議記録、FD会議記録）

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 課程運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：

1) 教科運営、主にカリキュラムについて

①教科運営に関しては、課程内教授会議（月1回）において通信課程の総括的な運営について審議検討し、課程会議において的確な問題提起及び審議ができるようにしている。月1回の定例課程会議においては、委員会活動や領域別の学生指導上の問題及び課題について審議し問題の共有、解決への方向性の確認をおこなっている。（課程内教授会議記録、課程会議記録）

②a4) に前述したとおり、前年度に引き続き臨地実習の評価の妥当性について検討を

行い、領域の特徴をふまえ教員間の認識の向上を図った。（臨地実習委員会記録、FD 会議記録） ③「学生による授業評価」は各教員共に誠実に受け止め、内容の分析による自己の振り返りと改善点が検討されている。課程会議においても確認され教員の教育力向上に活用されている。 ④年度初めの看護専門科目における添削指導員との連絡会議において、教育目標および学生の動向、当面の課題についての意見交換を行っているが、出席の指導員に限られる傾向があるが、各担当教員との連携は図られている。（添削指導員連絡会議録） ⑤臨地実習科目の運営に関しては、「臨地実習委員会」が中心となりカリキュラムポリシー、アドミッションポリシーに基づき、臨地実習オリエンテーションの在り方を検討し充実化を図った。また臨地実習のしおり（指導者用）の改善を行い、臨地実習指導者に教育目標の明確化と共有を図った。又施設が企画する実習指導者会議には積極的に参加し、臨地実習指導者との交流をはかった。また、学生の学習の進捗状況と関連して、臨地実習地の確保の方向性を出し、臨地実習及び実習スクーリングの配置を行った。（臨地実習委員会記録） 2) 学生支援 ①前述のとおり、入学時の学習ガイダンスの充実により、スクーリング学習とテキスト学習についての理解が深まり、通信制課程での学修プログラムの作成の仕方、具体的にどのように学習を進めるかがイメージできるようにした。プレカレッジでのレポートの書き方のレクチャーも一定の効果を果たしている。学修相談については前述のとおりである。国家試験に対しては、昨年の結果を踏まえ、国家試験対策委員の積極的な活動を中心に各領域においての学生指導を意識的に進めてきた。結果的には昨年度より新卒で 3.9 ポイント既卒で 9.9 ポイントとアップし、一定の成果がみられたが、全国平均を下回ったことを受け止め、さらにきめ細かな学生支援が必要である。 3) FD への学科としての取り組み 課程内 FD 研修は、FD 委員を中心として適切に実施されている。内容については前述のとおりである。	<u>c. 社会活動、研究活動、など：</u> 社会活動では、他の専門学校への非常勤講師や（4 人）看護協会主催の研修講師（1 人）である。又全国通信制課程看護学校協議会に参加して、情報の交換および協議会での一定の役割を担っている。 研究活動では、科研費による研究の継続、テーマ別研究の紀要への掲載が 1 編となっている。また看護系学会で 4 人が発表をおこなった。 次年度の課題 教育方法の充実を図り学生の学習力を向上に取り組む。 ・ 3年目、4年目の在籍延期者への学修支援の強化 ・ 学生確保と実習地確保 ・ 国家試験対策の強化
--	---

6. 教育イノベーション機構 年間活動報告書

機構長 柳 敏晴

本年度の課題
教育の質保証を実現するために、教育体系を見直し、基幹教育を幹とする教育イノベーションを行う。併せて、カリキュラム内外を問わず、「大学教育」全体を通し必要なものを選択しつつ、時代の変化に対応する教育技法を導入し、常盤大学の基幹教育のシステム構築を課題とした。また、学生・教職員への幅広い活動を通して、学内外にリベラルな雰囲気醸成し、神戸常盤大学ブランドを幅広く周知させる。
本年度の目標・方針
1. 機構開設記念講演会・研修会の実施、2. COC、AP等への主体的取組外部資金の獲得、と、3. 機構員研修会の実施、4. 理念、カリキュラム、教育方法、リテラシー、基礎学力テスト検討のワーキンググループ作業、5. 教職員自由学習会の開催、6. 学生リーダーの養成、7. 教育イノベーションニュースの発行、8. その他、を実施する
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 講演会：4、研修会：1、防災研修会（案内）、manaba 研修会（案内）を共催した。 2. COC：3、採択されなかった。AP：3、採択されなかった。外部資金獲得：1（提出書類） 3. 研修会：2、機構会議時に3回の研修と平成27年3月に宿泊研修を実施した。（報告） 4. ワーキング：2、学長からの諮問に対し答申を作成した。（答申 20150113） 5. 自由学習会：4 6. 学生リーダー養成：4 7. ニュースの発刊：3、いのべっち通信 No.001 を発刊した。（ニュース 001） 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 学科運営における主な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 教育イノベーション機構会議 第1回～第35回議事録 2. COC(Center Of Community)公募事業への申請書作成協力「大学と地域が織りなすユニフィケーション - 省察的実践力の育成 - 」 3. AP(Acceleration Program)公募事業への申請書作成「“自ら考え行動する”いのちを支えるスペシャリストの養成」：大学、「電脳から手動への回帰 - 自ら考え行動する歯科衛生士 - 」短期大学部 4. 震災関連プロジェクト（東日本大震災復興プロジェクト）協力 5. 教育イノベーション機構会議開催時研修会（教育する者の自己教育）、（コンセンサス実習「サバイバル」）、（知の主体としての身体）実施 6. 教育イノベーション機構宿泊研修会（アイスブレイクとクロージング）、（人間関係づくりトレーニング）、（学外オリエンテーションプログラム指導の進め方）実施

7. 神戸常盤大学の基幹教育について（答申）作成 8. イノベッチ通信 No.001 発刊 9. 大学生基礎力調査導入への準備 10. 理事会への報告（2月） 11. 運営委員会への報告（第1回、第2回、第3回、第9回） 12. 学生便覧掲載原稿作成（2015年度学生便覧 p77-18） 13. キャリア基礎科目実施（2014年度シラバス） 14. 機構員の外部研修会派遣（10回） 15. 基幹教育科目の検討チームⅠ、チームⅡの検討会議（6+8=14回） 16. 基幹教育科目について各学科への説明会と意見交換会（5回） 17. 新規特許出願（円形・回転式カラーボード（「アクティブカラボー」（仮称））申請 18. その他 c. 社会活動、研究活動、など： 1. 震災関連プロジェクト（東日本大震災復興プロジェクト）協力 2. その他
次年度の課題 1. 教育イノベーションへの積極的取組（全学との協働・協力） 2. キャリア基礎科目の発展充実による実施 2. 基幹教育科目（カーネル、リベラルアーツ、リテラシー科目（案））の設定 3. 大学生基礎力調査の実施と結果活用の検討（IR室との協力） 4. 教育イノベーションに関わるリカレント教育の検討（地域協力課との協力） 5. 教育イノベーションに関わる震災関連事業の検討（地域協力課、ボランティアセンターとの協力） 6. 教育イノベーションニュースの発行 7. その他

II. 学内組織別 年間活動報告書

1. 入試広報委員会 年間活動報告

委員長 瀬川 和子

本年度の課題
1. 全学科の共通の目標は、次の 1)～3)である。 1)志願者の増員 2)定員の充足 3)基礎学力の担保と確固たる目的意識の入学生確保 2. N科通信制課程での志願者増に向けての広報強化 3. 平成 28 年度入試科目・出題範囲の検討と確定（国語・英語科目）
本年度の活動方針・目標
1. 全学科の特徴・魅力の徹底した広報活動により、アドミッション・ポリシーに適合した志願者を増やすことで、定員を確保する。 2. N科通信制課程では関東方面で指導基盤を確立し、入試方法・受験機会を増やし、あらたな志願者層を開拓する。 3. 平成 28 年度入試国・英科目・出題範囲について、各科の入試広報委員が中心となり、問題作成者と共に協議・検討し確定。受験生・高校等関係者へ周知する。
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u>：（H. 27 大学案内・入試要項・受験ガイド、入試広報委員会議事録） ・入試広報委員会：H. 26 4 月の第 1 回入試広報委員会で入試業務に関して委員全員で確認し、広報活動と入試運営に関して各委員が遂行 1. 広報活動 ・平成 27 年度入学者選抜試験用の大学案内・入試要項・受験ガイドの作成 ・各科指定校の選定と高校訪問者の確定およびその実施 ・オープンキャンパスの内容と担当者の検討ならびに実施後の反省と次年度への課題のまとめ ・CCN に前年度導入した自己推薦入試の周知および、関東地区病院訪問の強化 2. 入試運営 ・後期からは予定の入試の実施、および合否判定部会委員として合格判定教授会の各科合格者原案作成。併行して平成 27 年度入学者選抜入試の結果を参考にしながら平成 28 年度入学者選抜試験の概要作成。 目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u>：（入試広報委員会議事録） 1. 広報活動 (1)～(3)の数値は3月末までの実施分を記載 (1) 高校訪問：課員を中心に推薦入試および一般入試の出願依頼に県内・県外併せて約 500 校訪問に及んだ。各科教員も M 科は大阪・奈良地区、O 科は岡山を重点的に訪問した。今年度も以前から力を入れている東播・西播地区は訪問を重ねた。また阪神地区も重点的

に訪問したことにより本学とのネットワークも飛躍的に広がり、入学者増加につながっている。

(2) 本学主催進路説明会：姫路 6 月 17 日、本学 6 月 23 日（高校教員約 50 人出席）

(3) 高校での模擬授業・進学ガイダンス：全体で約 150 会場参加。講義は委員以外の教員にも依頼した。高校から直接依頼の「出張講義」「出前授業」等も増えている。

(4) キャンパス見学会：6, 7, 8, 9 月の 4 回を計画したが、8 月台風のため中止した。そのため全体では H26 より約 600 人減の 1500 人となった。9 月以降も週末ごとに個別相談で対応した。

(5) 入試広報課を中心に学科教員も西日本の過去実績のある高校に出向き、地方での募集活動に努めた。

(6) E 科の推薦志願者が予想より低迷したこともあり、一般入試以降に向け、西日本の広報を強化した。

(7) CCN の指導拠点を関東にも設置。課程教員も関東方面の実習先病院や看護協会訪問を繰り返し、説明と過去在籍者他、関係者への DM・大学案内送付等々で周知を図った。

2. 入試運営

(1) 平成 27 年度入学者選抜試験での総志願者数は 1,182 名で昨年度より 115 名減少した。
・M 科では一般入試以降でも増え、全体で 30 名増加の 367 名の志願者を集めることができた。新カリとなって初めての受験生は、公募推薦で理科 2 科目選択での混乱もなく、一般入試の理科では化学選択者が増えたことなどからも、理系のレベルの高い学生が確保できたと考えている。

・N 科では本年度も兵庫県下に養成校が新設され益々激化する中で、昨年度より 112 名少ない 467 名の志願者となった。科目範囲等で不安はあったが、歩留まりは高く、結果的には M 科同様学力の高い学生を確保できたと考えられる。

・E 科では今年度推薦入試では昨年より志願者は 39 名減少したが、高い歩留まりとなった。また、年度途中の広報強化により一般入試以降西日本から出願も増え四大化に伴いこれまでとは異なる志願者層が集まった。

・O 科では関西圏に 4 年生大学が新設されたこともあり、例年以上に関心が高まり公募の岡山会場に志願者があり、全体では昨年度より 13 名増加の志願者総数となった。

・N 科通信制課程では導入 2 年目の自己推薦入試に関東地区も含め志願者があり、志願者総数は 186 名となった。

(2) 平成 27 年度通学課程の入学者数は、M 科 94 名、N 科 85 名（他編入学 2 名）、E 科 84 名、O 科 76 名総数 335 名である。近年多くの大学が定員を確保できない状況の中で、本学は昨年度に引き続き通学課程の全学科で定員を充足した。看護学科通信制課程の入学者数は 145 名である。250 名の定員を満たすことはできなかったものの、准看護師という対象者が減少する中、関東からの出願も増加し新入試方法での志願者も集まり、入学者を確保できた。

3. 入試問題

入試科目：平成 27 年度入試より、数学・理科に関しては新カリ履修者が受験するため、旧カリ履修者対応も含めホームページ等でも早期に各科の出題科目・出題範囲について

公表、周知を図った。問題作成者も交えて、各学科のアドミッション・ポリシーをはじめ、出題範囲を再確認後、作成を実施した。なお、H.28 年度入試に関しても、国語・英語について確定、公表済みである。
次年度の課題
1. 全学科共通の目標は継続して次の 1)～3)である。 1)志願者の増員 2)定員の充足 3)基礎学力の担保と確固たる目的意識の入学生確保 ・ M 科では、医療検査と細胞検査分野の教育内容と実績、および文系入学者へのケア態勢の広報強化。理系医療系志願者層の継続的な確保。 ・ N/E 科は関西圏での同系統養成校との差別化。本学独自の教育理念・教育内容の周知 ・ O 科は、4 大や専門学校との差別化。本学独自の教育理念、施設設備の充実度、求人数や求人先と就職先等実績情報の発信 ・ CCN は、関東地区も含めた志願者開拓と自己推薦入試回数増についての周知。 2. 平成 28 年度入試科目・出題範囲の変更点の周知。 3. 受験生対象の受験ガイダンス、模擬授業等々依頼も増加傾向にある。入試日程の見直しも含め、問題作成者や教職員の入試業務の負担感を軽減し、なおかつ入試実施においては安全・公正性を念頭におきつつ体制を整備する。 4. 地方会場の設定やセンター試験利用入試など他府県から学生確保の体制はとっているが、全国的に志願者が増えているとは言えない。DM,受験情報誌だけでなく、県外の高校と受験生に直接広報する機会の設定およびホームページの充実を他組織と連携しながら強化したい。
活動内容の補足
平成 27 年 1 月に実施したセンター試験では、受け入れ人数が平成 26 年度から 490 人へ増加し、10 試験場を設置した。監督業務も多くの教職員が 2 日連続担当となった。その上、今年度は新カリ対応や機器更新に伴う変更点も多く複雑化したが、事前に、主任監督者会議、監督者会議、全体説明会、2 度のリスニング会議を開催し、これらへの教職員の出席率は高く、内容の共通認識、理解のもと実施できた。他大学ではトラブルが発生する中、本学では監督者全員の的確な判断と対応により無事終了することができた。

2. 教務委員会 年間活動報告

委員長 長尾 厚子

本年度の課題
1. 文部科学省、中央教育審議会の答申による「大学の教育の質向上」を受けて、授業時間の確保・成績評価（GPA制度の導入）・学生の主体性を引き出す授業方法の導入等、実施における課題を検討する。 2. 医療検査学科・口腔保健学科のカリキュラム改正に伴う運営上の課題について検討する。 3. 第3者評価(認証評価)を受けての課題に取り組む。
本年度の活動方針・目標
<活動方針> 教育課程の編成および運営を円滑に進めると同時に、学生の学ぶ権利を擁護し、教務の運営にあたる。 <活動目標> 1. 授業時間数の確保・学生の主体性を引き出す授業方法の導入に伴う、時間割上の課題や学習環境としての教室の確保に関する課題について検討する。 2. GPA制度の実施に関する課題について検討する。 3. 医療検査学科・口腔保健学科のカリキュラム改正に伴う運営上の課題を検討する。 4. 各学科のカリキュラム運営上の課題について検討する。 5. 第3者評価(認証評価)を受けての課題に取り組む。
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：教務委員会会議記録</u> 1. 授業時間数の確保・学生の主体性を引き出す授業方法の導入に伴う、時間割上の課題や学習環境としての教室の確保に関する課題について検討する。 1) 学生の主体性を引き出す授業方法の導入（アクティブラーニング等）に伴い、学習環境として6号館・4101教室等、補助金を受けて整備されてきたが、時間割作成時に教員の学習方法の希望に沿った学習環境が整うよう、各学科からの意見を調整する。 ・6号館のアクティブラーニング可能教室の予約が可能になり、4104教室も含めて学習方法に沿った学習環境の整備が進んでいる。 2) Wi-Fiの環境が整備された場合、教育内容・方法に沿った使用法について検討する。 ・今年度から全館Wi-Fiの環境が整備され、教育方法に反映できるようになった。 3) 2号館（旧体育館）の改修に伴う教室の利用について検討する。 ・各学科の特性を生かし、改修時の教務委員会案について検討した。 4) その他 ・manaba(授業支援システム)の導入に伴う教務委員としての役割について研修会をとおして確認する。 2. GPA制度の実施に関する課題について検討する。 1) 授業評価とGPAの関係について、今年度の傾向について検討する。 ・導入後1年目のため、今後4年間を通しての評価を行っていく必要がある。

2)学生への「利用方法について」についての確認 - 各学科での学修指導(各種資格取得に向けての指導等)にどのように生かせるか、今後の検討課題である。 3. 医療検査学科・口腔保健学科のカリキュラム改正に伴う運営上の課題についての検討。 1)医療検査学科の改正カリキュラムの運営上の課題について検討する。 - 旧カリキュラムの学生は入学当初のカリキュラムの運用となるため対応策が必要。 2)口腔保健学科の運営上の課題について検討する。 - カリキュラム改正に向けて、学科でカリキュラム会議を開催し課題の抽出と改善方法を検討している。またそれに伴う過年度生の対応策が必要である。 4. 各学科のカリキュラム運営上の課題について検討する。 1)M・N・O科の履修規程(内規)を検討する。 - M科は検討したが内規の改正には至らない。N科は旧カリキュラムの学生への対応が必要。O科は繰り越し再試をなくすことによって学生の意欲的な取り組みを期待する。 2)E科は、完成年度に向けて履修規程(内規)を検討した。 5. 第3者評価(認証評価)を受けての課題に取り組む。 1)認証評価の結果は「適合」であるため、問題なし。 6. その他 1)各学科のカリキュラムマップを「学生便覧」に掲載するにあたり、様式の統一を図る方向で検討する。 目標達成度の評価：①できた 2. ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b.委員会・組織の主要な活動内容(根拠資料・記録)：教務委員会会議記録 1.年間14回の委員会を開催し、以下の内容について検討し、必要に応じて「運営委員会」「教授会」への審議事項・報告事項とした。 1)各学科のカリキュラムに関する事項の検討 2)年間行事予定の確定に向けての検討 3)時間割(試験時間割・追再試時間割含む)の確定に向けての調整 4)卒業および除籍に関する事項 5)既修得単位の認定についての検討 6)科目等履修生に関する事項の検討 2.全学FDへの協賛 1) manaba 研修会	次年度の課題 1. 文部科学省、中央教育審議会の答申による「大学の教育の質向上」を受けて、学生の主体性を引き出す授業方法の導入等、実施における課題を検討する。特に、昨年度導入したmanaba(授業支援システム)の実施・運営に関する事項について検討する。 2. GPA制度の実施に関する課題について検討する。 3. 教育イノベーション機構の答申から各学科の教養科目の運用上の課題を検討する。 4. 2号館の改築・3号館の改修に伴う教室運用に関する事項について検討する。 5. こども教育学科完成年度に伴うカリキュラムの検討を行う。 6. 医療検査学科 指定規則改正に伴うカリキュラム改正を検討する。
---	---

3. 学生委員会 年間活動報告

委員長 岩越 美恵

本年度の課題
学生生活全般の充実をはかるための方法を検討し、実行する。特に学習環境の整備、課外活動の支援、さらに安全な学生生活の確保に重点を置く。
本年度の活動方針・目標
1.学生自治会活動に対する助言、指導 2.各種奨学金推薦者の選考、及び指導 3.学生生活の安全、快適を守り、地域社会とのトラブルに対する対応と予防 4.新入生オリエンテーションに関する活動
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 学外オリエンテーション、新入生歓迎会の実施。 2. 日本学生支援機構奨学金、学内修学支援奨学金の募集 3. 学生生活の安全・快適の強化と、地域社会とのトラブルの防止と対応の強化 4. 学園祭の実施、自治会予算・決算の指導 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 定例学生委員会の開催と討議 2. 第56回全神戸短期大学総合体育大会、第49回全国私立短期大学体育大会への参加 3. 謝恩会の開催に関する助言・指導 4. 「学生の満足度に関するアンケート調査」の実施 5. 禁煙すすめ隊の委員会内設置（小委員会） 6.防犯や通学路の安全の強化 7.兵庫地区大学月曜懇談会への参加（5月、9月、12月） 8.自治会運動部の各種大会出場旅費等補助に関する内規の見直し。 9.学生ロッカー使用料の見直し。
次年度の課題
・次々年度学外オリエンテーションの場所とあり方の検討（イノベーション機構との調整） ・喫煙の保健指導の実施にむけての準備
活動内容の補足
今年度の学生委員会の主な活動は次の通りである。 1. 新入生学外オリエンテーションの実施 H26年4月4日5日グリーンピア三木において、欠席は2名のみで、「常盤シンポジウム」では今回初めて在学生たちの手で大学生活の紹介を行い、教員からも高い満足度が得られた。 2. 各種奨学金推薦者の選考、及び指導 日本学生支援機構奨学金は、一種は大学195名、短期大学部50名、二種は大学382名、短期大学部73名となり、在籍者に対する奨学生の割合は57%に昇った。学内奨学金の修

学支援奨学金は、新入生は 12 名、在學生は 29 名、緊急対応は 1 名を選考した。日本学生支援機構の廃止基準が明確化され、年度末に次年度の廃止が大学 11 名、短大 7 名判定された。

3. 学生自治会活動に対する助言、指導

1) 新入生歓迎会

5 月 17. (土) メインホール、ハローホールにて、自治会主催の上記新入生歓迎会を行い、立食パーティや、ダンス部および軽音楽部による演奏などが披露された。

2) 自治会予算、決算

昨年度決算及び本年度予算案を報告させ、その遺漏・誤謬なきことを確認した。

3) 学園祭

11 月 23・24 日に、本学キャンパスを中心に行われた。新学舎増設、学生数の増加にあたり「tokiwwer#笑顔と絆を拡散希望！」をテーマに掲げ、参加総数は 2 日でのべ約 1500 名に昇った。

4. 第 56 回全神戸短期大学総合体育大会

7 月 6 日 (日) バスケットボール部、バレー部、バドミントン部、テニス部、卓球部の 5 種目に参加した。このうち、本校は男女バスケットボールの会場となり、5 短期大学の学生が集った。なお、第 49 回全国私立短期大学体育大会への参加は口腔保健学科から卓球部 1 名が参加した。→1 名の場合など、旅費等費用負担の検討を行った。

5. 卒業式、および卒業記念パーティ (謝恩会)

平成 27 年 3 月 14 日に謝恩会が、神戸メリケンパークオリエンタルホテルにて学科ごとに学位記授与式後に開催された。

6. リーダーズ研修の実施

平成 27 年 2 月 27 日、4104 教室にて開催した。

7. 「学生の満足度に関するアンケート調査」

学生生活の実態把握と要望を把握するための学生の満足度に関するアンケート調査項目を検討し、1 月～3 月にかけて調査を行った。

8. 兵庫地区大学月曜懇談会への参加

学生の安全強化のため、日中の警備員配置校について調査した。その結果、1 校にのみ配置がなく、配置の起案を行った。結果、防犯カメラが増設された。(9)

9. 学生生活の安全、快適を守り、地域社会とのトラブルへの対応と予防

1) 学生の喫煙に対し、小委員会 (禁煙すすめ隊) を立ち上げ、学生部以外の有志も加わり定例会の開催、定期パトロール、組織全体と喫煙者への対応の研修を行った。

2) 通学路の見回り (マナー、安全のため)

4 月 12 日～5 月 16 日の 1 か月間、学生委員会の教職員が持ち回りで実施した。

10 これまでの使用状況や鍵の返却状況を鑑みて、学生ロッカーの使用料とロッカーのカギ代 (預り金) の見直しを行った。

4. 自己点検・評価委員会 年間活動報告

委員長 井本 しおん

本年度の課題
・ 改善・向上に有用な情報の共有化を「学生による授業評価」以外にも広げる ・ 日本高等教育評価機構による大学認証評価を適正に受審する ・ 年次報告書の大学ホームページ掲載など情報公開を推進する
本年度の活動方針・目標
年間活動方針： 「自己点検・評価報告書（年次報告書）の大学ホームページ掲載をめざして」 目標： ・ 改善・向上に有用な情報の共有化を「学生による授業評価」以外にも広げる ・ 日本高等教育評価機構による大学認証評価を適正に受審する ・ 年次報告書に基づく PDCA サイクルのさらなる充実
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1) 年次報告書の大学ホームページ掲載 平成 25 年度年次報告書のうち教員個人の活動報告を除くほぼ全文を大学ホームページに掲載することができた。詳細は年次報告書の第 3 部に記載する。 2) 改善・向上に有用な情報の共有化を「学生による授業評価」以外にも広げる 「卒業生へのアンケート」を教育改善に活用する取組を昨年度に引き続き行った。詳細は第 4 部に記載する。 3) 大学認証評価を適正に受審する 「自己点検評価書」作成をオンライン化したことで効率的に作業を進めることができた。認証評価では「適合」との判定を得ることができた。詳細は第 3 部、第 5 部参照。 4) 年次報告書に基づく PDCA サイクルのさらなる充実 昨年度から開始した「年次報告書に基づく評価報告」を本年度も遂行。年次報告書の改定様式による記載が 2 年目に入ったことで、いずれの委員会・組織においても昨年より PDCA サイクルへの意識の高まりが感じられた。 目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 「学生による授業評価」を授業改善に活用する取り組みを全学科で共有する取り組みを本年度も継続して実施した。
次年度の課題
年次報告書による評価活動だけでなく、大学全体の目標に対する自己点検・評価を数年に 1 度実施する体制を構築すること

5. FD 委員会 年間活動報告

委員長 畑 吉節未

本年度の課題				
1) 全学研修会は、早期に内容および講師の検討を行う等、迅速かつ計画的に企画・運営する必要がある。 2) 公開授業の活性化に向けた更なる検討が必要である。 3) 関西地区 FD 連絡協議会関連の研修会等への積極的な参加を促す工夫について検討する必要がある。 4) KTU や新たに設置された教育イノベーション推進機構と協議する機会を設定し、活動内容および役割分担等について検討する必要がある。				
本年度の活動方針・目標				
1) 本年度は FD 委員会が先導した基礎固めの段階から、本学の教育内容に適した FD 活動への発展的展開を目指し、各専門領域の教育、研究の好循環を育むとともに、大学全体として学科間連携を図りながら、教育、研究活動の成果を共有し、教育組織の強化に生かす。また、そのための教員の意識改革を進める必要がある。 2) そのため例えば、各学部学科で実施している公開授業の機会、専門分野・課題ごとに設置された各種センターや機構の活動の機会等を通して、専門職種間で連携して力を発揮できる人材の育成に向けた教育・研究のあり方について検討・試行を行い、その成果を教員に還元する。 3) 本学は「FD の学科間連携」をテーマに、関西地区 FD 連絡協議会（147 校で構成）による「関西 FD パイロット校」となっており（2008～）、活動報告を前提に同 WG からの支援を受けることができるが、ここ数年間活動が滞っており、来年度関西 FD 連絡協議会での FD 活動の報告を行わなければならない。				
主な活動内容				
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 大学開設以降（7 年間）の中で参加率が一番高い年度となった。				
開催日	テーマ	講師	概要	参加者
4月3日	「新教職員の研修会」	学長 法人本部長 関係課課長	①FD委員会より大学の特徴を映像と音楽で紹介する導入を工夫した。 ②各講師から資料を用い説明。	参加者14名 参加率100%
7月26日	「教職員の能力開発を目指して－神戸常盤大学の過去・現在・未来（センター・機構はその機能を果たしつつあるのか）」	以下のセンター長 KTUセンター 地域交流センター 国際交流センター 教育イノベーション	教育・研究活動の中心となるセンター・機構の責任者が教育と研究の好循環について、それぞれの専門領域を踏まえ、報告・意見交換を行った（参加者のアンケート資料あり）	参加者88名 参加率 60.3% 教員77名 (74.8%) 職員11名 (25.6%)

9月20日	「大学教員として教育と研究の良い循環を目指す意義」	上田國寛学長	学術フォーラムにおいて学長による講演を行った。	参加者81,参加率55.5% 教員69人 (67.0%)
-------	---------------------------	--------	-------------------------	------------------------------------

目標達成度の評価：1.できた ②ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：

- ・ 会議は毎月1回定例化を原則とし計画的に会議を持ち活動を遂行した。合計9回開催

回	月日	委員会の議題
1	5月2日	1)今年度の活動方針 ①過去6年間の活動経過の分析(資料あり) ②FD委員会依頼による第1回センター長会議報告、 ③関西地区FD連絡協議会代表者会議の報告、会への参与貢献状況 総会でのピアレビューについて ④FD規約の確認 ⑤FDの定義、中教審の答申の確認 ⑥今年度の方針(委員長提案) 2)委員会の運営方法
2	6月2日	1)第1回研修会「神戸常盤大学の過去・現在・未来—センター、機構はその機能を果たしつつあるのか—」シンポジウムの広報と運営方法 2)第1回研修会の評価方法と内容の検討 3)関西地区FD連絡協議会総会参加報告 4)公開授業の周知方法の検討
3	7月7日	1)第1回研修会の運営のための役割分担 2)評価アンケートの検討 3)公開授業の促進に向けたFD
4	8月4日	1)第1回研修会の企画、運営方法の振り返り 2)第2回学術フォーラムでの学長講演「大学教員として教育と研究の良い循環を目指す意義」の広報方法と運営・評価方法の検討
5	9月5日	1)第2回FD研修会運営の役割分担 2)公開授業の勧めについて
6	10月27日	1)第1回研修会のアンケート集計結果と分析(資料あり) 結果の広報方法 2)認証評価現地調査に向けた準備 3)新しい学修ツール クラウド型LMS(manaba)の導入と有効活用方法の検討
7	12月8日	1)第2回研修会の評価 2)認証評価現地調査の実際の対応報告 3)公開授業の促進に向けた強化 4)次年度活動方針と事業案の提案(委員長案 資料あり) 5)学科内FD実施状況の確認 6)manaba研修会への協力について

8	2月16日	1)今年度の活動報告のまとめ(委員長案 資料あり) 2)次年度活動方針と事業案・予算(委員長案 資料あり) 3)関西地区FD連絡協議会の方向性
9	3月	1)神戸常盤大学FDあり方検討会について 2)次年度新入教職員オリエンテーション内容と役割の検討

関西地区FD連絡協議会への参加状況

出席回数4回(京都大学)出席率100%

月日	参加内容
4月14日	協議会幹事会(平成25年度の評価と今年度の方針共有)
5月	連絡協議会第7回総会、FD活動報告会2014
12月20日	FD連携企画WG主催研修会の運営担当 研修会テーマ「思考し表現する学生を育てるVI-コピペではなく自分の頭で考えさせるためのライティング指導」
1月24日	連絡協議会幹事会「今後の協議会活動について」

会議や研修会の他に会員校による「活動報告会」のポスター発表資料(堺女子短期大学)へのピアレビューとして発表内容へのコメントシートを提出した。

センター長会議へのFD委員会としての提案・報告内容を

活動が効果的に展開できるようセンター長会議の開催を依頼し、調整を行った。た

月日	参加者	内容(FD委員会からの提案意見)
4月30日	委員長	平成26年度の活動方針と事業予定について(資料あり) 過去6年間のFD委員会の活動経過の振り返り(資料あり)
10月8日		第1回FD研修の評価報告(評価資料あり)

次年度の課題

1) 各学科の教育構造が明らかになってきた。そして、アクティブラーニング手法を中心とする教育手法が当大学の中でも取り上げられるようになった。今後も教育手法については拍車がかかる事が予測される。このような教育環境の中で、教育目標が明らかになった次に着手すべきは教育評価の理解と研修であろう。更に本質に戻り専門職育成の大学教員に求められる教育力とは何かの問いかけが必要で有り、教員の教育に対する原点回帰となる本質的な理解と意識を高めるような取り組みを検討したい。

2) 大学の将来構造に基づき、FDの取り組みを5年間程度の見通しで検討する「神戸常盤大学FDあり方検討会」を設置し大学が発展していく中で、FDとして確実に役割を果たしたい。

6. カリキュラム等検証委員会 年間活動報告

委員長 上田 國寛

本年度の課題
学科横断的なカリキュラムの構築とカリキュラムのスリム化について
本年度の活動方針・目標
・全学的教養教育（キャリア教育含む）の推進について
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：カリキュラム等検証委員会議事録</u> ・教育イノベーション機構の開設に伴い、初年次教育の一部と「キャリア基礎（キャリア入門）」を含む全学的な共通教育の推進を図るべく会議を実施した。来年度は、イノベーション機構などとともに各学科と調整しつつ、全学共通教養科目の実施に向けた準備を行う。同時に各学科のカリキュラムのスリム化も図る。 ・M 科の入試および基礎学力向上についての会議を行った。その中で多くの学生が躓くトリガー科目の存在が明らかとなった。そのため 1 年前期の科目およびその時期の科目構成の検討が重要であることが明らかとなった。M 科会議での検討を要請した。 目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた ③あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：カリキュラム等検証委員会議事録および学長室会議議事録</u> ・ACDポリシーの改訂（学科同士の整合性について検証） ・「キャリア基礎」の教育方法および内容について検証 ・初年次教育の在り方について検証 ・カリキュラムを考慮した人事について検討 ・「IR室」メンバーとの合同会議の開催 ・26 年度で本委員会を発展的解消し、次年度からは学長のさらなるガバナンスの強化のための学長室会議を開催し、タスクフォース型部会による会議を実施する。そのための準備として、委員会、センターとの合同会議を実施した。
次年度の課題
カリキュラム等の検証に関しては、学長室会議で検討する。

7. 図書・紀要委員会 年間活動報告

委員長 尾上 新太郎

本年度の課題
・ 学生目線の図書館運営について検討する ・ 紀要論文の掲載方針を確認する
本年度の活動方針・目標
・ 学生に親しまれる図書館に ・ 紀要、緑葉の投稿規程の見直し ・ 査読内規の見直し
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：図書館利用状況報告書</u> ・ 入館者数 39766 人（昨年比 18%増） ・ 読書活動のきっかけづくりや継続的な読書習慣の形成のために「読書マラソン」を実施することにより、学生への図書館アピールをはかった。読書マラソンの開催（5 月教授会にて開催中の報告） ・ ビブリオ KoToLa の学生への広報および、8 月教授会での今年度新規受入図書の推薦依頼と利用状況報告を行った。ビブリオ KoToLa により、読書への興味喚起のきっかけづくりができたと思われる。前期間で 228 回の貸出があったことは、評価できるが、本年度新たに教職員推薦図書の継続購入をする予定であったが、推薦は 5 名のみで、新規購入も 20 冊程度にとどまったため、新たな興味を呼び起こすことができず、後期貸出数は累積 381 回で前期ほどの伸びが見られなかったことは残念である。来年度継続購入の際には、図書推薦の依頼方法等について再検討の必要がある。 ・ 紀要・緑葉投稿規程、執筆要領の変更の報告（10 月教授会）。記載のあいまいな点や引用文献の記載方法などを整理し、投稿者にわかりやすい規程に変更した。 ・ 「緑葉第 9 号」発行（11 月） ・ 「紀要第 8 号」発行（3 月） ・ 学術フォーラム抄録の発行（9 月） ・ 査読内規について検討し、査読方針について委員会内のコンセンサスを得た。審査表についての検討を行い、修正した。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u> 紀要・緑葉編集委員会を含め 6 回の委員会を開催した。検討内容については次の通り。 第 1 回（平成 26 年 4 月 22 日） ・ 今年度活動方針について ・ 紀要・緑葉投稿規程の変更について ・ 図書館利用状況報告 ・ 来年度購入雑誌について各学科に持ち帰り意見集約 第 2 回（平成 26 年 5 月 14 日） ・ 紀要・緑葉投稿規程の修正について

- ・執筆要領の見直し
- ・投稿の呼びかけについて
- ・読書マラソンについて
- ・今年度図書館実施事業について

第3回（平成26年8月6日）

- ・緑葉発行について
- ・紀要の位置づけについて、投稿の呼びかけについて
- ・学術フォーラム抄録の発行について
- ・来年度購入雑誌について
- ・来年度電子ジャーナル契約について
- ・読書マラソンルールについて
- ・学生サポーターについて
- ・開館時間延長希望のアンケート実施について
- ・ビブリオ KoToLa の今年度購入図書の推薦について
- ・図書館利用マナーについて

第4回（平成26年10月8日）

- ・紀要発行スケジュール、査読について
- ・紀要・緑葉投稿規程について ・執筆要領について
- ・投稿時の書類様式について（誓約書・著作権委譲書）
- ・査読審査表について
- ・ブックリユース実施報告
- ・オンデマンドガイダンスの広報について
- ・ビブリオ KoToLa 推薦図書の提出状況報告
- ・次年度購入希望について

第5回（平成27年1月21日）

- ・紀要第8号編集会議
- ・来年度開館予定について
- ・来年度学生便覧の図書館案内について
- ・来年度購入希望図書の提出状況について
- ・来年度図書館ガイダンスの実施予定報告

第6回（平成27年3月4日）

- ・紀要のありかたについて各学科の意見集約、検討
- ・今年度図書館利用状況報告
- ・学術雑誌公開支援事業の終了報告、およびその対応について

次年度の課題

- ・ビブリオ KoToLa の継続収集も含め図書館資料収集方法について検討する。
- ・委員会規定の見直しをする。
- ・紀要、緑葉の発行についてさらに検討を重ねる。
- ・Nii の学術雑誌公開支援事業の終了をうけ機関リポジトリの構築について検討する。

8. 広報紙編集委員会 年間活動報告

委員長 藤本 由佳利

本年度の課題
神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙WE 49号 平成26年 6月中旬発行 神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙WE 50号 平成26年 12月中旬発行
本年度の活動方針・目標
神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙WE 49号 平成26年 6月中旬発行 神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙WE 50号 平成26年 12月中旬発行
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> ・神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙WE 49号 平成26年 6月中旬発行に向けた委員会の開催＜含 掲載写真の厳選、情報収集、原稿依頼と記事内容の見直し＞（広報紙49号、議事録） ・神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙WE 50号 平成26年 12月中旬発行に向けた委員会の開催＜含 掲載写真の厳選、情報収集、原稿依頼と記事内容の見直し＞（広報紙50号、議事録） ・広報紙編集委員会の開催（議事録） b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 広報紙49号 2014.6 発行 （広報紙49号、議事録） 1面：教育イノベーション機構始動 教育イノベーション機構長 柳 敏晴 2面：教育イノベーションが目指すもの 学長 上田 國寛 3面：新入生を迎えて：保険科学部長 松田 正文、教育学部長 後藤晶子、看護学科長 鎌田 美智子、口腔保健学科長 野村 慶雄、通信課程長 高宮 洋子 4面：1年クラス担任の紹介、神戸常盤大学短期大学部 歯科診療所のご案内 5面：新任の紹介 6面：1年を振り返って各学科2年生、リレーエッセイ 江上芳子 7面：退職の挨拶 8面：「お元気でっ Car」発車、歯科衛生リカレント教育 9面：研究ノート 澤村 暢、JACA草の根協力事業 上野 理恵 10面：大学コンソーシアムひょうご神戸（2014春）フィリピン医療系プログラム（看護コース・医療検査コース）に帯同して 森松 伸一、学生自治会の紹介、自治会執行委員 11面：キラリな学生たち ハッピーかるがもクラブの取り組み紹介 12面：ときわ幼稚園通信、同窓会便り、若い世代に向けた食育の取り組み【神戸市】、平成26年度オープンキャンパスのお知らせ 広報紙50号 2014.12 発行 （広報紙50号、議事録） 1面：神戸常盤ボランティアセンターの取り組み 中田 康夫

2面：災害活動に参加して 3面：実習体験記 N4, N2, E2, O3, NNC2 各学生の実習体験 4面：スタンフォード大学 インターンシップ受け入れ 光成 研一郎、ナオミ・ラッターズ、キラリな学生たち 新長田サポータークラブ 地元のみなさんとの4年間 5面：大学コンソーシアム ポストン研修を終えて、フィリピンでの研修を終えて、ネパールにおける保健活動、シカゴ研修に参加して、第31回世界医学検査学会を終えて 6面：TOKIWA健康フェア2014を終えて 大森 雅人、大都市 KOBE!発信プロジェクト、神戸常盤学術フォーラム発表リスト 7面：ときわ幼稚園通信、同窓会便り、クラブ活動結果報告 8面：第48回 常盤祭、一日警察官任命学生、リレーエッセイ 柳田 潤一郎 目標達成度の評価：①。できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった
次年度の課題
神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙WE 51号 平成27年 6月中旬発行 神戸常盤大学・神戸常盤短期大学 広報紙WE 50号 平成27年 12月中旬発行

9. 倫理委員会 年間活動報告

委員長 土戸 敏彦

本年度の課題
1. 懸案の「動物実験規程」についてのさらなる審議およびその促進。 2. 本学における倫理的課題への迅速かつ適正な対応。
本年度の活動方針・目標
各種委員会およびその他の部署から審議すべき事項が発生すれば、ただちに対応する。 「動物実験規程」について、その成立に向けて検討する。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 昨年度の年間活動について状況報告と確認をおこなった。 今年度の課題としては、前年度から引き続き動物実験規程の作成が主となるが、作成担当委員より、規程案を速やかに作成していきたいとの説明があった。 （以上、第1回倫理委員会議事録） 当該担当委員から以下の資料が提出され、説明がなされた。 (1)神戸常盤大学・同短期大学部動物実験規程 (2)同動物実験委員会規程 (3)同動物実験施設利用心得 活発な質疑応答が交わされ、しかるべき協議の結果、これら規程等の内容について各委員が再度精査し、3月末までに意見、修正等があれば委員長宛に提出することとした。 そして、もし意見等の提出がなければ、本規程等の内容について倫理上の問題は無く、倫理委員会としてはこれらを承認し、その後の、規程の成立、実験開始に向けての学長、法人本部への説明、承諾等は実施主体となる研究者が行うこととなる旨、確認した。 （以上、第2回倫理委員会議事録） 結果、3月31日終業時点で異議等は提出されなかったため、倫理委員会としては本規程等の内容について倫理上の問題が無いことを確認し、承認することを結論とした。 目標達成度の評価：①.できた ②.ほぼできた ③.あまりできなかった ④.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 本委員会は、足かけ4年にわたって「動物実験規程」の成立に取り組んできたが、ようやくその実現にこぎつけ、倫理的に問題ないことの確認に至ることができた。 （以上、第1回・第2回倫理委員会議事録）
次年度の課題
倫理委員会の課題は、近年ほぼ「動物実験規程」の成立に集約されており、またその他の倫理的な問題については、それぞれ当該の委員会が対応することもあるが、倫理委員会は平成26年度をもってその任を終えることとなった。

10. 研究倫理委員会 年間活動報告

委員長 澤田 浩秀

本年度の課題
1. 研究における不正行為の防止を目的とした学内における体制を整備する。 2. 教職員に対する、研究倫理規範等の教育、講習会について検討する。
本年度の活動方針・目標
「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」が平成 26 年 2 月 18 日に改正されたことより、KTU 大学教育研究開発センターにおいて研究費の管理・監査規程が見直しされることと並行し、当委員会としては、研究における不正行為に関しての体制整備、規程作成等を施行することとした。
主な活動内容
a. <u>目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」が平成 26 年 8 月 26 日、文部科学大臣から公表され、平成 27 年 4 月 1 日より適応されることから、本学における新たな規程として、「神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部研究活動上の不正行為の防止及び対応に関する規程」を作成し、平成 27 年 4 月 1 日より施行することとした。これに付随し、「神戸常盤大学・神戸常盤大学研究倫理委員会規程」の一部を改訂した。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b. <u>委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録：議事録 1－8 参照）：</u> 1. 本年度は計 8 回の委員会を開き、17 件の申請書の審査と、上記課題について検討した。 2. 下記に示す 17 件の研究倫理申請書（医療検査科 3 件、看護学科 9 件、こども教育学科 2 件、口腔保健学科 3 件）と看護学科、医療検査学科の卒業研究について審議し、承認した。
次年度の課題
1. 「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」の公表により、教職員に対して何らかの形で研究倫理教育を施行する必要がある。 2. 「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が平成 26 年 12 月 22 日、文部科学省および厚生労働省から公表され、これによる研究倫理委員会規程、研究倫理申請書等の見直しを行う必要がある。 3. 動物実験・動物飼養施設の運営、および動物実験規程に関する協議を施行する（平成 26 年度倫理委員会で承認）。

11. 個人情報保護委員会 年間活動報告

委員長 生島 祥江

本年度の課題
個人情報の適正管理に向け、教職員の個人情報の取り扱いに関する問題意識を高める。
本年度の活動方針・目標
本学が保有する個人情報の適正管理かつ円滑な業務運営を図るとともに、個人の権利及び正当な利益の保護に取り組む。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 委員会の開催（不定期） 新入学生には学内ガイダンス期間中に、本学が所有する学生個人情報の種類と取り扱い、第3者への提供等について説明し、文書にて学生と保護者から同意を得るように努めた。数名の学生の同意文書が交わっていない。 個人情報の適正に取り扱われているかどうか確認し、不適切な個人の情報管理に対し管理者に適正管理を求めた。また、各学科に事例報告し問題意識を高めた。 尚、詳細は個人情報保護委員会議事録参照 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 本年度の委員会の開催は2回であった。 個人情報の適正に取り扱われていることを確認した。 新入生の本学が所有する学生個人情報の種類と取り扱い等についての同意状況を確認し、未提出者への対応を確認した。また、次年度の対応について確認した。 尚、詳細は個人情報保護委員会議事録参照
次年度の課題
継続して、個人情報の適正管理に向け、教職員の個人情報の取り扱いに関する問題意識を高める。 本学が所有する学生個人情報の種類と取り扱い、第3者への提供等について、説明後速やかに学生と保護者から文書による同意が得られるよう、キャリア支援課と連携を図る。また、学生個人情報の種類と取り扱い、第3者への提供等について、現状と照らし見直すことを継続する。

12. ハラスメント防止対策委員会 年間活動報告

委員長 井上 清美

本年度の課題
ハラスメントのない教育環境づくりのために、教職員が一体となったハラスメント防止意識の向上を図るとともに、ハラスメント相談にかかる担当者の力量形成を図る。
本年度の活動方針・目標
1 「ハラスメント」についての理解を深めるとともに、教職員のハラスメント防止意識向上を図る。 2 ハラスメント防止対策に関連する各委員会との連携を図り、相談体制の円滑化を図る。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 目標 1 1) ハラスメント相談委員の掲示や啓発用リーフレットを配布し、学生のハラスメント防止意識の啓発や相談体制の周知を図った。 2) 「予期せぬ加害者にならないために」とのテーマで弁護士による教職員を対象とした研修会を開催し、「ハラスメント」についての理解を深め、ハラスメント防止意識向上のための取り組みを行った。教職員 101 名の参加があった。 目標 2 1) QR コードによる直接相談の受付など相談受付のアクセスの整備を図った。 2) 共同開催で研修会を企画し、学生相談室との連携を継続した。 目標達成度の評価: 1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： 1) 委員会を 9 回開催した。（会議録参照） 2) 教職員のハラスメント防止への意識向上を図る取り組みとして、学生相談室と共同開催で教職員の全体研修会を開催した。 3) ハラスメント相談の体制づくりとして、カウンセリングルーム相談員との連携を図った。 4) 委員会としての対応が必要な事案の早期把握や相談体制の強化を図るため、学生へのチラシの配布や相談体制の周知を継続し、相談マニュアルの整備に取り組んだ。
次年度の課題
ハラスメント防止意識の向上のための取り組みを継続するとともに、ハラスメント相談の基本マニュアルの整備を継続することで、担当者の協力体制や力量形成を図る。 （具体策案） ・ハラスメント相談の基本マニュアルを完成させる。 ・カウンセリングルーム相談員との連携を図り、相談担当者としての相談能力の力量形成を図る。教職員の研修会を引き続き企画する。

13. 危機管理（災害）委員会 年間活動報告

委員長 岩井 重寿

本年度の課題
・ 消防計画を作成し、消防署に届出る。 ・ 避難施設、消防用設備等の点検及び維持管理を行う。 ・ 自衛消防組織の体制を整え、関係者に周知する。 ・ 自衛消防訓練を行う。 ・ 教職員等の防災教育及び訓練を行う。
本年度の活動方針・目標
昨年度から引き続き、避難訓練の実施、消火技術会への参加、施設確認、消火設備の点検実施のほか、新たに、職員が防災講習会に参加し防災知識を得ることを目標とした。 また、平成26年4月1日から施行される、消防法の改正により、新たな消防計画書を作成し、円滑に長田消防署長に提出する。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）</u> ・ 新入生と在学生の災害時における説明会及び避難訓練（放送設備点検）を行った。 ・ 避難経路図を作成し、ホームページに掲載し、学生に周知した。 ・ 対策本部構成員の業務と行動指針等を教授会報告し、教職員に役割分担を周知した。 ・ 消防計画書の作成し、長田消防署へ提出した。 ・ 消防用設備等の点検を業者に委託し、万全の体制を図った 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）</u> ・ 新入生オリエンテーションにおいて、危機管理委員により避難経路及び防災マニュアルの説明会を実施した。 ・ 大学の食堂から出火したことを想定し、警報ベル及び放送設備の点検、並びに消防署への通報を含め避難訓練を実施した。 ・ 消防計画書を教授会に報告後、長田消防署へ提出した。 ・ 8月9日、台風11号神戸市接近に伴い、本学の指定収容避難所に住民が避難した場合の体制を整える準備をしたが大事に至らなかった。 ・ 長田地区自衛消防隊連絡協議会が実施する消火技術会に4名の職員が参加し、消火技術の訓練を受けた。 ・ 防災管理者新規講習会に1名の委員が受講した。 ・ 附属ときわ幼稚園の避難訓練を行うとともに、学生寮の消防署査察に立ち会った。
次年度の課題
・ 災害発生時にむけた実務的問題の把握 ・ 教職員対象を対象とした消防訓練実施に向けた体制整備

14. ICT 推進委員会 年間活動報告

委員長 光成 研一郎

本年度の課題
新規 HP の作成と旧 HP から新規 HP へのスムーズな移行をはかる。
本年度の活動方針・目標
上記課題解決のために、各部署、業者と連携をとりながら活動を推進する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：ICT 推進委員会議事録 【新規 HP の作成】 ・HP の閲覧回数を解析するなどし、サイトの開設、廃止、またリンクの充実、改善を図った。 ・スマートフォンの普及に伴い、スマートフォンからのアクセス数が増加しているので、スマートフォンを意識し、見やすさ、操作性などの配慮をした HP を作成した。 ・グーグルアナリティクス対応により、サイト別アクセス数のカウントが可能とした。 ・本年度大学認証評価を受審したが、それに対応すべく HP の見直し改善を図った。（不備はなかった）具体的には自己点検・評価報告書の HP 上での掲載など。 【学内無線 LAN 環境の整備】 ・委員を中心としたユニットを組織し、学内無線 LAN の充実を実現した。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：ICT 推進委員会議事録； 通常の活動内容として、ほぼ毎月年に 10 回の会議を実施した。具体的内容としては、下記に挙げる。 ・学内 LAN の整備。 ・ネットワーク関連の規程について見直しを実施。 ・教員ブログ、学科ブログ（E 科、O 科）の作成など。 ・臨床検査技師という資格について広報するためのサイトを作成。 ・ナレッジキャピタルなど不定期な活動についてもお知らせページでの広報を実施。
次年度の課題
・本年度と同様に、継続して HP の改良を行う。 ・学科情報をうまく発信していくために広報と一層の連携をはかる。（国試の合格率の高さをどのように高校生に対して PR するかなど） ・教育イノベーション機構のサイトを作成する。 ・年次報告書の HP 上への掲載を行っているが、自己点検・評価委員会から専用サイトがほしいとの要望があるので、法人と相談しながら対応について検討する。

- ・ 学生の課外活動の様子を今以上にアピールする（地域交流センター、地域支援課との連携）
- ・ HP に関するアンケート調査をマナバシステムを活用し、実施する。
- ・ 「お知らせ」サイトをツイッターやフェイスブック（わいがやの公式アカウント）と連動できるようにする。
- ・ 学生の成長のプロセスを HP 上で配信できるような企画を検討し、具体化を図る。
- ・ オープンキャンパスの様子を HP 上で発信できる仕組みを整える。

15. 高大連携委員会 年間活動報告

委員長 栗岡 誠司

本年度の課題
近年、高大連携にかかる講義の依頼が増加しており教員負担が過大になるなかで、専門職志向への効果が認めにくい依頼があることも否めない。また、本年度は如何にすれば高校、本学両者にとって効果的な「高大連携授業」を実施することができるかを課題とする。
本年度の目標・方針
活動方針；将来の職業人の確保のため、各科の主体的な考えと委員会活動を連携させ、高大連携を推進する。 目標；大学教育の一端を体験する機会を通して、高校生に進路意識や職業意識の高揚を計ることに貢献する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容 協定を結んでいる明石南高校、東灘高校、三木北高校、社高校の県立高校4校へは各学科で選出された教員の協力を得て、高校生に大学教育の一端を触れさせた。 内容は、主として各学科が養成する職種の紹介・現状とやりがいなどを伝えることで、高校生の進路意識や職業意識の高揚を図った。提携校以外の依頼はある程度精査すると同時に、効果が望まれる高校を開拓した。 医療検査学科では、臨床検査技師という職種の認知度を図るために教員が担当できる講義内容を積極的に高校へ伝え、出前授業の依頼を受けた。24年度は依頼がなかったが、25年度からは、ニーズの高い高校を選ぶことにより幾つかの高校より依頼を受け出前授業を実施した。 受講した多くの生徒は、進路意識と進学意欲が高まったと感想を記している。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b. 委員会・組織の主要な活動内容 (1)提携による高大連携授業 ①県立明石南高校「高大連携授業」；看護学科教員を中心に看護系希望生徒（2年次生）を対象に「看護基礎」の中で兵庫県県教育委員会より特別非常勤講師の委嘱を受け、N科教員を中心としてO科教員と共に担当した。26年度限りにおいて、特別な依頼を受けM科教員も担当した。 ②県立東灘高校；進路選択を目的として、N科教員とE科教員が担当した。 ③県立三木北高校；「総合学習の時間」の講師としてN科教員とE科教員で担当した。 ④県立社高校；2年次生徒（26～29名）を対象としてN科教員とM科教員が担当した。 (2)医療検査学科による単発の出前授業 ①県立小野高校 ②宝塚東高校 ③県立福崎高校 ④県立星陵高校で実施した。

次年度の課題
・高校の対応や状況を把握・分析し、実施について精査が必要である。 ・実施校の精査だけでなく、新たに連携を始めることについても検討が必要である。 ・過去、授業内容、参加人数などの詳細な情報が、委員および担当教員で共有することが難しい場合があり、今年度は改善を計った。次年度も継続する必要がある。

15. 就職委員会 年間活動報告

a. 医療検査学科・就職委員会 委員長 向井 正彦

本年度の課題
・ガイダンスの開始時期：M3、M4とも前期から行う。 ・M4の12月末での内定率目標を80%程度とする。 ・引き続き地方の就職先開拓を行う。 ・引き続き公務員、企業など就職先の選択肢を広く広報する。
本年度の活動方針・目標
・M3対象のガイダンスを前期から実施し、就活へのモチベーションを高める。 ・M4の進路内定率を1期生（082M）の内定率推移を目標（12月末79.7%）とする。 ・学生の出身地を調べ、M1～M3の出身地に出向く。 ・引き続き公務員対策として一般教養対策講座、SPI対策講座を年2回実施する。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> ・M3対象のガイダンスは前期5回、後期6回実施した。 ・4期生の12月末時点の進路内定率は65.5%で1期生（79.7%）には及ばなかった。3月末の内定率は90.5%である。 ・内定先の内訳は一般病院が35名47.3%と最も多い。次いで、病院公務員が17名23.0%（うち兵庫県5名）、大学病院が7名9.5%、健診センターが4名5.4%、検査センターが4名5.4%、クリニック2名2.7%である。進学も5名6.8%と多い。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1.就職委員会 4/2,4/21,5/19,6/16,7/14,8/18,9/8,10/20,11/10,12/15,1/19,2/17,2/26,3/9 の14回開催（根拠資料・議事録） 2.ガイダンス M1：入学式当日の教員紹介時に、医療検査学科の就職活動が一般就職と時期・内容が骨なること、臨床検査技師国家試験に合格すれば就職率100%であること、を保護者に説明 M2：4/8,1/10 の2回 M3：4/8,5/16,6/6,6/14,7/4,9/12,9/26,10/4,10/24,11/28,12/2 の11回 M4：4/3,5/1,5/15,6/18,7/9,2/26 の6回 3.一般教養対策講座・SPI対策講座 公務員・一般教養対策講座：M2・M3対象 9/2～3、3/26～27 SPI対策講座：M2・M3対象 9/4、3/30

公務員・一般教養直前講座：M4 対象 6/14

4. 病院・企業説明会（企業勉強会）

企業勉強会 10/74,検査センター2社、健診センター1社、医薬品製造会社1社、医薬品医療機器販売会社1社の5社の主に採用担当者の説明

病院説明会 11/28,兵庫県立病院他2病院の説明と平成26年3月卒業生の話

5. 個別就職支援

1) 第1回就職面談

3年生の10～11月に、進路の考え方について、就職委員が分担して3年生全員を対象に個別面談を行い、進路・就職への希望、就活への取り組み方などについて把握すると共に、学業成績や生活上の問題点の有無についても把握した。これらのデータは就職委員で共有して何時でも参照できる様にしている。

2) 第2回就職面談

4年生の4～5月に、2回目の面談を行った。臨地実習で医療の現場を見ているので、考え方が変わったりすることも多く、最終学年として実際に就職活動を始める準備ができているかどうかについて把握した。これらのデータは就職委員で共有して何時でも参照できる様にし、次の個別指導にも活かしている。

3) 就職試験直前対策

就職試験を受ける決断をしたときに、提出履歴書を事前チェック・添削し、また教員とキャリア支援課員との複数で本番さながらの模擬面接を実施した。とくに模擬面接は念入りに行った。

6. 地方病院の求人状況調査

M1～M3学生の出身地を考慮して、山口県3病院、福岡県2病院、熊本県3病院、鹿児島県3病院を訪問し、平成27年度以降本学への求人を依頼した。

7. 後援会常任委員会

後援会常任委員会学科別懇談会に出席し、臨床検査技師の就活について説明

次年度の課題

- ・兵庫県職員の募集が例年より2か月前倒しになったので、早急に対策する。
- ・ガイダンスの開始時期：昨年と同様M3、M4とも前期から行う。H27年度よりM2に対して「マナー」についてのガイダンスを実施する予定。
- ・M4の12月末での内定率目標を80%程度とする。
- ・引き続き地方の就職先開拓を行う。
- ・引き続き公務員、企業など就職先の選択肢を広く広報する。

b. 看護学科・就職委員会 委員長 井上 清美

本年度の課題
学生の主体的な就職・進路選択につながるよう、多様な就職支援の取り組みを継続するとともに、看護師以外の就職・進路志望者について、窓口の教員との連携を図る。
本年度の活動方針・目標
1 学生の主体的な就職・進路選択につながる支援を継続する。 2 保健師・養護教諭志望者については、各養成課程代表者との連携を図る。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 目標 1 1) 学年開始時のガイダンスや個別面接を丁寧に行い、学生の主体的な就職・進路選択につなげた。 2) OB・OG 懇談会を開催し、卒業生を中心に、看護師・保健師・助産師の 3 職種を招いて、学生の進路選択に役立てる支援を行った。 3) 希望者に対しては、面接の模擬などの具体的な支援を実施した。 目標 2 1) 募集状況や就職試験の情報などの共有を図った。 2) 選択制であるため就職窓口となる各養成課程代表者との連携を図った。 目標達成度の評価：1. できた ②. ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1) 委員会を 11 回開催した。（会議録参照） 2) 3 年生と 4 年生学年開始時に、就職についてのガイダンスを実施した。 3) 4 年生の就職及び進路指導のための個別面接や希望者の模擬面接を実施した。 4) 学生が就職や進路決定を主体的に実施できるよう、卒業生を中心とした OB・OG 懇談会を開催した。 5) 保健師や養護教諭を志望している学生の就職支援については、保健師養成課程及び養護教諭養成課程代表教員との連携を図った。 6) キャリア支援課との連携のもとで募集依頼の面談に対応した。 7) 教育連携病院との連携、学生との交流を継続した。 8) 卒業時点では、86 名中進路未定者は 1 名（養護教諭志望者が教育委員会に登録して連絡を待つ状況）のみで、全員の就職が内定（進学 1 名を含む）した。 9) 国家試験委員会と連携し、不合格であった学生の就職調整を行った。
次年度の課題
1 学生の主体的な就職・進路選択につながるような就職支援の取り組みを継続する。 2 効果的な就職支援に活かすため、卒業生の就業・離職等の状況把握について、就職委員会で実施可能な方策について検討する必要がある。

c. こども教育学科・就職委員会 委員長 上月 素子

本年度の課題
・1期生が希望の専門職種に就職できるよう指導体制を整備し本格実施する。 ・4年制の各学年に対応した就職ガイダンスプログラムの確立をめざす。 ・就職空白期間における保育所・幼稚園・施設等と連携を深めるために公演会を開催する。 ・公立採用試験対策講座を企画実施し1期生の意欲を高め実力を養成し合格をめざす。
本年度の活動方針・目標
・1期生の専門職種への進路確定を促す、周到な就職指導ガイダンスを行う。 ・学科独自の「保育サポーター」制度を実施し、保育所・幼稚園・施設へ就職を希望する学生の就職に向かう意欲を高めるとともに、進路に悩む学生への動機づけにも役立てる。 ・小学校及び公立幼稚園・保育所希望者の一般教養科目・専門教養科目に関しては、教職支援センターと連携を図り学習会セミナー受講で採用試験合格への学力育成に努める。 ・就職先との連携と短期大学卒業生へのリカレント教育を目指した、公演会「谷川俊太郎・賢作 詩と音楽のひととき」の開催を実りあるものとする。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：【就職委員会議事録】 1) こども教育学科就職指導関連活動 4月 就職がイデックス「福祉領域への就職について」担当:橋本（3年生） 5月 個別面接（1年生2年生 面接担当:学科全教員） 個別面接（3年生 面接担当:キャリア支援課木村・小山 E科就職委員） 公立採用試験対策講座（～6月3年生） 6月 就職がイデックス「職種別就職指導」担当:橋本・上月（3年生） 就職がイデックス「募集要項・求人票の見方」担当：キャリア支援課（3年生） 7月 就職がイデックス「夏休みの過ごし方と保育サポーターについて」（3年生） 9月 取得する資格免許及び進路希望調査（1年生2年生3年生） 10月 就職がイデックス「後期の就職がイデックス予定・保育サポーター登録」（3年生） 就職がイデックス「採用試験のための実技強化講座①」担当:戸川・上月（3年生） 「保育サポーター制度説明会」（実施11～12月 2年生） 就職がイデックス「保育サポーター実施説明会」（3年生） 11月 就職がイデックス「採用試験のための小論文・作文指導①②」 担当:牛頭（3年生） 「保育サポーター実施」（～3月 3年生） 12月 進路確定のための3年生最終進路調査（3年生） 就職がイデックス「履歴書の書き方①②」（3年生） 担当:小山 就職がイデックス「一般就職対象講座①②③」（～1月3年生） 担当:キャリア支援課 1月 就職がイデックス「時事問題・保育課題講座」（3年生） 担当:大森・上月 「保育サポーター」事後指導（3年生） 神戸市スクールサポーター説明会開催（1年生） 2月 個別面接（1年生 面接担当:学科全教員） 3月 公立採用試験対策講座（3年生）

※ 記名の無い場合は E 科就職委員またはキャリア支援課が担当

- 2) 就職懇談会参加 6～8 月 兵庫県保育協会 兵庫県幼稚園連盟
(橋本・上月・戸川)
- 3) 就職フェア引率指導 6～8 月 兵庫県私立幼稚園協会 兵庫県社会福祉協議会
兵庫県保育協会 姫路市保育協会 神戸市私立幼稚園協会
(キャリア支援課:小山・橋本・上月)
- 4) 就職先巡回訪問指導 5 月～9 月 (キャリア支援課:小山・E 科就職委員)

目標達成度の評価: ①.できた ②.ほぼできた ③.あまりできなかった ④.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容 (根拠資料・記録): 【就職委員会議事録】

- ・毎月 1 回以上の委員会開催 参加者:キャリア支援課 木村課長・小山課員
E 科教員 (藤本・橋本・井上・多田・牛頭・戸川・上月)
- ・キャリア支援課、教職支援センター及び学科と協力し、上記 a の企画実施にあたる。
- ・保育所・幼稚園・施設の就職懇談会、就職フェアに参加し、交流と情報収集を図る。
- ・学科独自の「保育サポーター」制度を活用し、3 年生を中心に、就職を視野に入れた保育所・幼稚園・施設で実習を行い就職への意欲を高める。
- ・3 年生の就職ガイダンスを前期 (基本的な内容) 後期 (具体的な就職対策) と計画的に実施し、就職への意欲を高め、各自の希望に沿った進路決定を促す。
- ・既卒者の就職後の悩みや差就職の相談にあたる。特に公立採用試験受験者には、実技試験面接試験対策の指導を行う (太子町幼稚園教諭採用試験合格者 1 名)。
- ・1 期生の就職開拓に向けた P 科就職先巡回訪問指導 期間:5～9 月 33 園 (幼 4 保 20 施 9)
- ・谷川俊太郎・賢作「詩と音楽のひととき」開催 日時:3 月 1 日 (日) 14 時～15 時 30 分
会場:神戸芸術センター 参加者:930 名 (保幼 274、小 75、教育関係 88、学内法人 493)
- ・公立採用試験対策講座開催 第 1 回姫路市公立保育所:講師 時村先生 (2/28) 第 2 回神戸市公立保育所:講師石丸先生 (3/2) 第 3 回神戸市公立幼稚園:講師 野口先生 (3/13)
- ・1 年生保護者会開催 日時:3 月 15 日 (日) 13 時～ 参加者:27 名 (全体会方式)
- ・3 年生保護者会開催 日時:3 月 15 日 (日) 10 時 30 分～ 参加者:25 名 (分散会方式)
- ・後期「保育サポーター」参加者 41 名 実施園 49 園 (保幼施希望者 49 名中 H26.12.08)

次年度の課題

- ・1 期生全員が希望の専門職種に就職できるよう万全の指導体制で臨む。
- ・4 年生科目「キャリアプロデュース」を、よりよい巣立ちのために活かす。
- ・1 年 2 年 3 年 4 年の各就職指導内容を整理し、4 年制学部の就職指導体制を確立する。

d. 口腔保健学科・就職委員会 委員長 溝部 潤子

本年度の課題
平成 26 年度課題は、以下の通りである。 1. 教員とキャリア支援課の連携と役割分担についての検討 2. 新卒の就職先の開拓に関わる卒後の就職支援の検討 3. 3 年間を通じた就職支援の強化
本年度の活動方針・目標
1. 平成 25 年度に作成した就職支援活動の実施。（具体化） 2. 就職活動の明視化。（新規） 3. 就職活動の状況を学科教員が共有し、学生支援を強化する。（改善） 4. 求人施設開拓を行い、病院・企業への就職支援を継続して強化する。（継続） 5. 早期より活動準備の必要な病院、企業、行政、進学に対する情報を提示して将来に結びつける。（継続） 6. 個人にあった細やかな就職支援を行う。（継続） 7. 卒業生の再就職等の就職支援の基盤作り。（新規）
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1. 平成 25 年度に作成した就職支援活動の実施。（具体化） 平成 24 年度に作成した 3 年間を通じた就職支援体制を具体化して実施した。早期から、将来像を明確にし行動できるようガイダンスを充実させた。各ガイダンス毎の学生アンケートの集計では、おおむね満足しているという結果を得ることができた。 改善課題として、ガイダンスの数が多く教員・キャリア支援課の負担が増加することになった。また、2 年、3 年ともに臨地実習等で大学を不在にする期間があり、予定の日程で実施できなかったため、次年度のガイダンスについては本年度中に日程を決定して対応することにした。 2. 就職活動の明視化。（新規） 入学からの 3 年間のポートフォリオのフォームを作成して配布した。また、キャリア支援課、担任、就職委員、以外の教員が学生の状況を把握できるようにするためのフォームを作成した。ガイダンス毎に、持参させて活用する予定であったが、運用面で継続性が伴わなかったため次年度からの活用を強化したい。 3. 就職活動の状況を学科教員が共有し、学生支援を強化する。（改善） 就職活動状況表を作成し、メール配信にて教員が共有できるようにした。求人票が届く毎に学生への配信とオンタイムで教員全員に配信するように継続運用した。これを受けて、実習施設等からの求人情報や就職活動について、速やかな対応ができるように配慮できた。 4. 求人施設開拓を行い、病院・企業への就職支援を継続して強化する。（継続）

個人開業医の求人数に地域差があったことや、学生の住所地を配慮し、昨年度まで訪問していなかった明石市歯科医師会を追加訪問して依頼した。キャリア支援課課長と就職委員長が同行あるいは単独で訪問したが、卒業生が就職した病院等では、卒業生の状況が把握でき入職間もない時期の不安等を聞き取ることができ、早期離職の要因を探ることができた。

5. 早期より活動準備の必要な病院、企業、行政、進学に対する情報を提示して将来に結びつける。(継続)

平成 26 年度入学生は、入学時の保護者会やガイダンスなどの機会を通じて、教養講座の受講を勧めた。上級生と比較して、教養講座の受講を希望する学生が見られている。キャリアを育むために、ボランティア活動などの機会がある場合には積極的に参加する傾向がある。

6. 個人にあった細やかな就職支援を行う。(継続)

キャリア支援課職員と就職委員の教員による個別面談を、本年度も継続して行った。5 月に、学生が求職票を作成したものを持参させ、担任(就職委員)が個別面談をして聞き取りし情報を記入したものをキャリア支援課に保管して、キャリア支援課職員が学生対応できるようにしているというシステムにより、学生への対応は、きめこまやかであったと思う。受験が決定した学生には、履歴書の書き方や面接練習を実施した。グループ模擬面接の時間をとり、就職活動の基本姿勢等を習得させ、履歴書の書き方も個別に実施する時間を設けたことにより、自主的に行動する学生が多かったように思う。

7. 卒業生の再就職等の就職支援の基盤作り。(新規)

在学中の就職活動で希望の就職につけなかった者などを対象とした支援の基盤を構築していくことになった。歯科衛生士の求人については、中途採用枠や企業では歯科衛生士としての勤務経験を求めたりするため、既卒生の就職支援を行うことで新卒の求人を確保していくことを目的としている。今年度の対応としては、既卒生で、転職を希望する卒業生の渡欧録をキャリア支援課で行うことで対応した。支援方法としては、次年度に学科の方針を決定し具体的に構築することとなった。

8. 就職状況

目標達成度の評価：①.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容(根拠資料・記録)：

- 1) 4 月から 1 ヶ月に 1 回の定例会議と必要に応じた臨時の会議の開催し、情報を共有し課題の解決に取り組んだ。
- 2) 年間計画表を作成し、学生に配布して周知した。また、HP にアップして学内外にも周知した。
- 3) ガイダンスの企画と実施
 - ・1 年生は 2 回(平成 26 年 6 月・平成 27 年 1 月)、2 年生は 4 回(平成 26 年 4 ・

・11・平成27年2月）、3年生は8回（平成26年4・8（2回）・10（2回）・平成27年3月）に実施。卒業前に卒後の就職時のマナーについてガイダンスを実施した。

◆1年生対象ガイダンス

6月2日（第1回：就職活動の概要・ボランティアやイベントへの参加の意義・一般教養講習への参加・ココロエブック/年間スケジュール/先輩からのメッセージ/なりたい自分に挑戦（ポートフォリオ①）/なりたい自分に挑戦したこと（ポートフォリオ②））

1月27日（第2回：一般教養講座の紹介・企業や病院、保健所、進学の進路について）

◆2年生対象ガイダンス

4月4日（第1回：就職活動の概要・ボランティアやイベントへの参加・年間スケジュール/先輩からのメッセージ/なりたい自分に挑戦（ポートフォリオ①）/なりたい自分に挑戦したこと（ポートフォリオ②））

7月24日（第2回：「現場で活躍する歯科衛生士」株式会社松風 井上真弓氏・たつの保健所 山本絹美氏）

11月13日（第3回：「現場で活躍する歯科衛生士」サンスター予防財団千里歯科診療所 広田悠氏・大隈病院附属歯科クリニック谷菜摘氏）

2月2日（第4回：一般教養講座の紹介・企業や病院、保健所、進学の進路について）

◆3年生対象ガイダンスの内容

4月8日（第1回：就職活動の概要・年間スケジュール/先輩からのメッセージ/なりたい自分に挑戦（ポートフォリオ①）/なりたい自分に挑戦したこと（ポートフォリオ②・求職活動票）

8月4日（第2回：履歴書の書き方・自己PRシートの記入・ポータル配信の取り扱い・夏休みの過ごし方）・小論文講座

8月12日（第3回：面接の心得）

（第4回：就職模擬面接練習・履歴書を書くための準備）

10月9日（第5回：現場で活躍する歯科衛生士」はるき小児矯正 荒川美佳さん/ひだか矯正歯科 小河原千帆さん/近畿中央病院 桑島悠さん/協同歯科 井上香穂さん）

10月20日（第6回：面接・見学・就職活動関連文書について）

10月27日（第7回：履歴書 修正～完成まで）

平成27年3月（第8回：1卒業式後から4月1日までの注意事項・社会人としてのマナー・卒後のサポート・就職アンケート・キャリアサポーターの参加・未内定者に対する就職支援）

4) 3年間の就職支援について具体的に説明し、1年生から選抜試験が必要な就職活動及び進学準備へ早期の対応を強化した。

5) 面接試験対応の強化

昨年度から開始したグループ面接研修に加え、就職活動準備に対する研修を実施した。

6) キャリアサポーターの講演

2 年生には、臨地実習開始前、実習中の期間に「保健所・病院・専門性の高い歯科診療所（予防）・企業」に勤務する歯科衛生士の 4 名より業務内容と就職活動の経験について聴講し受講後のレポートを作成することで、理想とする歯科衛生士像を明確にし、就職の方向性を探り具体化を支援した。

3 年生には、10 月に「保健所」に勤務する歯科衛生士の講話を提供し、本学科のディプロマポリシーの理解をはかった。また、7 月に「病院・企業」に勤務する歯科衛生士、10 月に「病院・専門性の高い歯科診療所（小児歯科・矯正歯科・予防）」の 5 名の卒業生の講話を聴講し質疑応答やレポートを作成して、具体的な将来像を結ぶ支援をした。

7) 一般教養対策

キャリア支援課の実施する一般教養対策講座への参加支援と企画支援

上記を通して、キャリア支援課と教員が連携して役割を明確にしながら運用することができた。

次年度の課題

1. 3 年間を通じた就職支援活動（ガイダンス含む）の実施。（継続）
2. 就職活動の状況を学科教員が共有して学生支援を強化する。（継続）
3. 求人施設開拓を行い、病院・企業への就職支援を継続して強化する。（継続）
4. 早期より活動準備の必要な病院、企業、行政、進学に対する情報を提示して将来に結びつける。（継続）
5. 個人にあった細やかな就職支援を行う。（継続）
6. 卒業生の再就職等の就職支援の基盤作り。（継続）

17. 国家試験対策委員会 年間活動報告

a. 医療検査学科・国家試験対策委員会 委員長 坂本 秀生

本年度の課題	
臨床検査技師国家試験合格に向けた学修支援、その為の資料作成、模擬試験実施、補習プログラムの立案を行ない、受験者の意識付けを行なう。	
本年度の活動方針・目標	
ストレートで4年時まで上がった者の国試合格率は毎年9割を越えて安定しているが、毎年10名前後いる履修制限者の合格率が悪い。前期から履修制限者を含めた成績下位層を重点的に指導し、学年全体の成績が上昇するよう、きめ細かい対策を行う。	
主な活動内容	
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 毎月1回の委員会にて基本的計画を確認し、学生の学習進捗状況を含め1年を通して組織的に国試対策を行った。特に前期の模試では成績不振者を割り出し、個別指導に近い形式で補習を行った。後期の総合演習試験の結果を解析し、要所で国試対策ガイダンスを行い、学生達のモチベーションを上げるように工夫を凝らした。 国試対策用の資料として、2014年度版国試対策問題集を作成するため教員に執筆依頼し、編集作業を行い学生に無償配布した。 目標達成度の評価：①.できた ②.ほぼできた ③.あまりできなかった ④.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u>	
4月18日	国試対策問題集作成原の編集終了 60回分の追加及び編集
4月29日	第1回委員会 年間スケジュール決定、成績不振者への対応策
5月16日	60回国試問題の分類作業終了 国試データベース作成準備
5月23日	第2回委員会 国試対策問題集配布、既卒生への国試対策案内
6月20日	第3回委員会 60回国試改変問題作成、M3,M4:模擬試験について
7月11日	60回国試の改変問題作成終了 M3、4生への模擬試験用問題
7月18日	第4回委員会 M4 夏補習の概要決定、卒業生によるガイダンス立案
8月26日	第5回委員会 成績不振者の把握と対策、学内模試3回分の作成依頼
9月1日	第1回学内作成模試作成依頼 過去5年分を元に作成
9月26日	第6回委員会 全国模試の解析、学内模試作成、M3への対策状況について
9月26日	第1回学内作成模試作成締め切り
10月6日	第2回学内作成模試作成依頼 第一回より難易度を上げて作成。
10月26日	第7回委員会 M4:成績不良者と欠席者の対応、M3:59回改変模試予定
11月10日	第3回学内作成模試作成依頼 M4 用
11月14日	第2回学内作成模試作成締め切り M4 用
11月17日	国試対策中間調査、M4への国試対策中間評価
11月21日	第8回委員会 医歯薬模試2回分結果から動向分析、中間調査への対応策
12月12日	第3回学内作成模試作成締め切り M4 用
12月22日	第9回委員会 M4:成績不良者者への補習方法、M3:臨地実習中の課題
12月25日	臨床検査学教育協議会模試A

1月23日	第10回国委員会、M4:国試直前の対応、国試対策問題集の改定について
1月24日	休日ボランティア（2月22日まで） 教員が交替で休日に出勤し監督
2月20日	第11回委員会 国試ガイダンスの確認、模範解答作業の確認
2月25日	第61回臨床検査技師国家試験、大阪商業大学にて激励
2月25-26日	国家試験問題、模範解答作成 協議会への報告、学内自己採点用
3月6日	第12回委員会 61回国試の分析、26年度の振り返り
次年度の課題	
平成26年度の第61回国試全国平均合格率は82.1%に対し、本校は94.0%であり、全国平均を超えた。ただし全国新卒者4年制大学合格率の95.3%には僅かに届かなかった。 次年度は履修制限者を含めた成績不振者へ学科全体での対応が有効である。	

b. 看護学科・国家試験対策委員会 委員長 長尾 厚子

本年度の課題	
1) 学生の主体的な取り組みの支援 (1) 4年次の学生には早期から国試の取り組みの支援、特に保健師国家試験対策では目的意識を高く持ち、看護師国家試験対策とともに早くから学習計画の中に組み入れ学習準備することの重要性を常に意識させる。②低学年（3年生・2年生）が、国試を意識した学習の取り組みができるよう支援する。 (2) 学習環境の整備 i) 学習環境の整備としての教室の確保だけでなく、学生たちが主体的にグループ学習に取り組めるよう多様な環境の整備を考える。 ii) Webでの学習環境を整える。	
本年度の活動方針・目標	
学生が主体的に国家試験に対する学習姿勢を培い、学習方法を確立できるよう支援する。そのために、以下の内容を検討し、活動を進めていく。 1) 学生の主体的な取り組みの支援 i) 学生国家試験委員の指導・支援 4年次の早期から国試の取り組みへの企画・運営についての具体的指導・支援する。 ii) 低学年（3年生・2年生）が、国試を意識した取り組みができるよう支援する。 iii) 模擬試験結果から要支援学生を検討し、主体的に学習できるよう指導・支援する。 2) 学習環境の整備 i) 後期には「国試学習」のための教室を確保し、学習環境の調整を図るとともに、学生たちが主体的にグループ学習に取り組めるよう支援する。 ii) Webでの学習環境が整うよう支援する。	
主な活動内容	
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：国家試験対策委員会会議記録 第104回 看護師国家試験合格率96.4%（全国90.0%）（昨年度98.7%）	

第 101 回 保健師国家試験合格率 100% (全国 99.4% (昨年度 86.5%))

1) 学生の主体的な取り組みの支援

4 年次の学生国試対策委員の主体性を尊重し、早期から具体的な模擬試験・補習学習を企画し、年間看護師 7 回、保健師 2 回の模擬試験を実施した。また、今年度は、模擬試験の結果を参考に、毎回、模擬試験の結果が低迷している学生を抽出し、教員の国試対策委員が夏期から冬期にかけて 16 回の特別補講・面接を実施し、学習内容の指導、学習意欲の惹起を目指して重点指導に当たった。

また、模擬試験の結果から学生の苦手な領域については国試対策委員の教員が中心に年末から年始にかけ補講を行ったが、学生の参加率は高く概ね好評価を得た。その効果があって 80%の正解率が必要な必須問題では、得点率 90.6%であり、昨年度 (86%) より上回った。また、一般・状況設定問題の今年度の合格ラインが 64.1%以上 (昨年 66.6%) であったが、本学では 77.1%の得点率であった。看護師国家試験の準備は周到にギリギリまで行っていたが、不合格者は必修問題が 80%に到達しなかったものが 2 名、一般状況設定問題が 64.1%に達しないものが 1 名あった。既卒学生は 7 名受験し全員合格であった。

保健師国家試験については、模擬試験の解説等学内での補講などが効果を奏し、昨年度 (63.8%) よりは大幅に合格率が上昇し 100%であった。

2) 学習環境の整備

後期には「国試学習」のための教室を確保したが、活用した学生数は少なかった。

目標達成度の評価：1.できた 2. ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b.委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：国家試験対策委員会記録

1) 学生の国家試験対策委員への指導・助言

①年間学習計画の策定に向けての指導・助言②効果的な模擬試験実施のための助言・援助

2) 学習支援：①3年生・4年生へのガイダンスによる国家試験に向けての学習への動機づけ②学習会の企画・実施：模擬試験結果を分析し、国家試験対策委員・専任教員が講師となり実施した。③個別指導：模擬試験結果を分析し実施した。④学内模試の企画・実施。

次年度の課題

次年度の課題

1) 学生の主体的な取り組みの支援

①4 年次の学生には早期から国試の取り組みの支援、特に保健師国家試験対策では目的意識を高く持ち、看護師国家試験対策とともに早くから学習計画の中に組み入れ学習準備することの重要性を常に意識させる。

②学習低迷の学生を、学習内容・意欲とともに早期から支援体制を整え、支援する。

③低学年（3 年生）が、国試を意識した学習の取り組みができるよう支援する。

2) 学習環境の整備

①学習環境の整備としての教室の確保だけでなく、学生たちが主体的にグループ学習に取り組めるよう多様な環境の整備を考える。

c. 口腔保健学科・国家試験対策委員会 委員長 福田 昌代

本年度の課題
①模擬試験成績不良者の受験に対する対応について ②学生への学習支援について ③成績管理データの活用 ④就職委員会との連携について
本年度の活動方針・目標
①国家試験合格 100%を目指し、教職員全員が学生の学習状況を把握し支援する。 ②学生の自主的な学習を促す。 ③1 月末の時点で全員が国家試験合格点以上を達するように支援する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： ・ 100%合格をめざし、模擬試験を業者模擬試験 7 回、校内模擬試験 14 回実施した。一昨年から導入された横式マークシートにも対応できるよう、校内模擬試験において縦式マークシートと横式マークシート両方を採用し、学生がどの場合でも支障なく対応できるようにした。 ・ 模擬試験結果を受けて、成績不良の学生については適宜個別に対応した。また必要な学生については保護者も交えた面談を実施し学習を促した。 ・ 全員に対する国家試験対策補習に加えて、希望者に対する個別補習を実施した。 ・ 模擬試験結果については定期的に学科教授会、学科会議にて報告し、学生の現状を教員全員に周知してもらった。また、成績が低迷する科目については科目担当教員が補習を行った。 ・ 科目担当教員作成の国家試験対策オリジナル問題模擬試験を実施した。各担当者には正答率を公表し、必要に応じて解説をしてもらった。 ・ 自宅での学習の効率を上げるため、模擬試験形式の問題を配布し、ポイントを絞った自己学習を促した。 ・ 就職委員会との連携については適宜学科会議で報告することで成績が周知してもらうことができた。 目標達成度の評価：①.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： ①委員会の開催 月 1 回、第 4 月曜日の午前中に開催した。 ②国家試験ガイダンスの開催 第 1 回：4 月 8 日（火）国家試験受験について、年間スケジュールについて 第 2 回：9 月 29 日（月）官報、後期スケジュールについて 第 3 回：12 月 19 日（金）国家試験受験案内、願書記入方法説明 第 4 回：12 月 22 日（月）願書記入 第 5 回：2 月 27 日（金）国家試験受験に対する心構え、受験票配布 第 6 回：3 月 4 日（水）自己採点、免許申請について

③業者模擬試験の学校実施 ④校内模擬試験の作成（過去国家試験問題ならびに模擬試験問題を改変） ⑤教員オリジナル模擬試験の実施とそれを活用した補習の実施 ⑥成績不良者の三者面談の実施（12月20日） ⑦DES 歯学教育スクール夏期講習会学校開催：8月6日（水） ⑧DES 歯学教育スクール冬期講習会紹介
次年度の課題
①模擬試験成績不良者の受験に対する対応について ・成績不良で学習姿勢も不良な学生の受験に対する対策について ②学生への学習支援について ・国家試験学習への姿勢が不良な学生への対応について ・過年度生の学力向上について ・学生の主体的な学習への取り組みの支援について ・自習学習教室の確保について ③成績管理データの活用 ・今年度と同様に全教員への学生の成績状況の周知徹底 ・正答率の活用

d. 看護学科通信制課程・国家試験対策委員会 委員長 山岡 紀子

本年度の課題
前年度より 3.3%低下した新卒者の合格率向上のための取り組みを充実させる。
本年度の活動方針・目標
1. 新入生が2年で卒業し国家試験に合格できるように入学後の学修支援を強化する。 2. 過年度生が学習進捗状況に応じて計画的に国試対策に取り組むための支援を行う。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 教務委員と協働し、今年度初の試みとして入学式の午後に学修説明会を実施し国試対策についての説明も行った。2年で卒業するための学習計画と並行して国試対策を進める具体案を提示するとともに、早期からの取り組みの必要性を根拠と共に示した。また、国試対策上重要な解剖生理の学習のために、新たに解剖と疾患と看護がつながる講座を実施したところ出席者の約4割が新入生であり、積極的な学習姿勢がうかがえた。一方、新入生に受験を勧めていた専門基礎模試については、数名の受験にとどまった。模試の実施時期が基礎看護学レポート提出多忙期と重なるので、次年度はもう少し早めの実施を検討したい。 2. より多くの学生が国試対策オリエンテーションへ出席しやすいように、今年度より臨地実習オリエンテーションと同日開催した。第103回国試の状況や具体的な学習方法に加え、今後の学修や実習と並行して国試対策に取り組むポイントを説明した結果、学生から前向きな反応を得た。また、本課程の学生が苦手とする必修問題対策に特化した講座を今年度初めて実施した。出席した学生からは好評であった一方、本課程の学生に特徴的な弱点も明らかになった。さらに、ここ数年実施していた10月の模試（基礎問題篇）の出席者が減

少している。原因として、学生が実習モードから国試モードにシフトできていないことや、学習が模試を受験する段階まで進捗していないことが考えられる。このため、より学生の状況に適した模擬試験の実施を検討する必要がある。

1.および2.の活動を含めた国試対策事業においては、引き続き PDCA サイクルで実施し、本課程の全教員間で意見交換し学生の支援に生かすことができるようにした。

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：

- 1) 国家試験対策オリエンテーション：4月4日（金）・6日（日）164名
- 2) 解剖と疾患と看護がつながる講座：〈循環器〉6月29日（日）90名
〈呼吸器〉7月6日（日）86名
〈消化器〉7月12日（土）77名
- 3) 専門基礎模試：10月18日（土）・19日（日）98名
- 4) 国試模擬試験（基礎問題篇）：10月18日（土）・19日（日）58名
- 5) 社会保障制度 DVD 上映会：11月11日（火）・13日（木）・16日（日）の国試手続きガイダンスと同日開催し、社会保障制度の概要を紹介する DVD を上映。71名
- 6) 国試ベーシック過去問講座（3日間）：11月1日（金）～3日（日）90名
- 7) 国試模擬試験（総合力判定）：11月29日（土）・30日（日）106名
- 8) 必修予想 200 問特訓講座（2日間）：12月20日（土）～12月21日（日）71名

次年度の課題

第 104 回看護師国家試験は、新卒者の合格率は 75.5 %であり、昨年度の 71.6%を上回った。入学年度別にみると、13 年度生は 83.8%と全国の 2 年課程通信制学校の新卒者合格率 (80.8%) を上回っているのに対し、12 年度生 75.9%、11 年度生 61.8%、再入学生 60.0 %であり、いずれも昨年度を上回っているものの、在籍期間が長いほど合格率が低い結果となる状況が続いている。2 年で卒業する学生は国試対策のための時間の確保がポイントとなるため、今年度より取り組んだ入学後の学修支援を継続していく必要がある。在籍 3 年目以上の学生には、2 年で卒業できなかったことで学習意欲が低下しないように、モチベーションを維持して学習を続けるための支援が重要であると考ええる。

既卒者の合格率は 44.1 %で、昨年度の 34.6%および今年度の既卒者合格率の全国平均 (39.2%) を上回った。受験回数別にみると、2 回目受験者は 55.6%と昨年度より 12%以上上昇したのに対し、3 回目受験者は 37.5%と昨年度と同様の結果であった。既卒者は国試合格への思いを維持して学習を継続することが難しい一方、新卒者よりも学習時間を確保しやすいため、動機づけのための支援を続けることが大切であると考ええる。

以上より、1)現役生が本課程の学修を進めながら、早期から自発的に国家試験に向けて学習するための支援が課題といえる。また、2) 既卒生が自らの学力や学習を振り返り、行動目標を立て実践に移し、それを継続できることを目指す支援も課題である。

18. 臨地実習委員会 年間活動報告

a. 医療検査学科・臨地実習委員会 委員長 岩井 重寿

本年度の課題
・ 臨地実習と学内教育との相関性を再確認して教育効果が高められるよう努める。 ・ 臨地実習に向けた各種の学生指導を充実させる。 ・ 臨地実習学生数に余裕をもって対応可能な基盤を築くため、施設の開拓や受け入れ人数の観点で継続的遂行が必要である。
本年度の活動方針・目標
臨地実習に求められる問題を掘り下げ、実習効果を高めるために可能な範囲の早期対応や実習で修得した知識を継続させるための計画を立案する。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： ・ 第四月曜日を今年度の定例委員会として 11 回開催した（委員会議事録）。 ・ 2 回の学生ガイダンスを行った。初回は感染予防への対応・手続き方法、実習現場における倫理・接遇などの早期指導を実施した。11 月には実習の実際に関する詳細な内容を指導することで準備を整えた（委員会議事録）。 ・ 臨地実習打ち合わせ会の計画・運用して開催した。（委員会・学科議事録） ・ 4 月から実習生の配属先の検討に着手した（委員会議事録）。 ・ 実習生各自の修得した知識・技能が適用的に利用可能な体制を確立した（学科資料）。 ・ 実習のあり方を見据えての実習後の学生による実習調査を実施した（委員会議事録）。 目標達成度の評価：1. できた ② ほぼできた 3. あまりできなかった 4. できなかった b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： ・ 第四月曜日を今年度の定例委員会として 11 回開催した（議事録）。 ・ 新規実習施設の継続的開拓を学科会議で申し入れた。 ・ 今年度からの実習における個人情報保護の対応の見直し・変更、実習で修得した学習成果のまとめ方の追加、および次年度学生への実習の伝達方法の変更（学科承認）を行った。 ・ 臨地実習施設への学生配属案の学科会議と教授会で承認をえた。（学科・教授会承認） ・ 臨地実習の開始に先立って実習施設と「臨地実習打合せ会」を企画・運営した（参加者数 39 名）。（学科資料） 実習期間をとおして施設からの各種問い合わせに随時対応した（学科巡回教員）。
次年度の課題
・ 臨地実習の準備から実施へ向けて円滑に遂行する。 ・ 学内修得スキルと臨地実習の間での総合的教育効果の検討を可能な限り進める。 ・ 施設での感染予防対策に対して多様化かつ検査項目の増加が予測されるため実施状況を対応部署から早期に情報収集する。

b. 看護学科・臨地実習委員会 委員長 生島 祥江

本年度の課題
・ 次年度の実習計画；学生の学習成果が得られるような臨地実習計画となるよう実習施設、看護学校他関連諸施設との調整を行う。 ・ 次年度の課題別総合実習の施設を、履修学生数と指導教員数に見合わせて確保する。 ・ 学校主催の臨地実習指導者研修会の内容検討。 ・ 学内の感染症対策移行期にある在学生に対する対策を明確化する。
本年度の活動方針・目標
臨地実習に伴う問題を明らかにしながら、臨地実習が効果的に実施できるように取り組むとともに、次年度以降の実習計画に反映させていく。臨地実習指導者連絡会および研修会を通して、指導者の資質維持・向上に取り組んでいく。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： ・ 毎月第3月曜日4時限を定例として委員会を開催した。 ・ 次年度の臨地実習計画調整を前年度末から施設依頼し他校との調整を経て、年間の実習計画案を立てた。 ・ 臨地実習において発生したアクシデント、インシデントを定例委員会で報告し、原因と対処を確認した。 ・ 臨地実習指導者連絡会は、臨地実習科目の目的・目標、内容の確認と学生の実習後の目標到達状況を確認するために、実習施設ごとに適宜開催し、臨地実習指導者との連携を図った。 ・ 臨地実習指導者研修会について年度初めから検討し、平成27年3月6日、テーマ「学生の主体的な学びの支援を考える」のもと、教育学部こども教育学科 大森雅人教授の基調講演、グループワークを実施し、研修会を終えた。 尚、詳細は看護学科臨地実習委員会議事録参照 目標達成度の評価：①.できた ②.ほぼできた ③.あまりできなかった ④.できなかった b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： ・ 毎月第3月曜日4時限を定例とし、今年度は11回委員会を開催した。 ・ 平成27年度の臨地実習計画案を3月臨時学科会議にて報告した。 ・ 各臨地実習科目の計画案を委員会で検討後、学科会議で審議し、教授会で決定後実施した。（学生配置について学科会議で承認後実施した。） ・ 臨地実習指導者連絡会を関連臨地実習科目に応じて企画・運営した。臨地実習中は、実習施設と随時連絡調整した。 ・ 3月6日実施した臨地実習指導者研修会を企画・運営した。（学外参加者：42名、学内参加者：24名） ・ 臨地実習において発生したアクシデント、インシデントを委員会で共有し、実習指導に反映させた。 ・ 看護学科教員全員で学生指導する看護活動基礎実習と課題別総合実習の企画を行った。臨地実習要綱、看護活動基礎実習要領の内容を見直し一部修正した。

・ 感染対策として、日本環境感染学会の「院内感染対策としてのワクチンガイドライン」をもとに2年生、3年生に対し、健康保健センター長と連携を図りB型肝炎ウイルス抗体価検査及びワクチン接種の説明を行った。また、臨地実習の運営がスムーズにいくよう学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認のための年間計画を立てた。 尚、詳細は看護学科臨地実習委員会議事録参照
次年度の課題
・ 平成28年度の実習計画案もこれまでと同様に、早期から、実習施設、看護学校他関連諸施設との調整を行い、学生の学習成果が得られるように立てる。 ・ 課題別総合実習施設の確保が履修学生数に対し十分とは言えない。次年度も施設確保に努力する。 ・ これまでと同様に、適宜実習施設との臨地実習指導者連絡会を開催すること、そして研修会を通して、指導者の資質維持・向上に取り組んでいく。特に、研修会に参加いただけない施設の理由を明確にして参加していただけるように対策を立てる。 ・ 今年度立てた学生の感染症の抗体価及びワクチン接種状況確認の年間計画を施行する。
活動内容の補足
・ 3年生の入学時の麻疹、風疹、流行性耳下腺炎及び水痘の抗体価の基準が、日本環境感染学会の「院内感染対策としてのワクチンガイドライン」の基準に沿っていなかったため、委員会で入学時の麻疹、風疹、流行性耳下腺炎及び水痘の抗体価をチェックし、抗体価不足学生に対しワクチン接種の説明を行った。

c. こども教育学科・臨地実習委員会 委員長 井上 文雄

本年度の課題
・ 27年度実施される課題別実習について、将来の職種及び修得資格を見据えた適切な実習ができるように、実施方法・実習先などについて今年度中に整えておく。 ・ こども教育学科における実習科目の適切な運用を推進するために、実習内規などの再点検を行う。 ・ 介護等体験のうち、現在、施設実習Ⅰで代替している施設等での体験の在り方について検討する。
本年度の活動方針・目標
・ 4年間の実習実施が完成する来年度に向け、学生の希望する進路に合わせた実習が滞りなく行われるように実習施設の開拓を行う。 ・ 今年度初めて行われる実習がスムーズに行われるように計画・準備を進める。 ・ 実習施設との連携を図り、充実した実習が行われるための内容の確認と充実を図る。 ・ 専門実習科目履修細則の点検、見直しをすすめる。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： ・ 課題別実習実施に向けて実習施設の開拓を行った。特に、課題別幼稚園、小学校実習実施に向け、大阪市、西宮市、明石市、加古川市、姫路市などの教育委員会を訪問し実施に当たって連携をふかめた。

- ・一人一人の実習の様子がよく分かるように実習訪問記録の様式を変更し、一人 1 枚の記録とした。
- ・複数担当者で実施する基礎実習Ⅰ、基礎実習Ⅱについては、担当者を中心に連絡・相談を密にして順調に実施することができた。基礎実習Ⅰについては、今年度初めて小学校見学を行った。9月に4校見学の予定であったが、小学校の行事予定変更のため、9月3校、1月1校となってしまった。
- ・今年度初めて行われた小学校実習、幼稚園実習Ⅱ、保育所実習Ⅱ、施設実習Ⅱにおいて、学科教員全員で分担して実習訪問を行った。実習が終わった学生からは、有意義で楽しい実習を行うことができたとの感想であった。また、訪問後、問題点などがあった場合は委員会、学科会議で共有し指導に当たるようにした。
- ・昨年度よりの継続審議となっていた「専門実習科目履修細則」の検討を行った。また、実習の中止、単位の認定などについての詳細を補足規定した。
- ・介護等体験について、小学校免許のみ取得希望者については施設実習Ⅰでの代替でなく介護施設の見学で実施できるように履修細則の変更を行った。

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：

- ・臨地実習委員会 11 回（26 年 4/2、4/28、5/19、6/9、9/8、9/27、11/17、1/5、1/13、1/19、3/16）
- ・月 1 回第 3 月曜日を定例委員会としたが、臨時の委員会を適宜行った。
- ・今年度新メンバーとして施設実習担当者が加わり、施設実習担当 1 名、保育所実習担当 2 名、幼稚園実習担当 2 名、小学校実習担当 2 名、教務課事務担当 1 名が役割を分担しながら実施した。
- ・実習実施に当たっては各担当者が責任をもって計画・準備したのでスムーズに行うことができた。また、実施前・実施後には委員会で報告を行い情報の共有を行った。
- ・実習委員会で検討した事案については、学科会議で提案し、学科教員全員が共有できるよう共通理解を行った

<詳細は E 科臨地実習委員会議録参照>

次年度の課題

- ・27 年度の完成年度を迎えるにあたり、将来の職種及び修得資格を見据えた適切な実習ができるよう 4 年間を見通した実習の流れや内容を検討する。
- ・実習実施にあたり、心構えや取得単位に問題がある学生に対しての指導・助言の在り方を検討する。
- ・複数担当者による実習については今年度と同様、担当者を中心にスムーズに実施できるよう準備・計画をする
- ・それぞれの実習における事前指導等の調整を図り、共通した実習指導が行えるよう連携を深める。

d. 口腔保健学科・臨地実習委員会 委員長 上原 弘美

本年度の課題
・後期臨地実習において、学内歯科診療所を有効に活用し、実践的な新たな実習内容を構築し実行する。 ・昨年度よりも対象学生数が増加するため、新規の実習施設を開拓する。 ・臨地実習指導者会議を開催し、臨地実習指導者の本学科の教育への理解を促す。
本年度の活動方針・目標
・年間スケジュールを作成し、滞りなく臨地実習が実施できるようにする。 ・学内歯科診療所利用した新しい実習を組み立てる。 ・定例（1回／月）に臨地実習委員会を開催し、委員全員の意見が臨地実習に反映できるようにする。 ・臨地実習指導者会議を開催し、当科の教育方針を臨地実習指導者に理解していただき効果的な実習ができるようにする。 ・新規実習施設を開拓し、全学生が効果的な実習をおこなえるよう環境を整える。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> ・年間スケジュールを作成し、委員に周知した。全員がスケジュールを把握することで、円滑に準備を進め、問題なく臨地実習をおこなうことができた。 ・学内歯科診療所利用した「Oral examination」実習を組み立て実施した。今まで学内実習で行えていなかった、パノラマ撮影・模型作成・口腔内写真撮影・唾液検査などを取り入れ、歯科衛生過程に基づいた学習の機会となった。 ・平成26年8月21日（木）第1回臨地実習指導者会議、平成27年3月19日（木）第2回臨地実習指導者会議を開催した。 第1回の会議では実習内容の説明に加え、本学科の教育内容を各科目担当者から説明するとともに、歯科衛生士教育の基盤となる「歯科衛生過程」について紹介し、教育内容について理解をしていただくようにした。その後実習指導のあり方について意見交換会を開催した。指導者の方々に現在の教育プログラムの考え方・臨床実習のあり方を理解していただくよい機会となった。 第2回の会議では「前期臨地実習に向けての学内での学び」について、授業内容を紹介し、臨地実習へと継続した学びができるよう授業を組み立てていることを理解していただいた。その後グループワークにより意見交換をおこなった。当学科の実習目的を十分に理解していただくことができたと思う。（臨地実習指導者会議議事録） ・臨地実習会議は、定例で毎月第3月曜日9:30～とし、第1回 4月21日（月）から第12回 3月16日（月）まで全12回を開催した。開催後は議事録を担当者が作成し、不参加だった委員にも可及的に速やかに情報を伝達し共通理解できるように努めた。（臨地実習会議議事録） ・学生数に即して新規に開業歯科医院12件、小児歯科2件、矯正歯科2件の施設と調整を行い実習を受託していただき、全学生が滞りなく効果的な実習をおこなうことができた。

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった
b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： ・臨地実習指導者会議 2回開催（平成26年8月21日・平成27年3月19日）（臨地実習指導者会議議事録） ・臨地実習会議 毎月第3月曜を定例として12回開催した。（臨地実習会議議事録） ・毎回の実習前には、科目担当教員による学内指導・実習が効果的におこなわれた。また毎週の学内指導日には必要な事項の伝達・実習日誌の確認など学生指導をおこなった。実習後には科目担当教員によるカンファレンスを実施し、実習を振り返り、次のステップへの目標を学生一人ひとりに気づかせる機会とした。 ・1年間に渡る実習の総まとめを8月5日におこなった。グループワークをすることで、1年間の実習による成果を学生自身が見つけだすことができた。
次年度の課題
・昨年度同様、効果的な実習がおこなえる施設の選択と、臨地実習指導者の本学の教育への理解を深めていただくように努める。 ・年間スケジュールに基づいて、滞りなく臨地実習がおこなえる体制の充実を図る

e. 看護学科通信制課程・臨地実習委員会 委員長 中野 順子

本年度の課題
・関東地域の実習病院・施設の確保 ・関東でのオリエンテーション実施に向けての検討 ・年間スケジュールに基づく運営の継続と充実
本年度の活動方針・目標
・関東進出に伴う実習施設の確保に向けた取り組みの推進 ・関東での基礎看護学・看護マネジメント実習事前オリエンテーションの実施及び領域別看護学実習オリエンテーション実施に向けての内容検討 ・臨地実習委員会会議の定例化と定着に向けた取り組みの実施
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： ・関東進出会議の情報を委員で共有し、関東エリアの学生の状況と施設別、領域別一覧表を基に施設の過不足を委員会で検討し、随時領域毎に確保に向けた取り組みを行った。結果、実習病院・施設の充足はできた。学生数の変動に伴う見直しが今後も必要。なお、健康診断結果報告の要望が強くなる傾向にあり、実施時期の検討が必要となった。 ・関東での実習事前オリエンテーションの実施案を検討し、基礎看護学・看護マネジメントオリエンテーションは問題なく実施できた。平成27年度4月各領域別実習事前オリエンテーション実施の予定。 ・年間スケジュールに基づき、毎月委員会を開催した。年間計画にほぼ添って活動内容を検討し、運営を行った。検討した結果は資料を用いて課程会議に提案し、会議のスムー

ズな進行と時間短縮を図った。

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：

- ・4月：各領域別実習事前オリエンテーションの実施、運営（1日実施を2回）
- ・5月：実習・実習スクーリング配置への準備作業（エリア、条件の考慮など）
- ・6月：各領域別実習の配置作業及び最終調整と学生向け配布資料の送付
- ・7月～10月：施設実習前オリエンテーションの実施・同行、実習期間中の学生対応の為の当番実施（実習日別施設及び学生一覧表の活用、対応の為の連絡メモの使用）
- ・10月～12月：次年度の実習依頼と調整の為の施設訪問の実施 135 施設（108＋新規 27）
- ・12月：基礎看護学・看護マネジメント実習オリエンテーションの実施
- ・1月：領域別実習終了後の施設向け報告書（実習のまとめ）の作成と送付（108 施設）
- ・年間を通し、臨地実習指導者会への参加と実習内容の調整（要請のあった施設 10 施設）

次年度の課題

- ・実習の為の健康診断の実施時期と内容の検討
- ・関東地域の実習病院・施設の確保の継続
- ・関東でのオリエンテーション実施後の内容検討と充実に向けた取り組み

19. 通信教育委員会 年間活動報告

委員長 長尾 厚子

本年度の課題
1) 受験者数の確保 ①関東地方の受験者数の確保 ②関西地方の受験者数の確保（特に兵庫県内） 2) 実習施設の確保 ①関東地方の実習施設の確保 ②母性・小児看護学領域の実習施設の確保 3) 国家試験合格に向けての支援の強化 ①国家試験対策委員会の活動を支援する。
本年度の活動方針・目標
<活動方針・目標> 1) 受験者数の確保に向けて、関東方面の広報活動を強化し広域的な受験者確保に努める。 ①関東地方は、事務局・教員との連携のもと広報活動を強化する。 ②関西地方(特に兵庫県内)の広報活動を強化する。 2) 実習施設の確保 ①本年度入学の関東地方の学生の実習施設を確保する。 ②母性・小児看護学領域の実習施設の確保 3) 国家試験合格のための支援を強化する。 ①国家試験対策委員会の活動を支援する。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：通信教育委員会議事録</u> 1) 受験者数の確保 昨年度は182名の受験者であったが、今年度は145名であった。自己推薦入試での応募者が多く約6割を占めている。推薦入試も約4割あり、一般入試の受験者が激減している。近畿地方の受験者の確保については、兵庫県・奈良県・大阪府・京都府の看護協会主催の進学説明会に参加した。関東地方進出に向けて、神奈川県・東京都・千葉県・静岡県看護協会へも説明および入試要項等の配布を依頼した。広報活動も、関東地方広域にわたってリビング誌等に掲載し、受験生確保に向けた。また、法人本部・各事務局課長を中心に千葉・東京・埼玉・神奈川・静岡など広域にわたって病院を中心に広報活動を実施した。さらに、准看護師の多く就業している施設には教員が広報活動を実施した。結果、関東地方からの受験者は35名近くとなり、昨年度より若干増加した。 また、関東地方の入学者の実習施設の確保と共に、准看護師の就労状況の情報収集も行い、受験生の確保につなげていった。
2) 実習施設の確保 今年度からの関東地方の入学生の実習が開始し、実習施設を29施設(全実習施設137施設)確保した。また、母性・小児の領域は新たに12施設確保した。
3) 国家試験合格のための支援 104回看護師国家試験の合格率は新卒75.5%(昨年71.6%)、既卒44.1%(昨

年34.6%)であり、昨年度より上昇している。支援対策として、専門基礎分野の強化のために、業者模試・学習会などを実施した。

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：通信教育委員会議事録

通信教育委員会は毎月第2月曜日を定例にし、平成26年度は11回開催した。構成メンバーは、通信教育委員長・通信制課程の専任教員と事務職員である。

1) 教育課程及び単位認定に関する事項

①既修得単位の認定について

放送大学では毎年開講科目の変更や追加があるため、入試要項作成に向けて新しく開講された科目を確認し既修得科目を検討、追加した。また、他大学・専門学校での既修得科目の認定についても教授会での審議事項として提出するための審議を行った。

2) 授業、試験および単位の認定に関する事項

授業については、時間割および会場について検討した。試験の実施については、今年度から東京会場での会場試験についても検討した。

3) 入学試験・広報活動に関する事項

一般入試・推薦入試に加えて、受験生の確保及び関東進出に向けて自己推薦入試を2回追加し、計6回の入学試験を実施した。広報活動は、看護協会の進学説明会に出席し、学校案内・資料配布を行った。また、関東方面をはじめ、地方紙などの紙面広告を幅広く行った。今年度資料請求数は511と昨年度(607)より減少となった。

4) 入学・卒業・退学・休学・除籍等学生の身分に関する事項

卒業認定に関する通信制課程原案、および、退学・休学・除籍・復学についても教授会の審議に向けて準備した。

5) 学生の賞罰に関する事項

「水田亘記念賞」の受賞者について検討し、決定した。

6) スクーリングおよび学外実習に関する事項

スクーリング授業科目・実習および実習スクーリングの実施に当たって、地方会場（京都・東京）の予約が1年前であることから、次年度の時間割について検討した。

7) 国家試験対策

模擬試験の実施、受験手続、国家試験に関する事項について検討した。

8) その他

①毎月のレポート提出状況の報告：全科目のレポート提出状況の把握。

②再提出レポート、年度替わりのレポートの取り扱いについて確認。

次年度の課題

1) 受験者数の確保

①関東地方の受験者数の確保

②関西地方の受験者数の確保（特に兵庫県内）

2) 実習施設の確保

①関東地方および母性・小児の実習施設の確保

3) 国家試験合格に向けての支援の強化

20. 遺伝子組換え実験安全委員会 年間活動報告

委員長 澤田 浩秀

本年度の課題
平成 23 年度に「神戸常盤大学遺伝子組換え実験安全管理規程」が制定され、さらに遺伝子組換え実験安全委員会が設立された。本年度は、新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査、医療検査学科 2 回生に対する遺伝子組換え実験教育訓練の実施と、できる限り実験施設の安全整備を実行するよう心がけた。
本年度の活動方針・目標
1. 新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査 2. 遺伝子組換え実験施設としての緑風館 5 階に立ち入る可能性のある学生（医療検査学科）に対する遺伝子組換え実験教育訓練（講習会）の実行 3. 安全な遺伝子組換え実験が施行できるよう環境整備の実行
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1. 平成 26 年度は、新たな遺伝子組換え実験計画承認申請書の提出はなかった。 2. 医療検査学科学生に対する遺伝子組換え実験教育訓練は、学科ガイダンスの行事として平成 26 年 4 月 3 日（木）に 2 回生に対して実施した。 3. 安全な遺伝子組換え実験が施行できるよう環境整備は特に実行しなかった。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった
b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： 医療検査学科学生に対する遺伝子組換え実験教育訓練は、坂本秀生安全主任者を講師に迎え実施した。教育訓練は約 1 時間の講習会として行われ、全員の出席を前提とした。教育訓練の有効期間は 3 年間であり、2 回生以上の教育訓練受講者は卒業時まで教員同伴の元で緑風館 5 階の入室が可能である。
次年度の課題
次年度も、新たな遺伝子組換え実験計画に対する申請書の審査、医療検査学科 2 回生に対する遺伝子組換え実験教育訓練の実施、および教職員に対する遺伝子組換え実験教育訓練の実施を行う（教職員に対する教育訓練は、前回の教育訓練から 3 年経過したため、再度受講しなければ、遺伝子組換え実験安全管理規程第 14 条より緑風館 5 階の入室が不可となる）。

21. 国際交流センター 年間活動報告

センター長 野村 秀明

本年度の課題
1. 「大学コンソーシアムひょうご神戸」の事業継続と拡大 2. ネパール交換研修活動の継続と拡大 3. スタンフォード大学インターンシップ学生の受け入れ 4. 学生および教員の国際交流活動環境の整備と支援 5. 学生の外国語学習の促進
本年度の活動方針・目標
1. ボストン、シカゴ、フィリピン、ネパールでのコンソーシアムひょうご神戸の活動を成功させ、学生の国際交流への誘いを行う。 2. ネパール交換研修（本年度はネパール訪問）を成功させる 3. スタンフォード大学インターンシップ学生の受け入れを国際交流センターで行い、学生との交流を発展させる。 4. 学生の外国語学習の促進に関する新規事業の開拓を行う。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 国際交流センターの発足に伴い、研究棟 7 号館 1F にセンター本部を設営した。 2. センター会議を原則月例とし、平成 26 年度は計 12 回の会議を開催した。そこで、活動課題と方向性について議論を行い、毎回の議事録を収録・保存した。 3. センター構成員（センター長 1 名、副センター長 1 名、医療検査科 1 名、看護学科 3 名、こども教育学科 2 名、口腔保健学科 1 名、通信看護学科 1 名、常盤高校 1 名、職員 4 名）の計 15 名で構成され活動した。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. ガイダンス説明会（平成 26 年 4 月 3 日） 新年度ガイダンスにて、国際交流センターについて各学科の委員および職員がガイダンスを行い、学生に活動内容と活動状況について周知した。 2. スタンフォード大学インターンシップ学生の受け入れ（平成 26 年 6 月 23 日～8 月 29 日） Ms Naomi Lattanzi さんを迎え、上記の期間を大学各職務課でインターンシップを行った。また、彼女には授業や大学イベント、地域との交流会、さらには神戸常盤女子高の課外活動にも参加してもらいながら、学生達との文化交流を図った。 3. 大学コンソーシアムひょうご神戸学生派遣プログラム（平成 26 年 9 月 5 日～9 月 13 日） 兵庫県下の大学が合同で実施する海外派遣プログラムで、今年度は医療検査学科および看護学科 7 名がボストン、ネパール、フィリピンを訪問、口腔保健学科 7 名がシカゴを訪問し、日本と比較した各国の医療・保健事情を学んだ。また、その成果は、大学祭（平成 26 年 11 月 23 日）時に、ポスター発表を行い、学生、教職員、さらに同窓会の父兄にも披露した。

4. ネパール交換研修（平成 26 年 12 月 19 日～12 月 27 日） ネパール・ハチガンダ福祉協会との交換研修生派遣制度に基づき、本年度は、本学から学生 7 名、高校生 1 名の研修生を派遣し、ホームステイ生活の中で、ネパールの医療事情、教育環境を実際に見学し、異文化体験、異文化交流を行った。そして、平成 27 年 3 月 23 日に、全学教職員対象にネパール交換研修報告会を施行した。 5. 本学ホームページに国際交流センターのページを充実させた。
次年度の課題
1. 学生の外国語学習の促進 従来、課外活動として提供されていた「イングリッシュ・イブニング」を、次年度より国際交流センター主催で行い、活動を拡大し、学生への進展を行う。 2. ネパールでの新しい交換研修の開拓 ネパール、ポカラのリージョナルカレッジとの交換研修プログラムの申請 3. 国際交流センター主催の海外活動講演会の開催 4. 学生に開かれた国際交流センターの整備 5. 他大学国際交流センターとの連携
活動内容の補足 文部科学省を中心に「大学のグローバル化」の必要性が叫ばれる一方で、実際に留学する大学生の数や、諸外国からの留学生の受け入れ数も近年減少傾向にある。若い頃に、語学力・コミュニケーション能力を身につけ、外国を訪問することは、学生達の幅広い視野と異文化に対する理解力を養う絶好の機会であり、また将来的な協調性・柔軟性、責任感・使命感、主体性・積極性、チャレンジ精神の育成に繋がると考えられる。 神戸常盤大学としても、共に生き、共に学ぶ「共生」の理念を基に、国際交流を通して得るグローバルな視野と人間性の拡大を、大学での学びや将来的なキャリア（仕事）に活かすキャリア教育でもあるため、GCC も出来る限り援助を惜しまない所存で、その方向性に沿った活動の展開を試みている。 ※ GCC = Global Communication Center

22. 地域交流センター 年間活動報告

センター長 大森 雅人

本年度の課題
共に生き、共に学ぶ「共生」の理念の基に、10 年以上にわたり、学園の内外で広範な学びと地域交流および国際交流における諸活動を展開してきたエクステンションセンターが発展的に解消し、新体制のもとに昨年度より「地域交流センター」として、生まれ変わった。「地域活性化事業」、「教育・研究事業」、「ボランティア（一般）事業」の 3 つを柱に、これまで築き上げてきた「地域とのパイプ」を活かし、学生の課外活動の場を創出するとともに、地域課題に対して、学園を挙げて、取り組む体制を整備する。
本年度の活動方針・目標
・ 学園の地域交流および地域貢献活動の総合窓口として機能する ・ 地域活動の拠点である「わいがやラボ」の広報活動を行う ・ 既存の地域活動に加え、新たに地域の活性化に繋がる事業を計画する
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 近年、地域からのニーズが多様化する中で、学園の知財を使って、地域ニーズに即した事業を展開するとともに学生の「学びの場」を創出した。 ・ 公開講座 ・ 学生の地域活動 ・ 長田区との連携活動 ・ 離島プロジェクト（天候不良により当日プログラムのみ中止） ・ TOKIWA 健康フェア ・ コミュニティハウスでの活動 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 地域活性化事業 高齢化社会の課題である高齢者の健康と福祉を中心とした公開講座などの活動を行った。（13 講座を実施し受講者数 357 名であった） TOKIWA 健康フェア 2014 では、健康をテーマに 25 を超えるブースを出店し、前年度と同じく 1,000 名を超える参加者を記録した。 2. 教育・研究事業 平成 25 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された「災害対応を組み込んだ機動的サポートシステム（神戸常盤モデル）の構築」（通称：お元気でっ Car）を活用した健康チェックを地域で展開した。 3. ボランティア（一般）事業 地域活動拠点「わいがやラボ」を中心に、学生企画イベントや離島プロジェクトを展開。各学科の専門性を活かした様々な活動を行い、地域貢献を果たしながら、その経験を自らの成長に役立てている。

次年度の課題
昨年度組織された新しいセンターのため、学内外および学生に対して積極的な広報を行っていく必要がある。また地域から多くの依頼を受けたが、過密なカリキュラムにより、意欲ある学生が参加できず、依頼を断らざるを得ないケースもあったので何らかの対策を考えたい。 ① 地域交流センターの運営体制の確立 ② わいがやラボ、地域交流センター全体の広報活動 ③ コミュニティハウス事業への学生の参画 ④ 地域活動に参加するためのより良い学内の環境整備

23. 神戸常盤ボランティアセンター

センター長 中田 康夫

本年度の課題
・ 学生スタッフの育成、学生による自主的な活動の促進 ・ 有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成 ・ センターや学生活動の発信・広報
本年度の活動方針・目標
・ 前年度に引き続き、学生が主体となり学生自身が活動と他の学生を繋ぐボランティアセンターを目指し、学生スタッフの育成に取り組む。 ・ 有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成に取り組む。 ・ 高等学校・附属幼稚園との連携をさらに強化する。 ・ 2014 年 8 月にボランティアセンター設立 5 周年を迎えるのを機に、これまでの総括と今後の展望に向けて 5 周年記念誌（仮題）の発刊に取り組む。発刊は平成 27 年度を予定。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： ・ 本学は学科の特性上、時間割が過密であることに加え学外実習が多いため、ボランティア活動を継続してじっくりと行うことが難しい面がある。そこで、今年度は学生スタッフという枠に囚われず、学生たちのやりたいと思ったことを支援できるよう努めた結果、平成 26 年 8 月に発生した広島県における土砂災害被害に対し、被災地に行けなくとも自分たちにできることをやりたいと学生自ら声を上げ、実際に募金活動を実施することができた。 また、様々な活動に参加することをとおして、先輩は後輩から憧れられる存在に、後輩は先輩から思いを引き継ぐ存在になるなど、学年を越えた関係性が徐々にできてきた。短大色が強かった時代は学年間の交流が少なく、年度毎に学生が入れ替わるため、活動を引き継いでいくことが難しかったが、前年度主力となって活動した学生が、次年度後輩を誘って活動を行う、また、前年度リーダーを務めた学生を見て、次年度の後輩が先輩を規範としてリーダーを務める等、学生間で活動を引き継いでいく形が少しずつではあるがみられるようになってきた。 ・ 有事の際のボランティア活動者の養成については、昨夏の広島土砂災害、丹波・福知山豪雨災害時には、本センターのボランティアバス以外にも、神戸市／長田区社会福祉協議会等と連携し、積極的に学生たちにボランティアへの参加を促した後、大学コンソーシアムひょうご神戸との連携により、次年度コンソーシアム主催事業としての災害時学生ボランティア研修事業の立ち上げに関わる等、本センター独自ではなく各団体との協働による研修制度の設立を検討するに至っている。 ・ 高校とは、密な連携のもと学内広報や学期毎のボランティア説明会を実施し、センター登録者数は年々増加傾向にある。また附属幼稚園とは、1.17KOBE に灯りを in ながたのろうそく作りを園で行うとともに、保護者への追悼行事の案内等を行い連携を図った。 ・ 5 周年記念誌（仮題）についてはスタッフ会議において構成や寄稿者の選定等の検討を行い、平成 27 年度発刊に向けて編集準備作業を行なった。

目標達成度の評価：1.できた ②ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：

＜2015年3月末現在のボランティア登録者＞

ボランティア登録者数 合計 298 人（内訳 大学 221 人 高校 77 人）

医療検査学科 31 人（内訳 1 年 18 人 2 年 8 人 3 年 3 人 4 年 2 人）

看護学科 42 人（内訳 1 年 14 人 2 年 6 人 3 年 12 人 4 年 10 人）

こども教育学科 51 人（内訳 1 年 25 人 2 年 12 人、3 年 17 人）

口腔保健学科 94 人（内訳 1 年 19 人 2 年 16 人 3 年 59 人）

高等学校 77 人（内訳 1 年 16 人 2 年 17 人 3 年 44 人）

＜2014 年度活動件数・延活動者数＞

・活動総数 62 件

うち、本 VC が主体あるいは他団体との協働による事業・・・23 件（H26 年度 21 件）

地域団体・福祉施設等からのボランティア依頼件数・・・39 件（H26 年度 30 件）

・延べ活動者数・・・大学 402 名、高校 146 名

＜活動の概要＞

行事名	内 容
LOVE49 キャンペーン in KOBE	子宮頸がん予防啓発イベントの企画・運営
長田在宅支援センター夏祭り	高齢者施設夏祭り手伝い
長田区自立支援協議会つどう部会	発達障害児を対象にした行事の企画、実施
長田区自立支援協議会防災プロジェクト	障害者の防災訓練を実施、炊き出しを担当
かえっこバザール	かえっこバザールの運営
東日本大震災復興支援活動 （岩手県釜石市）	岩手県釜石市にて、被災地に語り部による震災学習、「菜の花大地復興プロジェクト」ボランティア、住民交流会を実施
丹波市水害支援ボランティア	水害により浸水した寺院の復旧支援
おやつはべつばら	Tooth☆ピッカーズによる歯磨き指導
TOKIWA 健康フェア	炊き出し、被災地支援活動報告
広島水害支援募金活動	学内にて募金活動を実施
一七市拡大版 2014	・広島水害支援のため広島焼き模擬店の企画、実施 ・一七市拡大版運営支援（受付・着ぐるみ・アンケートの実施）
学祭	東日本大震災・水害被災地復興支援ブース出展、広島水害支援募金活動
サンタが家にもやってくる	預かったプレゼントを子どもたちに届ける
1.17 KOBE に灯りを in ながた 2015	炊き出し、募金活動、会場設営など

上記活動のほか、長田ボランティアセンター運営委員会への参画や、長田区自立支

援協議会つどう部会・防災プロジェクト、一七市拡大版 2014 実行委員会、1.17KOBE に灯りを in ながた 2015 実行委員会、「子宮の日」LOVE49 キャンペーン in KOBE 実行委員会等へ参加するなど、地域団体との連携・協働のもとに活動を行っている。 ボランティアセンターの運営に関しては、年 2 回（6・3 月）の運営委員会を開催して運営に関する協議を行うとともに、円滑な運営を行うため、法人内の委員によるスタッフ会議を年間 8 回（6・7・8・9・10・11・1・3 月）開催して、喫緊の課題の検討と情報共有を行った。
次年度の課題
・学生が主体となって運営していくボランティアセンターを目指した学生スタッフの育成 ・有事の際（特に災害時）のボランティア活動者の養成を目指した各団体との協働による研修制度の設立 ・高等学校・附属幼稚園との連携のあり方の再検討と改善 ・登録学生増強を目指した本センターからの情報発信の改善と強化

24. ライフサイエンス研究センター

責任者 坂本 秀生

本年度の課題
センター利用者の拡大及び研究活動の活発化を目指し、本センターの利用者増加を行った。利用者の増加に伴い、競争的研究資金の獲得が増えるようにする。
本年度の活動方針・目標
本センター利用者の研究が活性化され、学内外での競争的研究資金獲得につなげる。 目標として、科研費などの大型研究費を1人でも多く獲得出来る環境を整える。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 坂本秀生：（1）ヒト Cables 遺伝子の機能解析。（2）POCT 対応装置の機能評価。 井本しおん：鉄、ヘム誘導体、鉄キレート剤が単球/マクロファージや好中球の機能に及ぼす作用の検討を行う。 澤田 浩秀：国立長寿医療研究センター（愛知県大府市）との共同研究で、マウスモデルを利用し、ミクログリア制御によるパーキンソン病治療の研究を行う。 高岡 裕、大田美香、菅野亜紀：（1）東洋医学（鍼灸）による骨格筋修復・再生機構の解明、（2）酵素反応のin silico数理モデル化、（3）自然言語処理技術の医療情報応用 澤村 暢：培養細胞を使った RNAi で、FGA をノックダウンし FGB、FGG のタンパク生合成への影響を定量 PCR による解析を。共同研究として淋菌の薬剤耐性に関する研究。 三浦真希子：2013 年に分離された <i>N.gonorrhoea</i> 58 株について薬剤感受性試験を実施し、Azithromycin (AZM) に耐性を示した株の遺伝学的特徴の解析。23S rRNA の 4 つの allele における 1 塩基変異と薬剤排出ポンプの過剰発現をもたらす <i>mtrR</i> プロモーター領域の 1 塩基欠損についてシーケンス解析を進め、NG-MAST を用いて分子疫学的な解析を行う。 溝越祐志：（1）新規敗血症マーカー「プレセプシン」の産生機序の解明。（2）プレセプシン相互作用タンパクの探索。 目標達成度の評価：1.できた 2.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 坂本秀生：研究代表者として科学研究費基盤（C）を得た。国際学会発表を2回、国内発表を9回、学術論文和文を2編、著書を2冊出した。 井本しおん：共著論文2報、学会発表2件を行った。 澤田 浩秀：ドーパミン神経毒である 1-methyl-4-phenyl-1,2,3,6-tetrahydropyridine (MPTP) 急性投与法および rotenone をマウスに投与することにより、パーキンソン病モデルマウスを作成した。このモデルマウスに LRRK2 阻害薬を投与することによって、ドーパミン神経細胞の変性が抑制されるかを検証した。GW5074 など4種類の LRRK2 阻害薬を用いたが、いずれも神経変性抑制効果は認められなかった。MPTP を1ヶ月にかけて投与する慢性投与法による検討を開始した。 高岡 裕、大田美香、菅野亜紀：競争的戦略資金については、研究代表者として2課題の科

学研究費（基盤研究（C））、研究分担者として2課題の科学研究費（基盤研究（C））、1課題の厚生労働科研費で、計802万円を受け入れ研究を遂行した。研究成果は原著論文2本（欧文2本）、技術報告論文2本（和文）、招待講演1回、学会発表11回、学術集会開催1回であった。受賞としては、第15回日本クリニカルパス学会学術集会 学術集会優秀賞および座長賞等を2年連続でダブル受賞した。また国内特許が1件成立した。 澤村 暢：学内テーマ別研究費を獲得した。成果として、9月に行われた第3回神戸常盤学術フォーラムにてこれまでの研究成果を発表した。共同研究者として第27回性感染症学会にて「兵庫県におけるアジスロマイシン(AZM)耐性淋菌の分子遺伝学的解析」を報告した。 三浦真希子：学内テーマ別研究費獲得し、学術論文1編と国内学会発表を1件行った。 溝越祐志：平成26年度テーマ別研究費を獲得した。In vitro においてプレセプシンが産生されることを確認し、阻害薬を用いた検討により貪食及びセリンプロテアーゼがプレセプシン産生に関わっていることを示唆した。
次年度の課題
利用者の研究がさらに活発化されるよう、研究環境の整備を行う。また、スペース的にも余裕があるので、利用者の増大と競争的研究資金の獲得が増えるようにする。

25. 口腔保健研究センター

センター長 野村 慶雄

本年度の課題
1. 附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校・新入生の歯科検診（継続） 2. 新入生の口腔保健に対する行動変容推進（継続） 3. TOKIWA 健康フェアの歯科検診等の口腔保健事業（継続） 4. 地域の口腔保健関連事業への参画（継続） 5. 健康保健センターとの連携事業の推進（新入生歯科検診） 6. 口腔保健に関する研究業績の蓄積
本年度の活動方針・目標
1. 附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校、新入生の歯科検診 2. TOKIWA 健康フェアの歯科検診等の口腔保健事業 3. 地域の口腔保健関連事業への参画 4. 歯科検診結果の解析 5. 歯科診療所受診に対する行動変容推進
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 口腔保健事業 1) 長田区連携事業 ① 平成 25 年度長田区子どものむし歯予防のための検討会議 ② 長田区・神戸常盤大学連携協定にもとづく打ち合わせ会 ③ 長田区民まちづくり会議 にこやか部会 ④ 長田区との地域連携会議 2) 歯科健診 ① 神戸常盤女子高校歯科健診 ② 附属ときわ幼稚園歯科健診 ③ TOKIWA 健康フェア 2014 歯科健診 ④ 新入生歯科健診 3) 診療所業務 ① 口腔ケア（新入生含む） ② フッ素塗布 ③ 神戸市 40 歳総合健診歯周疾患検診 2. 啓発活動 ① 子育て支援センター「えん」での口腔保健啓発事業 （口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録） ② 長田区こどものむし歯予防のための検討会議 （口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録） ③ 長田区民まちづくり会議 （口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録）

④ 口腔保健啓発のための講演・研修 (口腔保健研究センター会議議事録) ⑤ ホームページリニューアル (神戸常盤大学短期大学部歯科診療所) 3. 研究活動 委託研究：高齢者の誤嚥性肺炎再発に関する調査（足立教員）：終了 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： 1. 口腔保健研究センター（3回）、歯科診療所運営会議（6回）を開催し、口腔保健研究センターのフィールドの一つである歯科診療所の活性化について検討した。予防的診療業務に加え「神戸市40歳総合健診歯周疾患検診」・「神戸市妊産婦歯科健康診査」を追加した。（口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録） 2. 子育て支援センター「えん」での出前講座に加え、幼児へのフッ素塗布を実施した。（ア）（口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録） 3. 長田区こどものむし歯予防のための検討会議（2回）に参加し、長田区の乳幼児のう蝕予防について検討・提案した。（口腔保健研究センター会議、歯科診療所運営会議議事録） 4. 長田区民まちづくり会議（6回）に参加し、長田区における健康教育を通しての啓発活動を行った。（歯科診療所運営会議議事録） 5. 地域のみならず全国において口腔保健啓発の講演会・研修会等において34回出務した。（口腔保健研究センター会議議事録）
次年度の課題 1. 附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校・新入生の歯科検診（継続） 2. 新入生の口腔保健啓発活動（口腔保健に対する保健行動の変容を促す） 3. ③ TOKIWA 健康フェアの歯科検診等の口腔保健事業（継続） 4. 地域の口腔保健関連事業への参画（継続） 5. 口腔保健に関する研究業績の蓄積 6. ⑥ 歯科診療所の活性化
活動内容の補足 ・附属ときわ幼稚園歯科検診 56人（3～6歳） ・神戸常盤女子高校歯科検診 3日間：1年生 332人 2年生 298人 3年生 274人 ・新入生歯科検診 医療検査学科 95人 看護学科 89人 こども教育学科 92人 口腔保健学科 79人 ・子育て支援センター「えん」でのフッ素塗布 延 48人 ・歯科診療所受診者数 延べ 392人（新患 169人）

26. KTU 大学教育研究開発センター 年間活動報告

センター長 足立 了平

本年度の課題
1. 教育(教育研究) ① 地域をフィールドとした教育研究が少ない ② 研究を基盤にした教育の在り方が議論されることが少ない 2. 研究 ① 地域課題を抽出する研究が少ない ② 大学、短大ともに研究活動の活性度が低い
本年度の活動方針・目標
1. 教育(教育研究) ① 地域をフィールドとした教育研究の積極的な推進 ② 研究と教育の統合を目的とした関連委員会との連携推進 2. 研究 ① 地域課題の抽出とした研究の推進 ② 研究活動を活性化させるための研究環境整備の継続
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1. 教育：前年度よりテーマ別研究費のカテゴリ分類に「高等教育」と「地域研究」の充填キーワードを設定し、教育への還元を狙いとした研究の促進を企画した ① 地域をフィールドとした教育研究の推進：地域研究の教育への還元を目指す ● H26 年度科科研費申請 24 件中 7 件、テーマ別研究費申請 22 件中 5 件 ② 研究と教育の統合を目的とした関連委員会との連携推進 ● F D 研修会でのジョイント「教職員の能力開発を目指して－神戸常盤大学・神戸常盤短期大学の過去・現在・未来－センター・機構はその機能を果たしつつあるか」（7/26） ● 神戸常盤学術フォーラムでの F D 委員会とのジョイント企画「教育と研究の良い循環を創る」学長講演（9/20） 2. 研究：研究が教育に還元される関係を目指した教育と研究の統合のための研修会などを企画した ① 地域課題の抽出とした研究の推進：地域課題を抽出し、教育への還元へとつなげる ● H26 年度科研費申請 24 件中 6 件、テーマ別研究申請 23 件中 4 件 ② 研究活動を活性化させるための研究環境整備の継続 ● 「研究を支援する研修会」開催（8/25） ➢ 研究デザインについて（講師：三品浩基先生） ➢ 文献検索ツール ProQuest 説明（図書館） ➢ 競争的資金申請書作成のポイント（講師：島津製作所・橋本志朗氏） ● 神戸学術フォーラムの開催（9/20） ➢ テーマ別研究・共同研究成果発表、学科長推薦発表、一般演題

➤ 科研費申請説明会

- 研究者ハンドブックの改訂

目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった

b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：

① 公的研究費に関する不正防止に関する規定整備と倫理教育

- 公的研究費管理監査規程の見直しを実施
- 「公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」に係るコンプライアンス教育に関しては、動画教材（youtube）の視聴、各種規程・研究者ハンドブックの確認・理解、誓約書署名を担保に実施した（2/28×切）

② 研究活動に関する不正防止に関する倫理教育について

- センター会議で検討を継続中、27 年度中にコンプライアンス教育を実施予定

③ 活性化設備整備事業

- 大学 3 学科、短大 1 学科に申請テーマを募集し取りまとめた

④ アクティブラーニング研究会の立上げ

- 教職員有志による勉強会を支援

次年度の課題

次年度（平成 27 年度）より「KTU 研究開発センター」に名称変更し、内容も教育研究開発から研究に特化したものに変更となり、「KTU 大学教育研究開発センター」としての活動報告は今年度で終了する。「KTU 研究開発センター」についてはまだ具体的な活動内容やセンター規定の変更も行われていないので、次年度の課題は今のところ不明であるが、本学の研究面での課題をあえて挙げると以下の通り。

1. 科研費申請などの申請者数、採択数の伸びの低下⇒研究者支援の強化、研究環境整備
2. 研究活動に関する不正防止に関する倫理教育が実施されていない⇒研究倫理委員会とのコラボで実施
3. 研究者の業績や研究テーマが公表されていない⇒機関リポジトリの構築

27. 健康保健センター 年間活動報告

a. 健康管理室 センター長 三品 浩基

本年度の課題
1. B型肝炎ワクチン接種後抗体陰性者への対応。 2. 学生の予防接種勧奨および予防接種歴管理の体制を整備。 3. 全国大学保健管理協会近畿地方部会の幹事校としての活動。 4. 学生部と共同で学内禁煙化委員会の立ち上げ。
本年度の活動方針・目標
上記課題の解決・実行
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 日本環境感染学会の「医療関係者のためのワクチンガイドライン 第2版」を参考とし、B型肝炎ワクチン接種後抗体陰性者への対応方法を決定した。 2. 日本環境感染学会の「医療関係者のためのワクチンガイドライン 第2版」を参考に、これまでの学生の予防接種勧奨基準を変更し、学生が入学時に提出する予防接種歴の記録票等を改訂した。本学は平成26年11月に学内水痘集団発生を経験し、同年の予防接種法の改訂に合わせて水痘ワクチンの標準接種回数は1回から2回に改めた。 3. 全国大学保健管理協会近畿地方部会の幹事校として運営校会議（京都大学）、全国研究集会（慶応大学）、近畿地方部会研究集会（京都大学）、近畿地方部会保健師看護師班研究集会（京都大学）、保健師看護師班兵庫地区研修会（甲子園大学）に参加し運営に携わった。平成27年度は京都大学から、前述全国研究集会を除く会議および研究集会等の代表幹事校を引き継ぐため、京都大学（現代表幹事校）、畿央大学（前代表幹事校）、兵庫地区幹事校に協力を仰ぎ準備を行った。また加盟校が実施している結核調査の継続の要否について、他の幹事校と共同で質問票調査を実施し加盟校の意見収集を図った。 4. 学生部と共同で学内教職員の有志を構成員とする「禁煙すすめ隊」が結成された。敷地内の吸い殻の収集、学生の健康診断の問診票項目に基づく喫煙率の算出などを行い喫煙状況の把握を行った。 5. 学内傷病者および体調不良を訴える者への対応を行った。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 健康保健センターを2回開催した。 2. 水痘集団発生時にセンター内の医師で臨時の会議を複数回行い対応を協議した。
次年度の課題
1. 全国大学保健管理協会近畿地方部会の代表幹事校として協会運営を遂行する。 2. 各学科の臨地実習委員と協力し学生の予防接種の徹底に努める。 3. 学校保健を専任とする職員（看護師、保健師または養護教諭）の配置を目指す。

b. 学生相談室 責任者 後藤 晶子

本年度の課題
1. 学生が利用しやすいようなカウンセリングルームの在り方を検討する。 2. 効果的な教員に対するコンサルテーションの在り方を検討する。
本年度の活動方針・目標
1. カウンセリングルームをより気軽に利用できるしくみを検討する。 2. 教員に対するコンサルテーション機能を整える。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 気軽に利用できるよう、カウンセラーから各学科学年へのアナウンスを実施した。 2. カウンセリングルーム便りを発行し、申込用紙とともに、上記アナウンス時に配布した。 3. 予約のよりスムーズな方法を目指しメールでの対応をすべく、名刺サイズの広報媒体を検討し、次年度に向けて作成した。ハラスメント防止対策委員会の窓口も合わせて掲載することとした。（以上、会議議事録、起案書、メール内容） 4. 箱庭ウィークは昨年度の実施者アンケートからも好評であり、自己理解を深める効果もあり、カウンセリングルームになじみやすくなるということで、今年度も開催した。（案内文書・参加記録） 5. 学生の来室状況を踏まえ、開室曜日の検討を行い、次年度の開室を木・金とした。 6. 教員のコンサルテーションについて案内を作成し教員メールボックスに配布した。（案内文書）その結果、教員の来室件数が延べ 10 回あった。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）：</u> 1. 今年度のカウンセリングルームの利用者数は、延べ 79 人、実数 23 人であった。（会議議事録） 2. 試験終了後もカウンセリングが必要な学生に対して、カウンセリングルームを開室した。 3. 発達障害の学生に対する支援について、他大学の状況の調査を実施した。しかし、本学に参考になる情報があまり得られなかったため、次年度引き続き委員の間で研修等を実施することを検討した。（会議議事録） 4. ハラスメント防止対策委員会と共同で「ハラスメント防止対策研修会」を 12 月 24 日開催した。（案内文書） 5. 委員会会議を 2 回開催した。（a で記述した内容の諸打ち合わせ等は含まない）
次年度の課題
1. 発達障害を抱えた学生への対応については継続して検討する必要がある、委員による情報収集・研修を行う。 2. 開室曜日の変更したことの効果について確認する。

28. 神戸常盤大学子育て支援センター「子育て広場えん」

センター長 上月 素子

本年度の課題
大学付属の子育て支援センターとして、4学科の専門性を活かし地域貢献できるよう、活動内容の充実を図る。
本年度の活動方針・目標
① 地域における大学付属の子育て支援センターのあり方を再考し活動内容の充実を図る。 ② センターの安定的運営にむけてスタッフが継続勤務できる体制の整備と育成に努める。 ③ 大学の附属施設センターとして学生・教員等の学びと研究のフィールドの充実を図る。
主な活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容 【根拠資料・記録】： 神戸市との連携事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 こども家庭局こども育成部こども青少年課中山課長・村田係長・谷課員の3名が来館し今後の子育て支援事業についての意見交換を行う(6/17)。神戸市こども家庭局主催「大学子育て支援事業実務者懇談会」に参加し意見交換を行う(12/12日)。 長田区との連携事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 ふれあいプラザ(月1回子育て応援プラザ)健康相談(5月6月9月11月1月3月保健師) 子育て相談(月3回子育てサポーター)遊びのマエストロ養成講座実習(10月)あつまれたまごママ(月2回若年片親虐待対応事業) なでしこレディースホスピタルとの連携事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 月2回木曜日ベビーマッサージ(5月～12月助産師)、アロマセラピー・ハンドマッサージ(4月助産師)※交通費・材料費の実費を支払う 法人及び大学学科間の連携事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 O科:月一回実施の歯の相談(個人カルテ作成による継続的歯の相談の実施)及びフッ素塗布(8月9月12月1月主担当御代出先生)。N科:まちの保健室の実施(6月10月主担当江上先生)。附属女子高等学校:保幼進学コース生徒の見学受け入れ及び講座の実施(5月担当上月)附属ときわ幼稚園:園児募集説明会(8月)E科:遊びと遊具(11月1月3月担当上月)子育て個別相談(3月担当上月) スタッフの企画事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 うたあそび—今月のうた—(水)いっしょに体操(木)今月の絵本・おはなしの時間(金)親子あそび(土)手作りプレゼント(子どもの日・クリスマス・お正月・雛祭り)毎月の環境構成(壁面構成・今月の折り紙・今月の歌カード)第2子3子誕生お祝いカード 学生受け入れ事業 【各月の日程表・日報・記録ファイル】 O科(フッ素塗布のサポーター12月1月)N科(まちの保健室のサポーター6月10月)E科:基礎実習Ⅰ(90名8月8回9月2回)基礎実習Ⅱ(15名9月3回)学生ボランティア(1年生2年生3年生及びハローベビー部員 5月1月3月 述人数30名) 兵庫教育大学4年生の卒業論文の研究調査の受け入れ(1名10月)。 スタッフの育成事業 【記録ファイル】 兵庫教育大学子育て支援センターの見学訪問(1/13)参加:山口・松本・西村・榮・上月

10 時～11 時:兵庫教育大学子育て支援センター「げんき」の施設及び支援実施状況をスタッフ 2 名の案内で見学。11 時～12 時:兵教大学 名須川センター長・スタッフ 2 名と「えん」参加者 5 名で「大学付属の子育て支援センターにおける事業の可能性と課題」をテーマに意見交換を行う。1 時～2 時:「えん」スタッフで今年度の実施内容を振り返り、職務改善及び今後の計画について話し合う。毎月時間外の活動内容検討会を実施。 目標達成度の評価: 1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b.センターの主要な活動内容（根拠資料・記録）: 上記活動内容を実施するために次の活動を行う。 ・活動内容人事管理等（後藤・上月・戸川） 事務手続き物品購入等（猿渡）【会議録】 ・長田区子ども家庭支援課（中筋係長他）の協力を得て「子育て相談」「健康相談」「子育て応援プラザ」等を企画し実施する 【記録ファイル】 ・シンポジウム『子育て支援の社会科—地域社会連携における大学の役割—』（7/19 主催:兵庫教育大学就学前教育カリキュラム研究開発室）に上月がシンポジストとして参加し活動内容の質的改善とセンター間の連携を図る 【記録ファイル・兵庫教育大学 文科省特別経費事業報告書 p56・p 88】 ・5 年目に向けて、環境構成改善に向けた備品購入について法人と相談し進める。
次年度の課題 ・大学付属の子育て支援センターとしての役割を見直し活動の充実を図る。特に、012 歳児のこどもと保護者のためのリビングルームとしての「えん」における支援のあり方を再確認し、質的向上に向けての環境（設置する遊具等）の見直し、充実を図る。 ・兵庫教育大学子育て支援センターと連携しスタッフの研修体制の確立と養成に努める。「えん」のスタッフはそれぞれに研究テーマを設定し、日々の記録とともに、定期的にケース事例研究会を開催し、大学付属の子育て支援センタースタッフとしての質的向上に努める。センター長は研究の指導及び推進を図るために、2015 年 4 月から兵庫教育大学の「子育て支援スタッフ養成」の特別研究員の委嘱を受け、共同研究を行う予定である。 ・スタッフの補充。3 名のスタッフ全員が子育て中のため、学校行事が重なる・家族がインフルエンザに感染して出勤ができなくなるなどの理由で 2 名の配置が困難になることへの対応として、月数回勤務してもらえよう補助的スタッフの配置が望まれる。
活動内容の補足 1. 稼働日数 年間 221 日 開館曜日時間 火曜日～土曜日の 5 日間 10 時～12 時 13 時～4 時までの 5 時間 休館日 日・月と月曜日が休日の次の火曜日、センターが定めた春、夏、冬の休館日 警報が出された日 インフルエンザ蔓延による（複数名のスタッフの家族がかかったため） 2. 利用者数 年間入場者数 合計 6692 名 1 日平均 30 名（開設から 21502 名） 年間登録者数 535 名 ・開設以来初めて安定したメンバー〈専任スタッフ 4 名・土曜日補助 2 名計 6 名〉で支援事業を実施する。 スタッフ: 火曜日（榮・山口）水曜日（山口・松本）木曜日（山口・西村）金曜日（松本・西村）土曜日（松本・山口・土本・井上のうち 2 名）【記録ファイル】

しかし、7月27日早朝に山口先生が事故（熱湯で下半身火傷・皮膚移植）で出勤できなくなり、緊急対応として松本・西村先生が山口先生の勤務日をカバーする。この間、業務が円滑に進むよう、スタッフの協力のもとセンター長が日々関与し対応に当たる。8月末まで緊急対応の勤務体制で行い、9月より山口先生は職場復帰するが、直後に西村先生のご主人が緊急入院（初期の脳梗塞）のため、復帰間もない山口先生を中心に退院までの3週間再度緊急対応の勤務体制で乗り切る。スタッフの事故等で厳しい運営を迫られた一年だが、長年養成してきた専任スタッフ4人の安定した人間関係により、活動内容や参加者の様子や課題点を毎日ノートに記録し他の曜日のスタッフへ周知を図り、改善策へとつなげ、事故やトラブルを起こすことなく運営できた。

・2年半勤務の松本先生と土曜日勤務の土本先生が年度末に家庭の事情により退職。

29. 教職支援センター 年間活動報告

センター長 後藤 晶子

本年度の課題
E科小学校教員およびN科養護教諭採用試験対策について、各学年に応じた適切な支援を実施する。 学年増および、初めてのE科受験前年度対策もあり、学科との連携を強化する。
本年度の活動方針・目標
1.E3の受験前年度対策、N4の臨地実習空白期間対策を含め、各学科学年に応じた効果的学習支援を滞りなく実行し、学生の力をつける。 2. 上記に際しては、各学科との連携を強化する。
主な活動内容
<u>a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）：（センター会議議事録）</u> 1.前年度末にセンター会議で決定した、「平成26年度教職支援プログラム・年間予定表」に基づき、学科、キャリア支援課と連携を図りながら活動を展開した。 ①学習指導の具体的な内容（前年度課題に挙げた教室確保は工夫によりクリアした） N4…センター室長による学習会と東アカ「人物対策講座」「基礎力養成講座」 E3・N3…東アカ「教職教養」、学習会。専門教養対策として主要教科の「秋季・春季セミナー」 E1・2…前期は学科教員、後期はセンター室長による定例学習会。 N1・2…センター室長による定例学習会。 その他 夏期 E・N各学年対象 弱点フォロー勉強会（センター室長とE科教員指導） 春季集中学習会を実施。 これらの学習会については適宜保幼の公立志望の学生にも周知を図り出席を得た。 ②学力把握にかかわる具体的な内容 ・年3回 学力把握テスト実施（支援センター作成） ・E・N3 全国模擬試験、及び都道府県別模擬試験実施 ③意欲の喚起 ・養護教諭志望者対象に合格者座談会開催。 ・スクールボランティア、すこやかフレンドを実施し、学生の意欲を喚起すると共に、近隣の学校との連携を深めた。（一昨年度に示した課題への対応は毎年展開している） 2.センター会議で、計画案、経過報告、事後総括を共有した。（センター会議議事録） 3.1で示した以外の学科との連携として、各種会のアナウンスを学科からも発信に努めた。 目標達成度の評価：1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった <u>b. 委員会・組織の主要な活動内容：上記以外（根拠資料・記録）：（センター会議議事録）</u> 1.小学校教員採用試験大学推薦枠の規定を作成し、選考試験の実施と学生の確定を行った。
次年度の課題
1.E科一期生の小学校教員・N科養護教諭採用試験の合格を目指した支援を効果的に実施する。 2.教職支援センターと学科のこれまでの取り組みを検証し、次年度以降に活かす。

30. 事務局 年間活動報告

事務局長 坂本 啓

本年度の課題
1. 大学認証評価受審の調書等作成準備と適切な対応 2. 学校法人会計基準改正による、システムプログラム変更等の円滑な作業の推進 3. 入学定員確保のための広報活動の展開 4. 本年度創設の修学支援奨学金の的確な業務処理 5. 学内研究費の運用方法の検証と見直し及び外部資金獲得のための業務の支援 6. 看護学科通信制課程における学生募集方策の展開 7. 図書館の利用者サービスの促進及び学習支援、授業連携支援の検討 8. SD 活動の充実 9. IR の検討
本年度の活動方針・目標
・ 本年度の課題に対し、事務局職員は、法人組織、教員組織と連携を密にしながら、円滑な業務を遂行する。 ・ 職員間の意思疎通を諮り、情報の共有化を図る。 ・ 職員は担当業務の研鑽に努め、効率的な業務の執行に努める。
活動内容
a. 目標達成に向けた活動内容（根拠資料・記録）： 1. 大学認証評価受審査にあたり、関係組織と連携し、資料の作成及び受審体制を整え円滑に受審することができた。 2. 平成27年度よりの会計基準改正への対応に向けて、研修会等に積極的に参加した。 3. 入学定員確保のため、高校訪問をはじめ業者主催の入試説明会などに参加した。 4. 給付型の修学支援金奨学金を創設のため、規程等を整備するとともに、学生に周知し希望学生に給付した。 5. 学内研究費の管理・監査規程を整備し、教職員対象にコンプライアンス教育を実施するなど研究費の適切な執行に努めた。 6. 看護学科通信制課程の学生確保に、職員が関東地方の病院等を訪問し広報に努めた。 7. 図書館のレファレンス受付件数、調査内容を記録することにより利用者のニーズを数的に捉えることにより利用しやすい方法を検討した。 8. SD 委員会規程案を検討し、事務職員の職務能力の向上を図った。 9. IR 室を設置し、IR の活動を検討した。 目標達成度の評価 1.できた ②.ほぼできた 3.あまりできなかった 4.できなかった b. 事務局組織の主要な活動内容（根拠資料・記録）： 1. 大学認証評価受審にあたり、評価準備委員会に参画し、関係組織と連携しながら資料の作成に努めた。また、日本高等教育評価機構と連絡を密にし、円滑な受審を図った。 認証評価委員会 平成25年9月設置 4回開催 代表者連絡会議 平成25年9月設置 4回開催 運営委員会審議・教授会審議 平成26年4月

評価調書作成・日本高等教育評価機構へ提出 平成 26 年 6 月 現地調査受審査 平成 26 年 10 月 評価結果「適合」通知 平成 27 年 3 月 2. 会計基準改正の研修会等に参加した職員の研修内容の報告により、制度の共通認識・理解を深め、情報の共有化に努めた。 3. 質の高い学生確保のために、高校訪問等に重点を置き、広報を展開した。 高校訪問数 延べ550校（うち県外157校） 業者主催入試説明会120会場、本学学生による母校訪問学校数71校 オープンキャンパス3回開催（通年4回であるが台風のため1回は中止） 4. 修学支援奨学金の制度を広く学生に周知し、希望学生から個別に事情を聴取し、選考委員会に諮り、給付した。 給付学生数 大学37名 短大7名 募集開始 平成26年6月 選考委員会 平成26年8月 2次募集 平成26年9月 選考委員会 平成26年10月 5. 学内研究費の管理・監査規程制定 平成27年1月1日 施行 学内コンプライアンス教育 平成27年2月 教職員対象研修会 平成27年2月 6. 関東地方看護学科通信制課程学生募集 関東地方病院等訪問 平成26年8月～9月 181施設 7. 図書館利用者のデータ作成によりサービス向上に努めた。 図書館利用者数 39,659人（前年比118%） 貸出件数 13,434件（前年比118%） ノートパソコン貸出件数2,680（前年比267%） グループ学習室利用件数 451件（前年比191%） 8. SD委員会規程案検討及び職員研修に努めた。 学内研修会 平成26年4月 「新規採用教職員研修」 平成26年8月 「選ばれる大学づくりを目指して」 平成26年9月 「保育士養成の今後について」 平成27年2月 「manaba course の全学的導入と活用」 学外研修会 若手、中堅職員 平成26年4月～12月 延べ18名参加 9. IR 室の設置 IR 室会議 平成26年7月 活動内容を検討した。	
次年度の課題	
1. 2号館改築に伴う的確な対応 2. 適正な予算執行管理 3. カリキュラムの変更等円滑な授業運営の推進 4. 各学科と入学者選抜の在り方等の検討の推進 5. 就職委員会、教職支援センターとの連携強化及び学生サポート体制の確立 6. 私立大学等教育研究活性化設備整備事業補助金の活用法の検討 7. 看護学科通信制課程における学生募集方策の展開 8. 図書館の利用環境の整備及び授業と連携した学習支援の推進 9. こども教育学科が完成年度を迎え、4年生の受験対策の強化	

第2部 本年度の「学生による授業評価」

概要

調査方法

昨年度と同様、非常勤を含め全教員の原則全ての授業を対象に、以下の要領で実施した。

1) 各教員は、各学期の最終授業時にアンケートを実施する。アンケートは無記名である。

設問に対し5段階評価（高得点ほど高評価）で回答するものと、記述式のものがある。

2) 前期の評価結果は後期のはじめに、後期の評価結果は年度末に、各教員に通知される。

3) 各教員は評価結果を検討して、今後の授業改善に向けた対策等を「授業評価報告書」にまとめて学科長に報告するとともに、「学生へのメッセージ」を作成して学生にフィードバックする。

4) 「学生へのメッセージ」は、冊子を学内3箇所に配備するとともに、学内共有フォルダに掲載しているため、学内コンピューターで学生が随時閲覧できる。

5) 自己点検・評価委員会は「授業評価報告書」に記載された全学科の授業改善策をとりまとめ、学科会議等で提示することにより授業改善のための情報共有を図る。

6) 各学科の自己点検・評価委員は「授業評価報告書」に基づく学科内の授業改善に向けた取り組みを「学科の授業評価報告書」としてまとめ、年次報告書に掲載する。

アンケートの設問について

1. 学科共通（CCNを除く）の設問項目（設問3～16）：5段階評価で回答

問		設問文
Ⅰ 学生 自身	3	この授業への出席状況は？
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業1回あたりの平均時間）
	5	この授業に意欲的に参加した。
Ⅱ 授業 内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。
	8	授業は知的関心や好奇心を起す内容であった。
Ⅲ 授業 方法	9	聞きやすい話し方だった。
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。
	11	授業の進行速度は適切だった。
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。
Ⅳ 学習 成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。
Ⅴ 総合 評価	16	この授業を受けて満足している。

2. 学科毎の設問項目：5段階評価で回答

医療検査学科

M	17	[実習科目]レポートや課題などのチェックは適切だった。
	18	[実習科目]器具・備品・試薬などの準備は適切だった。
	19	[実習科目]スタッフの補助・対応は適切だった。

看護学科

N	17	[演習科目]到達度の確認は適切であった。
	18	[演習科目]（複数教員授業の場合）教員間の連携、対応は適切であった。
	19	抽象的な内容については、適度に事例を示して具体的な説明があった。
	20	授業内容は、教員独自の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。

こども教育学科

E	17	教員の学生への対応は公平であった。
---	----	-------------------

口腔保健学科

O	17	[実習科目]実習器財や材料の準備は適切に行われた。
	18	[実習科目]教員の人数や配置は適切であった。

3. CCN（看護学科通信制課程）の設問項目：5段階評価で回答

カテゴリーⅠ (学生自身)	問 3	あなたはシラバスを読んで授業内容を確認して臨みましたか。
	問 4	3日間の授業に意欲的に取り組みましたか。
	問 5	この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組めますか。
カテゴリーⅡ (授業内容)	問 6	授業内容は無駄や重複がなく順序立てて整理されていた。
	問 7	専門的内容に対し、わかりやすい説明があった。
	問 8	抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。
	問 9	授業内容は表面的ではなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。
カテゴリーⅢ (授業方法)	問 10	聞きやすい話し方だった。
	問 11	授業の進行速度は適切だった。
	問 12	授業の要点・テーマ・目的がわかりやすい展開であった。
	問 13	板書・スライド・教材などの使い方は適切だった。
	問 14	ノートをとるための時間はちょうど良かった。
	問 15	学生への質問の量、タイミングや方法は適切であった。
カテゴリーⅣ (学習成果)	問 16	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。
	問 17	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。
	問 18	自分で調べ、考える姿勢の大切さに気づいた。
カテゴリーⅤ (総合評価)	問 19	この授業を受けて満足している。

4. 記述式で回答する設問（全学科共通）

- ① この授業でよいと思った点があれば書いてください。
- ② この授業で改善すべき点だと思った点があれば書いてください。
- ③ 教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。

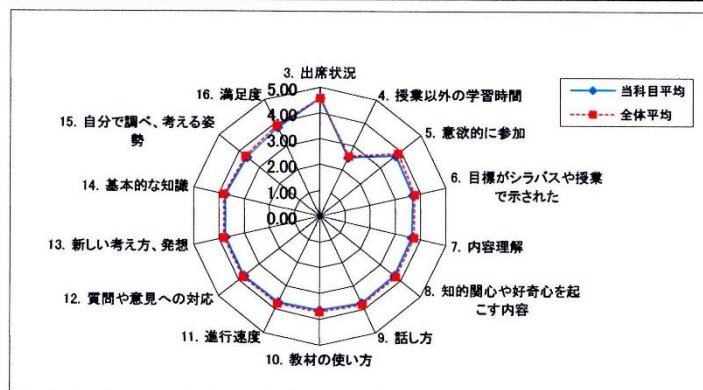
「学生による授業評価」結果の通知様式

医療検査学科全体の評価結果を例示する。教員個人用では、右から2列目（青字）に教員個人の評価点、右端（赤字）に学科全体の評価点が示される。

2013年度前後期 学生による授業評価調査

科目コード		科目名				担当教員名				受講者数	回答者数
M		医療検査学科 全体								10093	8679
1	所属学科	M科	N科	E科P科	O科	2	学年	1年生	2年生	3年生	4年生
		8556	87	0	1			3609	2424	1959	626

問	設問文					5	4	3	2	1	当科目平均	全体平均	
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？					すべて出席 6345	1層未満 1358	2層未満 614	3層未満 191	4層以上未満 110	4.58	4.58
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。(授業1回あたりの平均時間)					2時間以上 892	1～2時間 1013	30分～1時間 2038	30分未満 2328	0時間 2373	2.51	2.56
	5	この授業に意欲的に参加した。					1993	2890	3235	350	82	3.74	3.87
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。					1694	3109	3473	304	81	3.70	3.77
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。					1646	3241	3041	619	121	3.65	3.74
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。					1752	3236	3049	490	138	3.69	3.77
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。					2137	3035	2786	556	156	3.74	3.81
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。					1791	3047	3027	613	173	3.66	3.72
	11	授業の進行速度は適切だった。					1862	3206	3019	444	136	3.72	3.77
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。					1962	2967	3312	313	103	3.74	3.80
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。					1786	3325	3133	331	77	3.74	3.81
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。					1749	3487	3045	299	75	3.76	3.81
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。					1490	3015	3614	424	108	3.62	3.69
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。					2111	3034	2856	339	96	3.80	3.87



分野	当科目平均	全体平均
I 学生自身	3.6	3.7
II 授業内容	3.7	3.8
III 授業方法	3.7	3.8
IV 学習成果	3.7	3.8
V 総合評価	3.8	3.9

神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部

各学科の調査結果

1. 保健科学部 医療検査学科

1. 調査方法

- 1) 調査時期：平成 26 年度前期末・後期末
- 2) 調査対象：医療検査学科の科目担当者
- 3) 調査方法：概要の通り
- 4) 設問：概要の通り
- 5) 授業評価実施数
 - ① 授業評価アンケート回答数（延べ人数）：8806 名（受講者数 10337 名、回答率 85.2 %）
 - ② うち学科長に報告書が提出された科目数：66 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布

平成 26 年度前後期 医療検査学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

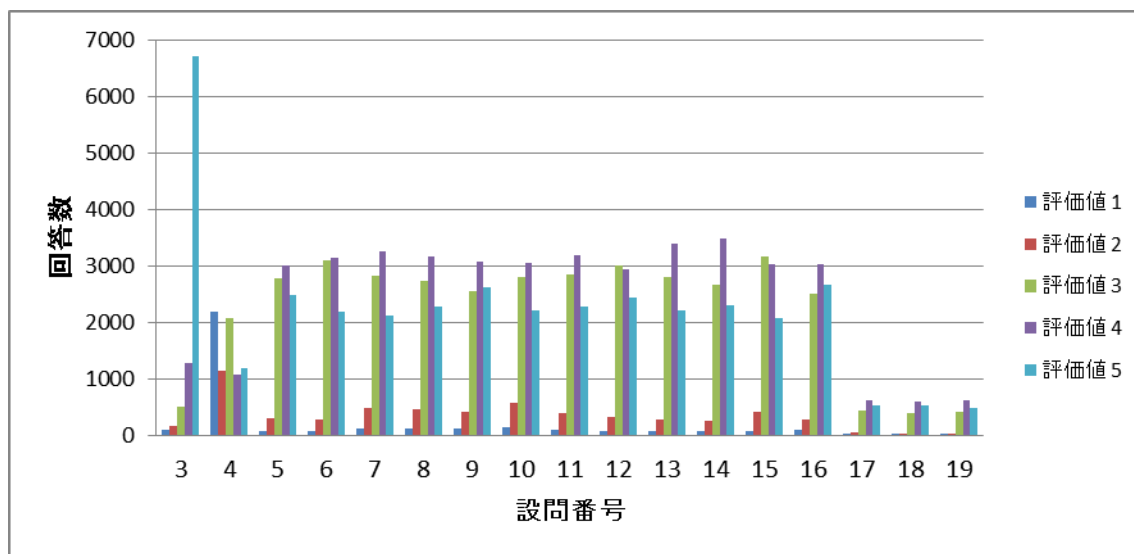


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値

図 1、資料 1 に示すように、問 5～19 のうちで平均値が高い設問は、問 17（実習レポート等のチェック・指導）、問 18（実習準備）、問 19（実習スタッフ）と、実習科目に対するものであった。実習科目に関する設問を除くと、問 16（満足度）、問 14（基本的な知識を得た）が高かった。一方、平均値の低い設問は問 15（自分で調べ考える姿勢を身につけた）、問 7（まとまっていてよく理解できた）であった。問 3（出席率）及び問 4（学習時間）は他の設問と選択肢が異なるため比較からは除外している。

平成 26 年度の設問別平均値を平成 24、25 年度と比較した（図 2）。多くの設問で今年度の評価の方が高い値を示し、評価が上昇傾向にあることがわかる。

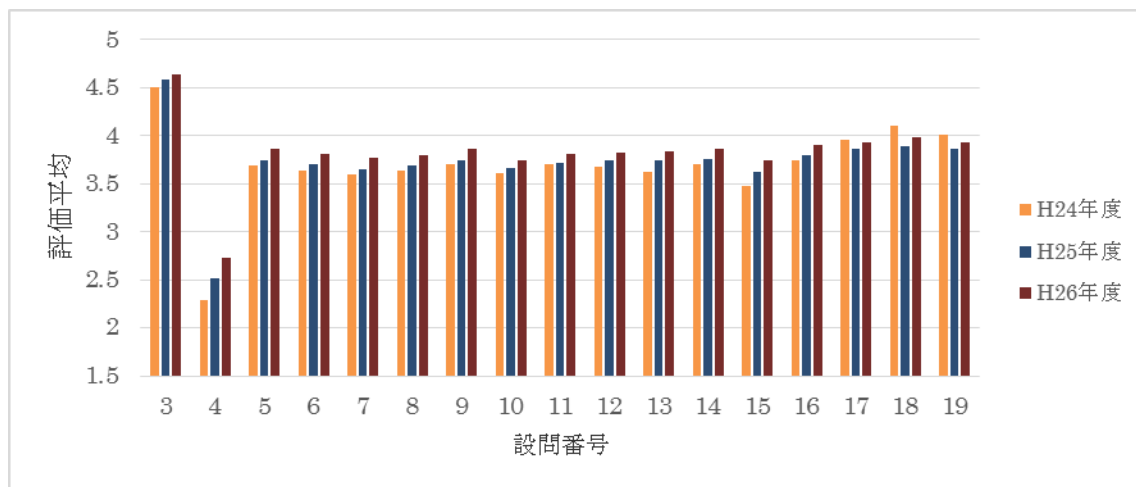


図 2 設問別平均値の年次推移

3) カテゴリー別平均値

平成 26 年度のカテゴリー別平均値を表 1 に示す。カテゴリー I の学生自身がやや低くなっているが、設問 3（出席率）と設問 4（学習時間）は他の設問と選択肢が異なるため、一概に比較はできない。

平成 24、25 年度の結果と比較すると、全てのカテゴリーに於いて評価結果が 0.1 ポイント上昇していることが分かる（表 1、図 3）。

表 1 カテゴリー別平均値

	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 全体評価
H.24 年度	3.5	3.6	3.7	3.6	3.7
H.25 年度	3.6	3.7	3.7	3.7	3.8
H.26 年度	3.7	3.8	3.8	3.8	4.0

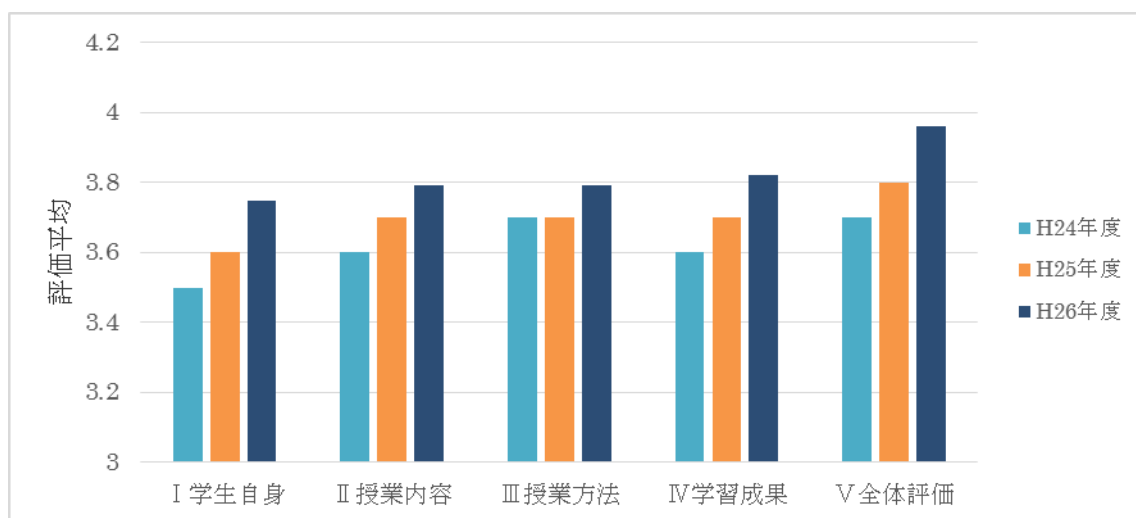


図 3 カテゴリー別平均値の年次推移

3. 集計結果の解析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価とその年次推移

設問別にみて高い評価を得たのは、設問 17～19 の実習科目に関する設問で評価平均は 3.93～3.99 であった。次いで高い評価を得たのは、設問 16（満足度：評価平均 3.92）、設問 5（意欲的に参加したか：評価平均 3.87）、設問 9（聞きやすい話し方：評価平均 3.87）、設問 14（基本的な知識を得た：評価平均 3.87）であった。一方、評価が相対的に低かったのは、設問 10（板書、スライド、教材などの使い方が適切だったか：評価平均 3.75）、問 15（自分で調べ、考える姿勢を身につけた：評価平均 3.75）であった。

この結果から、学習成果に対する評価では、学生は授業を通じて「基本的な知識」を得たと感じているものの「自分で調べ、考える姿勢」は知識ほどには身につけていないとしている。但し、何れの設問も評価平均は 3.5 を超えており、特に大きな問題点はないものと考えられる。

また、設問・カテゴリー別評価の年次推移をみると、何れについても昨年度を上回る高い評価であった。しかし、全体平均と比べると相対的に低い結果となっている。

2) 学年別評価

前期及び後期に得られた全ての授業評価アンケートを学年別に集計し、比較を試みた。その結果、3 年生（平成 24 年度入学生）の評価が他の学年よりやや低く、1 年生（平成 26 年度入学生）の評価がやや高い傾向にある（表 2-1）。昨年度、学科長に提出された授業評価報告書から解析した学年別の評価結果でも、平成 24 年度入学生（昨年度 2 年）がやや低く、これらの結果から、入学年度によって授業評価の評価基準が変動している事がわかる（表 2-2）。

また、評価が低い学年は設問 4 の学習時間も低くなっており、今後もデータの解析を継続して行なっていく必要がある。

表 2-1 平成 26 年度 学年別評価結果

学年	カテゴリー別評価平均					設問 4 学習時間 評価平均
	I	II	III	IV	V	
1	3.86	4.00	4.00	4.03	4.11	2.66
2	3.74	3.69	3.73	3.76	3.89	2.79
3 (H.24)	3.47	3.54	3.60	3.54	3.61	2.37
4	3.57	3.77	3.79	3.79	3.88	2.67

表 2-2 平成 25 年度 学年別評価結果

学年	カテゴリー別評価平均					設問 4 学習時間 評価平均
	I	II	III	IV	V	
1	3.67	3.76	3.80	3.81	3.92	2.49
2 (H.24)	3.52	3.50	3.53	3.53	3.58	2.47
3	3.64	3.68	3.70	3.66	3.76	2.59
4	3.55	3.93	3.99	3.95	4.09	2.46

4. 授業の改善策の検討

今年度も「学生による授業評価」を受けて学科長宛に提出された授業評価報告書に、多くの授業改善策が提案された。これらの改善策をまとめたものを資料 1 に示す。

この資料を医療検査学科教員に提示し、この中から学科 FD として重点的に取り上げたいものを挙げてもらった。その結果を表 4 に示す。現在、医療検査学科教員が最も重要であると考えているのは「アクティブ・ラーニング」「課題の内容とフィードバック」等であった。昨年度と同じくアクティブ・ラーニングが高い関心を集めており、臨床検査技師として臨床現場に役立つような総合力が見につく演習など、学科で具体的なアイデアを出し合い、より良い授業を作ることを検討していきたい。

表 4 医療検査学科教員が重視する「授業改善策」

「改善策」 カテゴリー	学科 FD で取り上げたいと 回答した人数 (複数回答)	
1) 学習の重要ポイントを明確に示す	3	
2) 学生を引きつける授業内容	4	
3) アクティブ・ラーニング<演習など>	4	13
4) アクティブ・ラーニング<グループワーク>	2	
5) アクティブ・ラーニング<その他の手法>	7	
6) 学生の理解度をチェックする。	3	
7) 課題の内容とフィードバック	6	
8) 視聴覚機器の使い方・使い分け	5	
9) その他（補習の実施、機器の数を増やす）	2	

【資料1】 医療検査学科 2014 年度授業評価報告書で示された「改善策」まとめ

1) 学習の重要ポイントを明確に示す。
2) 学生を引きつける授業内容 ● 検査についての興味を深めるために、臨床面での実例などを紹介する。 ● 臨床的な話や関連ニュースなど積極的に授業に取り入れる。 ● 学生に感動を与える、達成感を得られるような授業をする。
3) アクティブ・ラーニング＜演習など＞ ● 臨床経験を活かした演習形式の講義
4) アクティブ・ラーニング＜グループワーク＞ ● グループワークなどを取り入れて、どのレベルの学生も満足できるような工夫する。 ● 全ての学生が準備をしたうえでディスカッションに臨むように、事前の指導方法を改良する。 ● ディスカッションや発表などを取り入れ、授業時間外の学習時間を増やす。
5) アクティブ・ラーニング＜その他の手法＞ ● 実技テストを実施する事で、操作の意味などまで考えながらやっているか把握し、そこから見えてきたことを次の授業に活かす。
6) 学生の理解度をチェックする。 ● 小テストやスライドカンファレンスを頻繁に行い、理解が遅れている学生に対する対策を早めに実施する。 ● 双方向の授業の中で学生の理解度を確認する。 ● 学生の意見を聴く機会を設け、随時理解度をチェックする。
7) 課題の内容とフィードバック ● レポート提出を怠る学生についてペナルティを設けるなど厳しく指導する ● 講義、実習内容の予習を兼ねた自修課題、事前課題 ● 図書館で調べ、レポートで報告する課題 ● 提出物の確認を遅れずにリアルタイムに行う。 ● 優秀なレポート、課題を公開する。 ● レポートの細かい添削指導や個別指導 ● レポート課題を与えるなどし、学生の自宅学習時間を増やす。 ● 図書館で調べ、レポートで報告する課題を与え、自分で考える能力を育てる。
8) 視聴覚機器の使い方・使い分け ● パワーポイントと配付資料（パワーポイントとは異なる）の併用 ● 配付資料の改善 ● 太いマーカーを使い見やすくする。 ● 書き込み式資料と OHC を用いた従来の方法に加え、部分的に板書を取り入れ学習効果を高めるように工夫する。
9) その他 ● 任意の参加による補習を数回組み込む ● 実習機器不足による待ち時間を減らすよう工夫し、機器の購入希望を継続して出すなどの努力を行う。

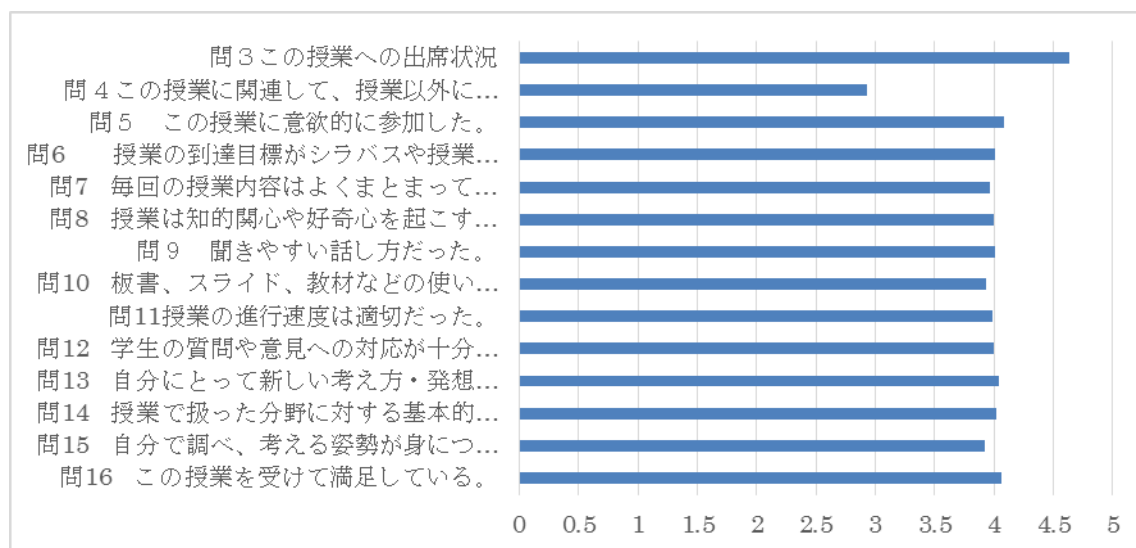
2. 保健科学部 看護学科

1. 調査方法

- 1) 調査時期：平成 26 年度前期末・後期末
- 2) 調査対象：看護学科の科目担当者
- 3) 調査方法：概要の通り
- 4) 設問：概要の通り
- 5) 授業評価実施数
 - ① 授業評価アンケート回答数（学生の延べ人数）：6,291 名
 - ② うち学科長に報告書が提出された科目数：61 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別授業評価結果（図 1）



設問別にみると、各設問において平均値は 3.9 以上と高い評価を得ている。特に 4.2 以上と高い評価を得た設問は、問 5 (意欲的な授業参加)、問 13 (新しい考え方、発想を得ることができた)、問 14 (授業分野に対する基本的な知識を得た) 問 16 (授業満足) である。問 3 (出席状況) は高く、問 4 (授業 1 回当たりの自己学習時間) はまだ少ないが平成 25 年度より少し長くなっている。

演習科目に対する設問は、他の問いと大きな差はないが、演習科目の設問である問 17 (到達度の確認) 4.29、問 18 (教員間の連携) 4.24 となっている。看護学科独自の設問である、問 19 (具体的な説明) 4.20、問 20 (心に響く内容) 4.21 といずれも高評価を得た。

2) カテゴリー別平均値（表 1）

平成 26 年度のカテゴリー別平均値は、Ⅰ 学生自身、Ⅱ 授業内容、Ⅲ 授業方法、Ⅳ 学習成果のすべてにわたり、3.9～4.0 である。昨年と比較すると、カテゴリーすべてが 0.1 上昇し

ている。Ⅴ総合評価においても 4.1 と高い評価を得た。

表 1：カテゴリー別平均値

	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 総合評価
平成 26 年	3.9	4.0	4.0	4.0	4.1
平成 25 年	3.9	3.9	3.9	3.9	4.0

3) 学科長に提出された教員の授業評価報告書結果

①学科長に提出された教員の授業評価報告（兼任教員・非常勤を含む）について、まとめた。

本年度は 61 科目が提出された。（表 2）

表 2 学科長に提出された授業評価結果（兼任教員・非常勤を含む）のまとめ

科目数	一科目あたりの履修者数	出席率 (%)	定期試験 成績平均	カテゴリー別評価平均				
				I	II	III	IV	V
61	65.03	95.4	76.6	3.92	4.02	4.05	4.04	4.13

教員が（兼任教員・非常勤教員を含む）が、学科長に提出した授業評価報告書のまとめの結果では、カテゴリー別評価平均が、いずれも全体で出された看護学科平均値より上まわった値が示された。

教員の自主的な提出科目 61 科目の平均であることから、表 1 の数字と異なる結果となっているが、全体的にみると同様の結果を示している。

②学年別評価結果（表 3）

表 3 学年別評価結果（複数学年が履修する科目を含み延べ 62 科目）

学年	科目数	一科目あたりの履修者数	出席率 (%)	定期試験 成績平均	カテゴリー別評価平均値				
					I	II	III	IV	V
1	19	78.1	97.6	76.9	3.71	3.89	3.88	3.81	3.97
2	22	73.4	95.4	74.7	3.97	4.21	4.26	4.25	4.32
3	14	49.9	94.3	80.2	3.91	3.72	3.71	3.76	3.79
4	7	47.3	94.8	66.9	4.14	4.24	4.21	4.21	4.21

学年ごとの集計結果からみると、4 年生においてはカテゴリー別評価の平均値が 5 つのカテゴリーすべてが 4.0 以上となった。なお、本授業評価は、実習科目は含まれていない。

③ 必修・選択科目別評価結果（表 4）

表 4 必修・選択科目別評価結果

必修・選択	科目数	一科目あたりの履修者数	出席率(%)	定期試験成績平均	カテゴリー別評価平均				
					I	II	III	IV	V
必修	42	84.8	97.17	73.6	3.92	4.01	3.98	3.97	4.04
選択必修	11	32.5	91.6	81.7	3.85	4.02	4.08	4.05	4.2
選択	10	23.3	94.3	78.5	3.74	3.88	3.99	3.99	4.07

必修・選択科目別の集計では必修科目、必修選択よりも選択科目のほうが、授業内容についての学生の授業評価が低かった。これは、学生は選択科目については、授業内容への期待が高いが、実際の授業が期待に合致していないことを示唆していると考えられる。Vの授業への満足度に対しては、必修・選択必修・選択科目とも4以上を示し、高い評価を得た。

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 全体では、5分野の回答の平均値が4.0以上と昨年より上昇したことは、個々の教員が継続して授業改善に取り組んでいることを示している。学生自身の問4の授業以外に学習した時間は昨年よりは増えたが、依然として2.93と他の項目より低くなっているので学生への自覚をさらに促す努力をしたいと考える。授業内容では、問7の授業内容のまとまりが他の項目よりも低く、個々の教員の授業内容改善を具体化していくようにしたい。授業方法では、問10の板書、スライド、教材の使い方の評価項目、問11の授業の進行速度の項目については4以下であった。

2) 「学習成果」の中では、問15の自分で調べ、考える姿勢が身についたという項目については、他の項目より低く、学生の主体的な学習態度を養う授業を工夫する必要があると思われる。

3) 学生の授業評価は、担当教員がその結果を真摯に受け止め、自己の教育活動を振り返るきっかけになるものである。授業改善策については、学科会議で報告され検討されてきたが

効果的な授業内容、授業方法の改善については、具体的、実際の事例を共有化し学科内だけでなく、学内での検討、研究を活性化していきたいと考える。

4. 授業の改善策の検討

「学生による授業評価」を受けて学科長報告では、多くの授業改善策が提案された。

<授業内容>に関わるもの

・前期：

- ①教授目標の学生への浸透と学生へのニーズに応じた授業展開を図る
- ②担当する教員間で内容の共有の徹底化
- ③DVDを通し…参加型の授業を目指す
- ④振り返りの時間の確保などが提案された。

・後期：

- ①アクティブラーニングの導入により、授業内容と関連して自己学習が整えられるよう
 - ②適切な問や異論を投げかける
 - ③自己学習の課題の工夫
 - ④学生自身が意見を他者に伝えることができる授業構成の工夫
 - ⑤授業内容が理解しやすくなるような学習課題を提供
 - ⑥LMSシステムについて、その長所を活用して効果が上がるように
 - ⑦ミニテストや学習ノートの提出
 - ⑧視覚的な教材の工夫
 - ⑨グループワークで意見発表
 - ⑩SP との演習
- などが提出された。

<授業方法>の改善策

・前期：

- ①グループワークのグループの人数を増やす
- ②「フィジコラボ」を設けポイントとなるフィジカルアセスメント内容を掲示
- ③知的関心を抱かせ主体的に学ばせる方法が課題などが提出された。

・後期：

- ①毎回の授業後にリアクションレポートを書いてもらい学生の理解度を把握する
 - ②出席チェックの方法の改善
 - ③グループ発表時のタイムキーピングを厳密に
 - ④配布資料は厳選する
 - ⑤視聴覚教材を用いた効果的な授業展開
 - ⑥オフィスアワーやポータルシステムを活用した双方向授業の実践
- などが提出されている。

これらの授業改善策について教員間でさらに共有化し、効果ある実践は積極的に取り入れていくことが授業の活性化につながると考える。

3. 教育学部 こども教育学科

1. 調査方法

- 1) 調査時期：平成 26 年度 前期末・後期末
- 2) 調査対象：こども教育学科の科目担当者
- 3) 調査方法：概要の通り
- 4) 設問：概要の通り
- 5) 授業評価実施数
 - ①授業評価アンケート回答数（学生の延べ人数）：5893 名
 - ②うち学科長に報告書が提出された科目数：115 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布

平成 26 年度前後期こども教育学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

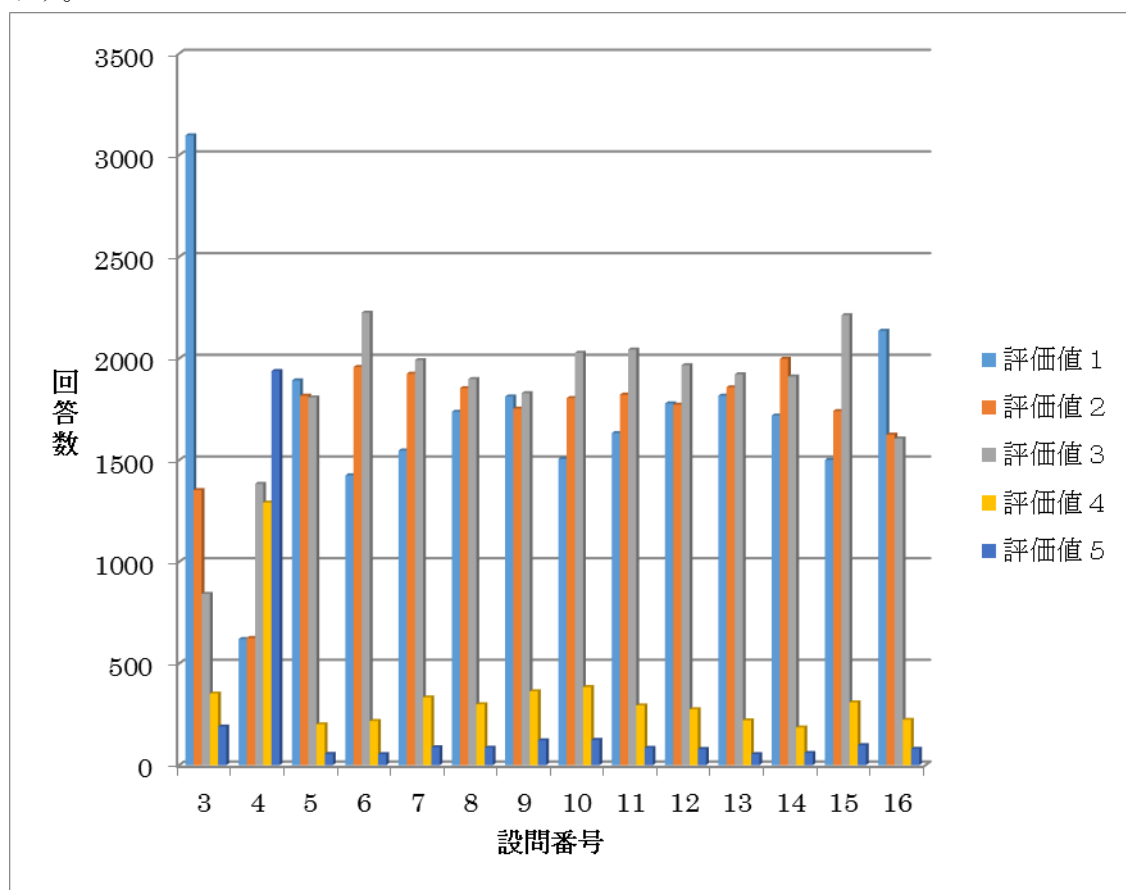


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値

各設問の平均値を図 2 に示す。設問 3～16 の各設問において平均値が 4.0 以上だったのは、設問 3 の「この授業への出席状況は？」のみだった。また、最も平均値が低かったの

は、設問4の「この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業1回あたりの平均時間）」であり、中央値3ポイントを下回っていた。その他の項目はすべて3.7から4.0未満の範囲に分布していた。これらのことは昨年の結果と同じ傾向である。

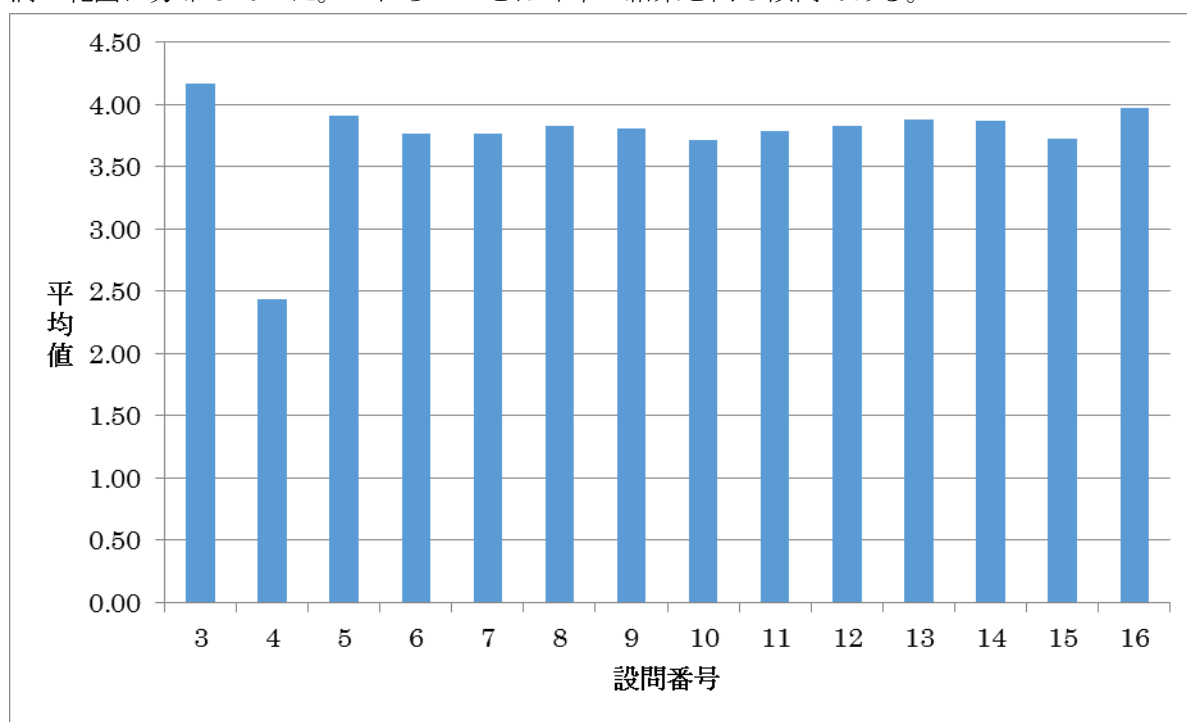


図2．設問別平均値

3) カテゴリー別平均値

カテゴリー別平均値を表1に示す。各平均値は3.5～4.0の間に分布していた。高いものから V総合評価>II授業内容=III授業方法=IV学習成果>I学生自身の順であり、設問別平均値同様に、昨年度の結果と同じ傾向である。

表1 カテゴリー別平均点

I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習成果	V 総合評価
3.5	3.8	3.8	3.8	4.0

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 全体評価

設問別評価では、昨年同様に全学科を通じて授業への出席状況の平均値は相対的に高いが、授業時間外での学習時間は相対的に低いという傾向がみられる中で、本学科の平均値は出席状況（こども教育学科：4.32／全体：4.55）、授業時間外の学習（こども教育学科：2.44／全体：2.65）と、いずれの項目も全体平均値を下回る結果となっていた。数値だけを見ると、学習意欲の低下が懸念されるが、一部の学生は就職に向けて、下級学年の間から授業科目以外の学習も進めていることもあり、一概に学習意欲の低下という解釈を当てはめることはできない。

また、問5～16の平均値だけに注目すると、やや肯定的な回答であることを示す3.72～3.97の値であると言える。一方で、回答の内訳をみると、設問3「この授業に意欲的に参加した」は5（そう思う）、設問14「授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた」は4（どちらかと言えばそう思う）の回答数が最も多かったが、その他の設問では、3（どちらでもない、ふつう）の回答数が最も多く、中立的な意見も多数いることがわかる。

平均値上位3位の設問は、設問16「この授業を受けて満足している。」（3.97）、設問5「この授業に意欲的に参加した。」（3.92）、設問13「自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。」（3.88）であった。一方、下位3位の設問は、設問10「板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。」（3.72）、設問15「自分で調べ、考える姿勢が身についた。」（3.72）、設問6「授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。」（3.76）であった。上位、下位の設問も昨年同様の傾向がみられる。より一層の授業方法の改善が望まれるが、同時に、シラバス上で指導計画を示すだけではなく、毎回の授業内容の位置づけを明確に提示し、また、毎回の学習目標の達成を学生が実感できるような工夫が必要ではないだろうか。自らの実感が学生自らの授業時間外の学習意欲にもつながると考える。

2) カテゴリー別評価

Ⅱ授業内容、Ⅲ授業方法、Ⅴ総合評価については、全学科平均値と同値であったが、Ⅰ学生自身、Ⅳ学習成果については、全学科平均値よりも0.2あるいは0.1ポイント低かった。昨年と同様に最も低かったのはⅠ学生自身であるが、これは設問2の授業時間外の学習時間の短さが大きくポイントを下げており、今後も時間割が過密なカリキュラムの中で、大幅に時間数が増える見込みは持てない。完成年度以降のカリキュラム改編における課題でもある。

4. 授業の改善策の検討

今年度は「学生による授業評価」を受けて学科長宛に115科目の報告書が提出されたが、この中で多くの授業改善策が提案された。また、昨年度より前期開講科目の改善策を後期の授業に活かせるようにしたことも定着してきた。

以下に本学科より出された改善策を示す。

●授業内容

- ・ 学生自身の取り組みを促す作業を設け、理解が定着する方策を検討する。
- ・ 授業開始時に前回の復習をする。
- ・ 授業終了時のまとめと質問時間を設定する。
- ・ 授業の全体構成や毎回の授業の意図などもっとわかりやすく示す方法を工夫する。
- ・ 模擬授業の導入を早め、指導案の説明および実践に時間をかけるよう再度、授業を組み立て直す。
- ・ 模擬授業や指導案作成を通して、教員として必要な指導力、学級指導、授業規律などについても伝える。
- ・ 模擬保育のグループで保育案を考える時間を授業内でつくる。

- ・各課題の共通項に気づかせることで、練習の効率上げる工夫をして、課題に取り組む意欲を喚起させる。
- ・学生の意欲や好奇心を刺激するような素材の提供について検討する。
- ・授業の工夫の仕方を考えさせるように、問いかけを増やす。
- ・求めていることをより明確にして、さらに満足度を上げていく。
- ・知的関心や好奇心を起こすような授業にする。
- ・考える習慣を身に付けるために、その時に学んだことを振り返ってもらう。
- ・学生の自律的学習につながるような授業外学習のための課題を出す。
- ・次回授業のための予習箇所を明示する。（授業外学習時間の伸長）
- ・実習や自宅や自分の環境で実践する機会を作る。
- ・指導の方法を学生と一緒に考えて実践し、シミュレーションの中から構築していく。
- ・手遊びを多く取り入れる。
- ・具体例と授業内容を絡ませて展開できるように心がける。
- ・学生自身が考える機会を奪わないよう教えすぎない。
- ・対象であるこどもの姿を忘れずに課題に取り組む意義を常に意識させる。
- ・童謡の歌詞部分を一度詩として声を出して読む、あるいは縦書きに書いてみる等を行うことで意識を高め、対象となる幼児・児童の発達と音楽との関連を理解させる。
- ・授業の最初に入れている「今日の言葉」が、保育者（教員）として育っていくための潜在的カリキュラムの一環であることを解説する。
- ・実験の準備を含め、予習(簡単な指導案の作成)をさせる。
- ・レポート作成のための個別実験を3コマに増やしたい。
- ・各自がテーマを決めて、プレゼンテーションを行わせる。
- ・教員採用試験受験予定者に重点を置いたが、それ以外の者の学習意欲関心を喚起することを考慮した講義内容としていく。
- ・公務員試験を意識してプリントの課題を出しているが、その答え合わせにもう少し適切な解説をする。
- ・模擬授業の時間枠をゆったりとり一人ひとりの授業を実現させ、指導実践力の向上を図る。
- ・正しい筆記用具の持ち方というような基礎基本に立ち返る時間も確保する。
- ・同一科目名Ⅰ，Ⅱで担当教員が異なる場合の授業内容と連携の方法。
- ・要点を丁寧に説明することを意識する。
- ・学生が、「この授業を受けると現場で役立つ」と思えるような授業展開を模索。
- ・学生の疑問を引き出し意欲付けを行う。
- ・毎回、丁寧に授業の要約をする。
- ・講義中心の授業から実験・観察、ものづくり的な分野も工夫して取り入れる。

●授業方法

対学生

- ・学生とのキャッチボールを最も取り入れて交流を深める，
- ・数名の授業をかき回す学生に対して，学生との信頼関係を地道な所から積み上げる。

- ・学生との適切な距離を測りながらの関係性で行動する。
- ・明確に話すことを心がける。
- ・何らかの方法で、学生を静かにさせる。
- ・静穏な環境になるように、話している学生には注意をする。
- ・学生の反応、理解度を確認しながら話す。
- ・理解しにくい生徒へのよりきめ細かな指導を心がける。
- ・学生の実態を考え、ひとつひとつ事例を挙げ、噛み砕いた説明をする。
- ・一人ひとりの学生の思いや考えをより丁寧に受けとめる。
- ・繰り返し説明する。
- ・学生に考える姿勢の必要性をより意識してもらう。
- ・対話形式の授業を心掛ける。
- ・ワークシートにコメントをつけて返却し、スモールステップで学習の成果が確認できるような仕組みを作る。
- ・手書きの小レポートに関しては、PDF 化して記録を残した上で返却する。
- ・資料の改善や学習のポイントを明確化する。
- ・予習・復習を積極的にできる働きかけをする。
- ・道具を雑に扱わないように指導する。
- ・早く集合ができるように指導する。
- ・学生からの情報を聞いたり、授業を充実感をもって取り組める工夫を考える。
- ・話すスピードをさらに遅くし、口述筆記を最小限にする。
- ・レジュメの内容をもう少し減らし、授業のスピードを少し遅くする、ついていけない学生をなくす方向へ努力する。
- ・体を動かすことを主にして、説明を簡略にする。
- ・学生が自分で選んだ教材について自主学習を行い、調べた内容をグループで討議させる。
- ・自主的に調べてきたこと、関連する疑問や情報を見つけてきたことについて、報酬（加算点）を与えるなどの工夫をする。

欠席・遅刻

- ・欠席率が高い（特に1眼目）ので、厳しく指導する。
- ・クラス開講の授業について、1時限の方が欠席が多くなるので、途中でクラスの入替え等も検討する。
- ・遅刻・欠席に対する減点の仕方等を第一回目の授業で学生にはっきりと認識させ、出席することの大切さを認識させる。
- ・遅刻者の公平な取り扱い（遅刻時間の長短への対処）

教員の態度

- ・気候条件等で意欲を失う学生への対応をする。
- ・クラス・学年によって、態度や言葉遣い等の温度差を生じないように留意する。
- ・学生が、本気で改善しようと思えるような注意喚起の仕方を模索。
- ・定期テスト前の課題提出等、負担を強いることのないような授業展開を考える。
- ・学生自身にもっと考えさせる工夫をする。
- ・聞き取りやすい話し方、発声に留意する。

- ・板書を改善する。（最後部座席から容易に確認できる文字サイズと OHC の活用）
- ・パワーポイントをもっと見やすくする。
- ・授業準備時間をさらに取る。
- ・時間配分を公平に，又，グループレッスンも取り入れる。
- ・小テストについて，回数より内容、時期を検討する。
- ・グループ活動について，グループ編成の際の配慮をもっときめ細かく行う。
- ・説明、実技、振り返りの時間配分を工夫する。
- ・発表の時期を遅らせるか、発表の場所を増やす。
- ・多人数にも対応できるより効果的な演習方法を開発する。

教材

- ・教育現場での公開授業の授業ビデオを見させて教育実習での授業実践へのモチベーションを高めさせる。
- ・視聴覚機器w使用する。
- ・プリントを利用する。
- ・資料を充実させ学生が指導案を作成しやすい学習環境を整える。
- ・実験器具などより具体的なものを使用して講義する。
- ・資料とプレゼンテーションのマッチングを確保する。
- ・ピアノのレッスンについて。自主学習をする意欲、技術向上のため、録音機器の使用を検討する。
- ・課題を「manaba」上にファイルを置き、そこからダウンロードさせる。
- ・「manaba」を活用して、提出物の管理をしたい。
- ・「manaba」を実際に体験させる機会を作りたい。
- ・「授業以外に学習した時間」について，復習を中心に取り組むことのできるワークシート等が必要である。

その他

- ・受講対象者の検討。
- ・交通費の軽減，入場料徴収について検討する。
- ・私語の問題について，教員間で情報交換やノウハウ伝授が必要。
- ・発展途上国での実習は「安全の確保」を最優先事項として考え，全体を統率する指導者と、保健衛生や医療の知識のある医師や看護師が必要である。
- ・国際情勢を見極めながら訪問国を策定する。

●設備

- ・ホワイトボードとスクリーンを同時に両方使えるようにしてほしい。（6 2 0 1 室）
- ・テニスコートと運動場の間のフェンスが取れそうになっているので修理をしてもらいたい。
- ・ボードマーカーの随時点検，持参。
- ・マイクの音量調節

今年度の教員があげた改善策の記述の中で特筆すべき点を 2 点あげたい。

まず、「同じ授業内容にもかかわらず、クラスによって評価に大きな差が生じている」という内容が、複数の科目からうかがえたことである。学生の側の問題だけではなく、クラス間の授業の質と教員の対応の公平性を保ち、改善に向けて意識する必要がある。

次に、後期改善策には導入が決まった **manaba** への期待が見られたことである。活用状況や運用上の問題点などは、次年度以降に随時報告されるであろうが、まずは各教員が利用を開始し、新システム活用のための多くの情報提供、情報共有が必要となるだろう。

以上、数多くの改善策が教員から提案されている。これらの改善策を共有・活用して、大学での学びを通して学生が主体的に学ぶ態度を身につけることができるように努力したい。

4. 短期大学部 口腔保健学科

1. 調査方法

- 1) 調査時期：平成 26 年度 前期末・後期末
- 2) 調査対象：口腔保健学科の科目担当者
- 3) 調査方法：概要の通り
- 4) 設問：概要の通り
- 5) 授業評価実施数
 - ① 授業評価アンケート回答数（延べ人数）：4393 名（受講者数 4809 名、回答率 90%）
 - ② うち学科長に報告書が提出された科目数： 33 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別回答分布（図 1）

平成 26 年度前・後期口腔保健学科の学生による授業評価調査の設問別回答分布を図 1 に示す。

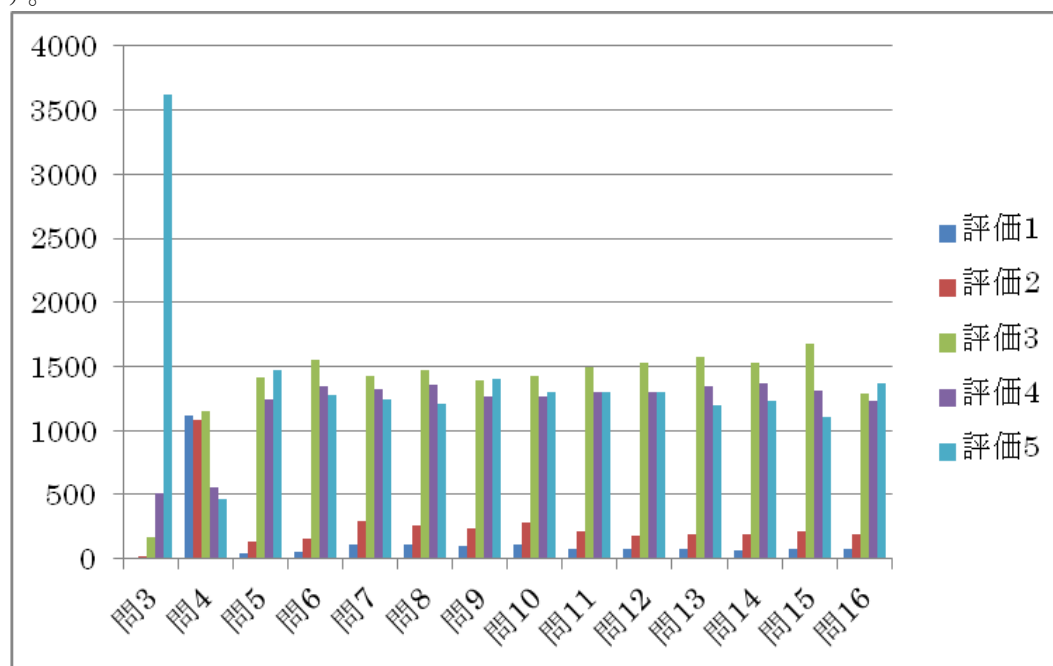


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値（図 2）

各設問の平均値を図 2 に示す。設問 3「授業への出席状況」の平均値が 4.78 と突出して高く、設問 4 の「授業以外の学習時間（授業 1 回あたりの平均時間）」は 2.58（前年度より 0.2 ポイント上昇）と他の設問に比較して極端に低い評価であった。その他の項目はすべて 3.7～3.9 の範囲に分布しており設問間に大きな差は認めなかった。

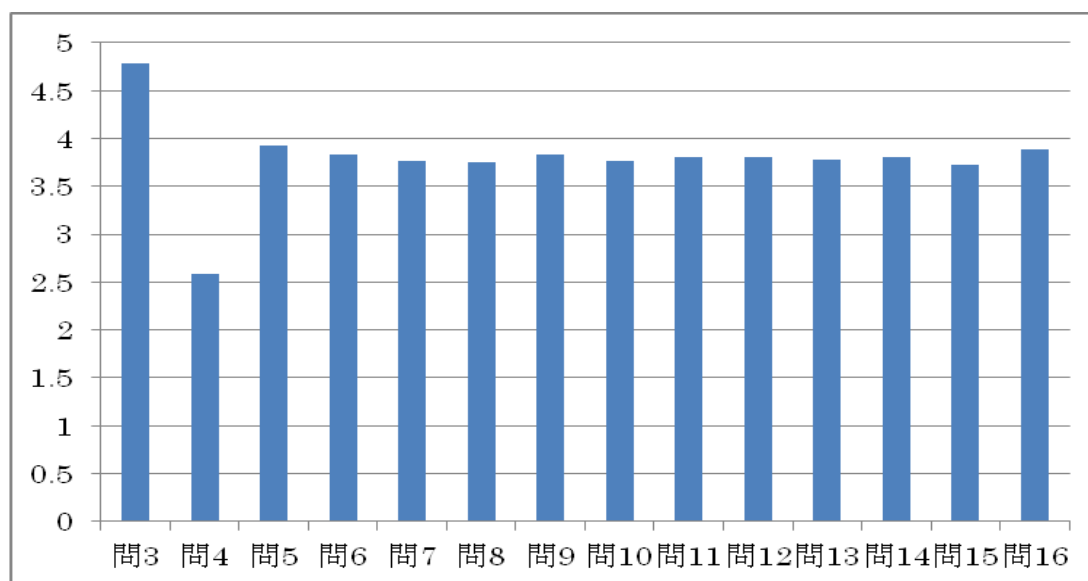


図2 設問別平均値

3) カテゴリー別平均値 (表1)

カテゴリー別平均値を表1に示す。各平均値は昨年度より0.1～0.2ポイント上昇したが、学生自身以外のカテゴリーで全学科の平均よりも0.1ポイント低い評価となった。本学科では授業内容の評価は他学科よりも低い、出席状況は良好ということである。ⅡからⅤの各カテゴリー間に大きな差はない。

表1 カテゴリー別平均点

I 学生自身	Ⅱ 授業内容	Ⅲ 授業方法	Ⅳ 学習成果	Ⅴ 総合評価
3.8	3.8	3.8	3.8	3.9

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 全体評価

設問別評価では、全学科を通じて設問3の出席状況が最突出して高い評価（平均4.78）であり、設問4の授業時間外の学習が最低評価（平均2.58）となった。この傾向は例年とまったく同様であり、授業には出席しているが、授業時間外での学習には消極的であることを示している。前期（平均2.54）より後期（平均2.67）の授業外学習時間が微増したことは評価できる。

また、これらの設問を除くすべての設問において毎年のことであるが3（どちらでもない普通）と評価した学生が圧倒的に多く、1, 2が非常に少ないという傾向が認められる。

しかし、比較的评价が高い（5が4よりも多い）設問は、5「意欲的に参加」、9「聞きやすい話し方」および16「満足度」であり、低評価（1, 2）が比較的多い設問は7「授業内容の理解」、8「知的好奇心を惹起」、10「板書、スライド」、11「進行速度」、15「自分で調べ、考える姿勢」であった。

これらのことから、授業には意欲的に参加しており、一部には授業内容や進行速度に不

満を持つ者もいるが概ね授業には満足している学生が多いことに気付く。しかし、自ら調べ考える姿勢がなく、授業時間外の学習時間も少ないことから授業そのものが「習得する」「考える」授業にはなっておらず、いまだに「教えられる」ことが中心であることを物語っている。教員が目標にすべきこととして、授業の中で（できれば授業の前に）学生が「疑問を持ち考える」ことを意識した授業方法であり、予習を前提とした授業内容である。抜本的な授業内容の見直しを図らなければいつまでも評価3程度の授業が続くことになる。

2) カテゴリー別評価

全学科平均ではすべてのカテゴリーで4.0を下回っている。本学科は、Ⅲ「授業方法」以外のカテゴリーにおいて全学科平均よりも低い（0.1ポイント）評価であった。全学的にⅠ「学生自身」の中でも「授業外学習時間」の少なさが目立つが、出席状況が高いためマスクされた形になっている。全ての学科において、学生の自学自習時間が確保できるような授業方法の導入など画期的なFD活動が求められている。

4. 授業の改善策の検討

「学生による授業評価」を受けて学科長宛に提出された報告書から改善策を学科会議で共有することにより授業改善に活かした。

<授業以外の学習時間の確保>

- 学習意欲が高まるような課題の出し方や内容において工夫をしていきたい
- 授業時間外学習のポイントを上げなくてはならないと思いつつ、学科の特性で、細かな試験勉強に明け暮れている学生さんの様子を見ると、課題を出しづらくなる。⇒負担のないように、授業外学習の課題を考えていきたい
- 事前学習（予習）が常態化できるような仕組みを作る。授業の最初に予習を前提としてテストを実施するなどの工夫が必要。
- 授業を面白いと感じさせる工夫。TBLはそのひとつであるが、教員の力量が問われる。

<授業内容>

- 授業の達成目標があまり理解されていないという評価であったため、毎回の授業の始めに、今日の授業で学んでもらいたい事を明確に提示していく必要があると考える
- 学生が活動の場所を選択出来るようにしたり、学生自ら活動の場を探して実践を行う等の対応に取り組んでいきたい
- 学生の理解度に差があるため、どのレベルに合わせて講義・実習を行うかが課題
- 教員評価だけでなく学生同士の相互チェックも取り入れて、反復しながら学習する習慣をつける取り組みをしたい
- より分かりやすい授業進行と臨地実習につながる内容で取り組んでいきたい
- 教科書とプリントの繋がりをもう少し授業に取り込めるようにしていきたい。
- 中間に前半の授業を振り返る時間を設定したが、今年度は時間の制約があり中間のまとめの時間が取れなかったもので、次年度はその必要性を検討する
- 経験的に学ぶことの配置について検討していく

- 時間数が限られているため、症例を展開することより知識の整理にウェイトを置くべきか迷う
- 課題提示や授業方法を工夫して、学生の能動的な学習を促すようにしていく必要がある
- 演習内容の見直し
- 担当教員の演習の時間配分を見直す
- 学生の学習意欲を高められるような内容の授業にしたい
- 発表方法等、考えてみたい
- パワーポイントの使用により、内容が増えすぎたのだろうか。寝る学生が多く、ノリが良くなかったので、興味を持てるよう工夫したい⇒パワーポイントをもっと見やすくする。
- 要点をまとめた板書や虫食い資料、パワーポイントのレジュメを用意するなどのサービスは、かえって学生の理解を低下させる。分かりやすい授業ノートが作成できる能力の養成（1年生でやってほしい）が必要。

5. 短期大学部 看護学科通信制課程

1. 調査方法

- 1) 調査時期：平成 26 年度 春期・秋期スクーリング後
- 2) 調査対象：看護学科通信制課程のスクーリング科目担当者
- 3) 調査方法：概要の通り
- 4) 授業評価実施数
 - ① 授業評価アンケート回答数（学生の延べ人数）：1289 名
 - ② うち課程長に報告書が提出された科目数：8 科目

2. 学生による授業評価の集計結果

1) 設問別解答分布

平成 26 年度前後期 看護学科通信制課程の学生による授業評価調査の設問別解答分布を図 1 に示す。

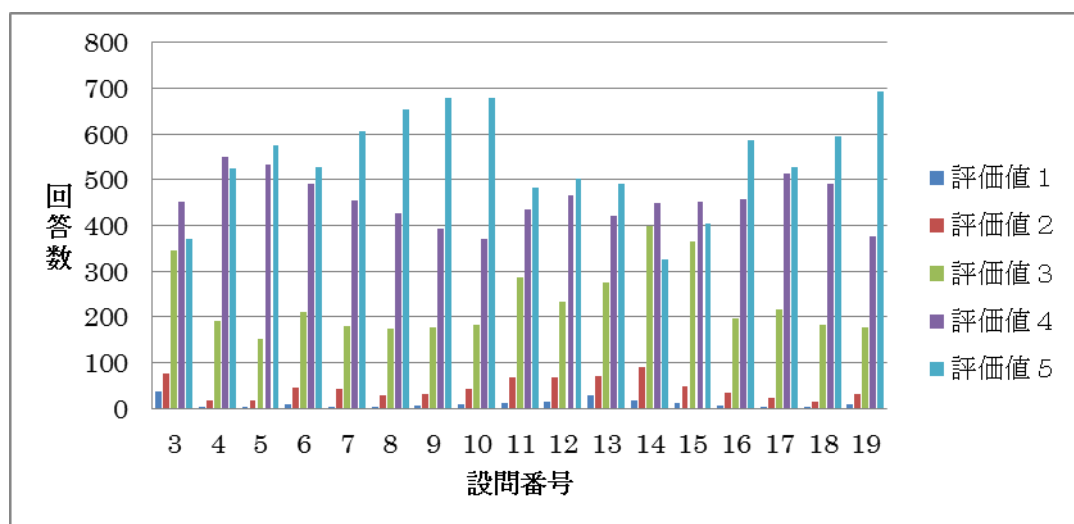


図 1 設問別回答分布

2) 各設問の平均値

設問 3～19 の各設問において平均値が 4.0～4.5 と高かった設問は 13 項目ある。4.30 以上の項目 5 項目あり、最も高かったのは授業内容の問 8「抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった」と「授業内容は表面的でなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。」で、次いで総合評価の「この授業を受けて満足している」であった。一方、平均値が低い設問は授業方法の「ノートをとるための時間」、学生自身の「シラバスを読んで授業に臨む」であった。

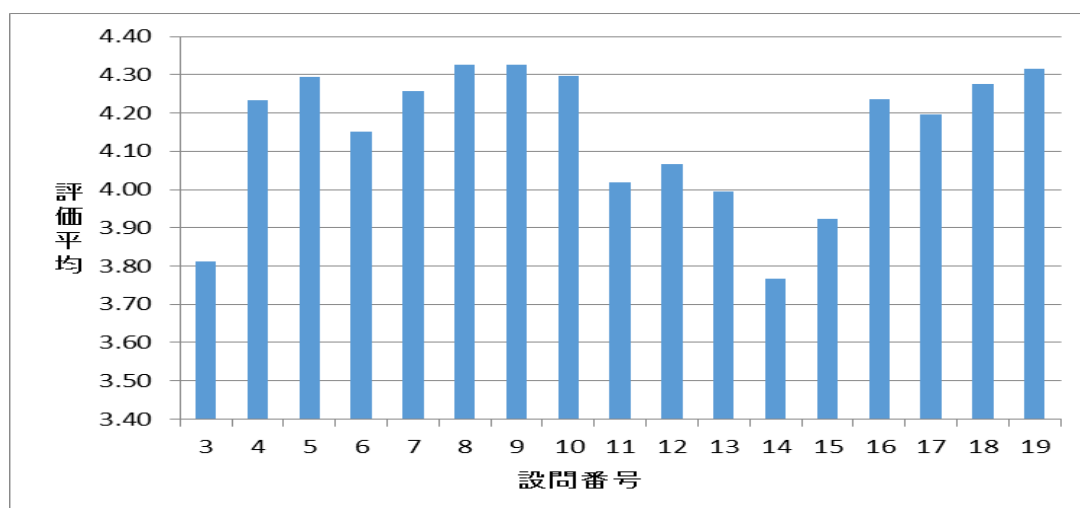


図2 設問別平均値

3) カテゴリー別平均値

すべてのカテゴリーにおいて4.0以上であった。高いものから V総合評価=Ⅱ授業内容=Ⅳ学習成果>Ⅰ学生自身>Ⅲ授業方法の順であった。

表1 カテゴリー別平均値

I 学生自身	Ⅱ 授業内容	Ⅲ 授業方法	Ⅳ 学習成果	V 総合評価
4.1	4.3	4.0	4.3	4.3

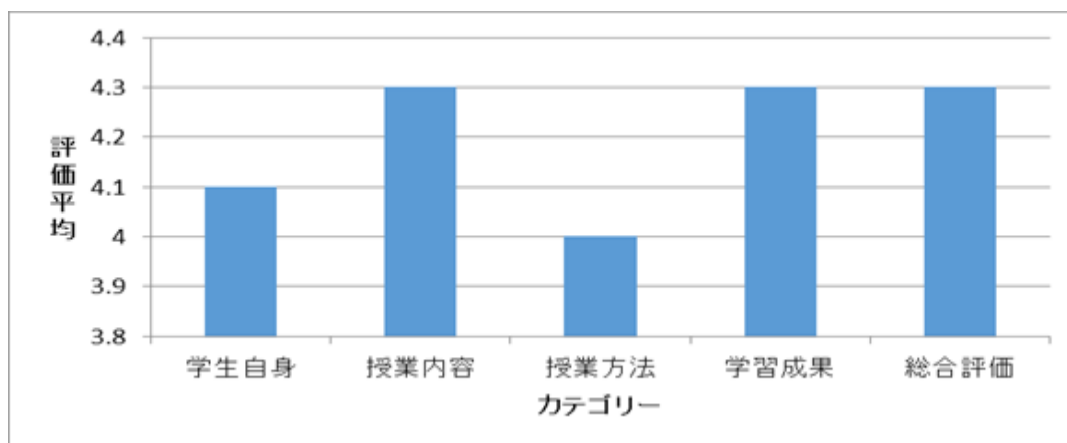


図3 カテゴリー別平均値

3. 集計結果の分析と問題の所在

1) 設問・カテゴリー別評価

設問別評価では、平均値が4.0～4.5と高かった設問は、17設問中13項目あり全体に高い評価を得ている。最も高かった項目は、「抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった」と「授業内容は表面的でなく教員自身の意見や考えを適度に示し、

心に響くものであった。」であったが、昨年度の改善案で挙げられた学生の理解を深めるための、授業内容や方法の工夫の成果であることがいかが得る。結果、総合評価の「この授業を受けて満足している」につながっていると考えられる。通信制課程では、対面授業の後は自宅での学習となりモチベーションを維持することが学生の一番の課題となる。入学当初の対面授業で、その後の学習の動機づけとなるような授業とすることが重要な課題として例年考えられているが「この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組めますか」項目は 4.3 と高い評価を受けていることから、これからの学習に向かう姿勢を養うことにつながっていると考えられた。一方「シラバスを読んで授業に臨む」「ノートをとる時間がちょうどよい」などは、平均値が低かった。カテゴリー別評価でも、すべてのカテゴリーにおいて 4.0 以上と高い評価を得ているが、Ⅲ．授業方法に関しては 5 つのカテゴリーの中で最も低い。授業方法の具体的な改善策を検討することが、今後も継続する問題点である。

2) 春期スクーリングと夏期・秋期スクーリングの比較

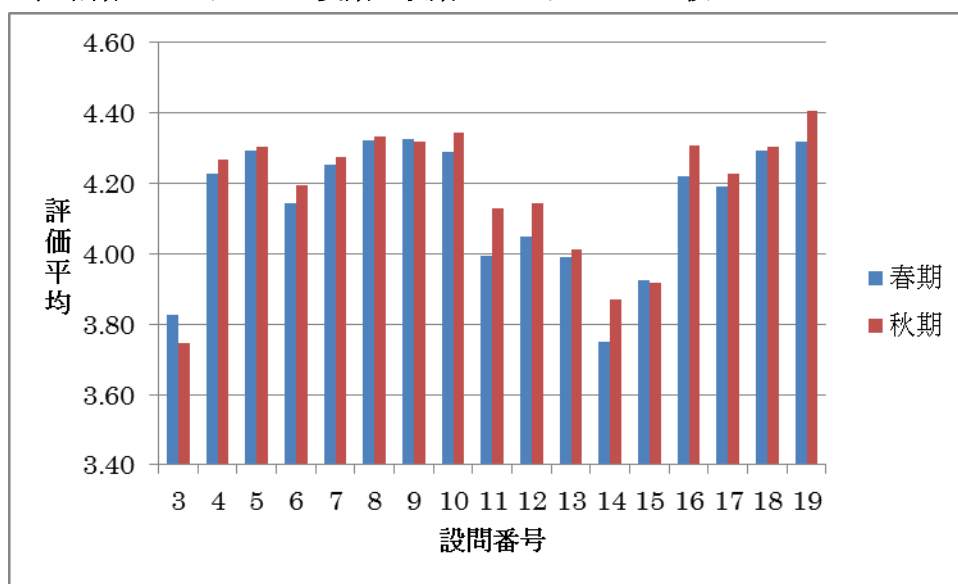


図4 各設題平均値の比較（春期と秋期）

昨年度は、入学直後に開講される春期スクーリングの受講生に比べて、秋期スクーリング受講生は全体に評価平均が低い傾向が見られ、17 設問中 11 設問で秋期スクーリングの評価平均が低いという結果だったが、今年度は、17 設問中 15 設問で秋期スクーリングの評価平均が高かった。春期スクーリングでの授業評価結果を 10 月の課程会議で共有し、秋期スクーリング内容に生かした効果が出ていると考えられる。昨年度同様、秋期スクーリングで低い評価となった設問は「シラバスを読んで授業内容を確認して臨む」で、入学後の学習意欲を維持するための工夫の必要性が示唆されている。

4. 授業の改善策の検討

前期授業評価報告書をもとに 10 月の課程会議で「授業の改善策について」討議し、次年度シラバスの内容の見直しに生かした。教員からは以下のような改善策が挙げられた。

1. 授業内容

- ・ 内容の精選を行い、更にポイントを明らかにする。
- ・ 3日間で7時限という時間の制約があり、教授内容の充実を図ることが必要。

2. 授業方法

(レジュメ・資料・パワーポイントなど)

- ・ 学生が聞きなれない用語等については、説明の工夫はもとより、後から読んで理解の補助になるように、さらにレジュメの内容を見直して改善する。
- ・ ある程度のまとめ・レジュメ・パワーポイントなどの印刷物を配布したい。

(バランスと時間配分、ノートをとる時間)

- ・ テキストとパワーポイントを用いて効果的な内容となるよう授業を進めているが、受講学生は、すべての内容をノートしなければならないと思いがちであるので、ノートすべきところや、理解を深める内容について意図的に指示しながら、要点を確認するなどの改善を行っていく。
- ・ 「ペースが速い」と感じる学生にもできる限り理解を得るため、メモやノートの取り方について講義を行う、スライド資料にテキストのページ数の提示を行う、資料にもページ数を表示し、口頭でも複数回ゆっくりと話すように努める。
- ・ 本学においてスピードを指摘する記述が多く見られた。学生数が多いことで授業方法を他の地域と少し、かえていることもあり、そのため後半の時間が足りなくなっていることが考えられる。再度特に本学における授業方法の見直しを行う。
- ・ 授業の進行速度に関しては、伝える内容(項目)についてはなかなか削減しがたいが、説明方法と内容を見直していきたい。

(事例の提示)

- ・ 多く事例を提示していることが学生の理解を得ることに効果があると評価できるため、引き続き講義中に事例を提示して説明を行う。
- ・ 少しでもイメージしやすい事例を用い、授業に取り込んでいく努力は続けたい。
- ・ 抽象概念の理解につながるように、出来るだけ具体例を提示したり、学生が自信の体験に結び付けられるような発問したりするなど、学生が能動的に学修に参加できる工夫を検討していきたい。

(その他)

- ・ 授業前に概論授業の全体像を提示し、それぞれ話す内容について、目的と位置関係がわかるように工夫していきたい。
- ・ 日常生活の中で自我機能と関連付けて解説を工夫し、イメージしやすい工夫をしていきたい。
- ・ 全体の流れや、講義内容の目的が伝わりにくいところがあるのは否めない。現在、黒板の記述で項目を羅列し、説明をしているが、提示内容と方法をさらに工夫する必要がある。
- ・ 現場経験のある学生であり、活動の場は様々であるようなので、個々の体験を通じたディスカッションの時間をとるようにしていきたい。

3. 学習環境

- ・ 教室環境に関する改善を求める声もあった。空調や温度設定などの調整を学生の

様子を見ながら行っているが、講義を受けるにあたって事前案内も行っていく。

4. 学習成果

- ・ 学生の理解状況を知る為の手段として單元ごとの知識確認を行う。学んだ内容を今後の授業や実践の場で活用しながら、自ら学んで欲しい事も伝えていきたい。

5. 学生自身

- ・ 昨年度の反省を踏まえ、シラバスを読んで授業に臨むことを入学式の挨拶時に学生に呼びかけた。次年度は学修説明会でも呼びかけることを検討したい。
- ・ 春 1・3 のスクーリング終了時に、各教員が「次の概論スクーリングに向けてシラバスを読み準備しましょう」等の声かけを実施していくのも一案かと考える。
- ・ 概論スクーリングの準備は前もって早いうちに準備することが必要であると伝えることが大切であると考え。概論スクーリング受講前に学生の苦手意識を克服する取り組みを実施することは不可能であるため、改善は大変困難ではあるが、出来ることを実行していきたい。

特に、今年度は授業方法の工夫に関して、具体的に活発な意見交換が見られた。対面授業が少ない指導体制の中でできるだけ効果的に学生にかかわれるように、この話し合いを生かし、今後の学生の学習意欲の継続と学習成果の向上に向けて授業改善をしていきたい。

第3部 自己点検・評価委員会 年間活動方針報告

はじめに

平成26年度、本学は4年制大学として初めての大学認証評価を、高等教育評価機構を評価機関として受審いたしました。

大学認証評価基準では「自己点検・評価の結果の学内共有と社会への公表」が求められます。本学の自主的な自己点検・評価の報告書である「年次報告書」は、これまでは冊子化して全教職員に配布するとともに交流のある他大学・教育機関にも配布しておりましたが、「社会へ公表している」と言えるためには、大学ホームページ（HP）への掲載が必要不可欠となります。そこで、平成26年度の活動方針を、運営委員会、教授会の承認を得て、「自己点検・評価報告書（年次報告書）の大学ホームページ掲載をめざして」に決定しました。

大学HP掲載に向けた取り組み

平成26年4月の「平成25年度年次報告書」の活動報告を収集する時点では、まだ大学HPに掲載することについて学内に周知できていませんでした。

そのため、以下のように取り組みを進めました。

- 1) 平成26年4月：自己点検・評価委員会の年間活動方針案を運営委員会、教授会に提出し、承認を得た。大学HPには、教員個人の活動報告を除く原則としてすべての内容を「HP版平成25年度年次報告書」として掲載することとした。冊子版の平成25年度年次報告書には、これまで通り教員個人の活動報告も掲載し、全教職員および交流のある他大学・教育機関に配布した。
- 2) 平成26年8月：HP版平成25年度年次報告書を、まずHPトップの「お知らせ」欄に掲載した。
- 3) 平成26年10月：高等教育評価機構による現地調査が行われた。
- 4) 平成27年1月：大学HPのリニューアルに合わせて、HPの「情報公開」ページに「自己点検・評価」の欄を設けて「HP版平成25年度年次報告書」および「平成25年度短期大学部認証評価結果」を掲載した。
- 5) 平成27年3月には高等教育評価機構によって「適合」の評価が得られた。

現在の状況

平成27年5月時点で、大学HPの「情報公開：自己点検・評価」欄には、「HP版平成25年度年次報告書」、「平成25年度短期大学部認証評価結果」に加えて「平成26年度神戸常盤大学認証評価結果」も掲載されています。後2者は評価機関のHPとリンクしており、本学が作成した大学の「自己点検評価書」、短期大学部の「自己点検・評価報告書」も全文見ることができます。

取り組みへの自己評価

以上のように、自己点検・評価の結果を大学HPに見やすい形でまとめて掲載することで、「自己点検・評価の結果の学内共有と社会への公表」を達成できたと考えます。

第4部 「卒業生へのアンケート調査結果」 報告書

はじめに

本学のディプロマポリシー達成状況を評価するため、自己点検・評価委員会では卒業生・就職先へのアンケート調査を、大学全体の取り組みとして、平成24年度より開始しました。卒業生には卒後1年目を対象に毎年、就職先には3年に1度、調査を実施していく方針です。

平成24年度には医療検査学科、看護学科、口腔保健学科の卒業生および就職先に対して調査を実施しました。

平成25年度および26年度には、医療検査学科、看護学科、口腔保健学科、看護学科通信制課程の卒後1年目の卒業生を対象に調査を実施いたしました。

平成26年度の調査は、アンケート設問項目、アンケートの方法、送付・回収時期、回収データの集計・解析方法、いずれも平成25年度と同じです。

しかし、本年度はアンケート調査書類を卒業生の自宅に送付したためか、前年度より回収率が低下してしまいました。自宅を離れて就職している学生にはアンケート返送期日に間に合わせる事が難しかったことが要因と考えられます。

平成27年度の調査では、送付先を就職先に変更する予定です。

これまでと同様、卒業生から返送されたアンケート結果をキャリア支援課が集計し、学科毎に自己点検・評価委員が中心となって「卒業生アンケートへの調査結果」報告を作成いたしました。

この報告書が各学科における専門教育の改善・向上に役立ってくれることを願っております。現在の調査方法、結果の解析方法に対し、さらなる改善に向けてのご意見、ご要望をお寄せいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

1. 医療検査学科 卒業生へのアンケート調査結果報告

調査対象

平成 26 年 3 月に卒業生した 86 名

結果の概要

1. 回収率

	発送数	回答数	回収率
平成 26 年度	86	11	12.8%
平成 25 年度	85	22	25.9%
平成 24 年度	60	13	21.7%

回収率は昨年度より約 13%低下した。

2. 調査結果

A) あなたの進路をお答えください。

病院	6	55%
大学病院	3	27%
検査センター	2	18%

B) あなたは大学での学修や学生生活を通じて以下のものを身につけることができたと思いますか（教育目標の達成度）。

回答結果を次ページ（グラフ 1）に示す。

肯定的な回答（選択肢 4 又は 5）が 50%を超えたものは昨年度と比べ減少していた。

特に評価の高かったもの（肯定的な回答が 70%以上のもの）は、

「B6：医療検査に必要な基礎知識および基本的な専門知識を修得することができた。」

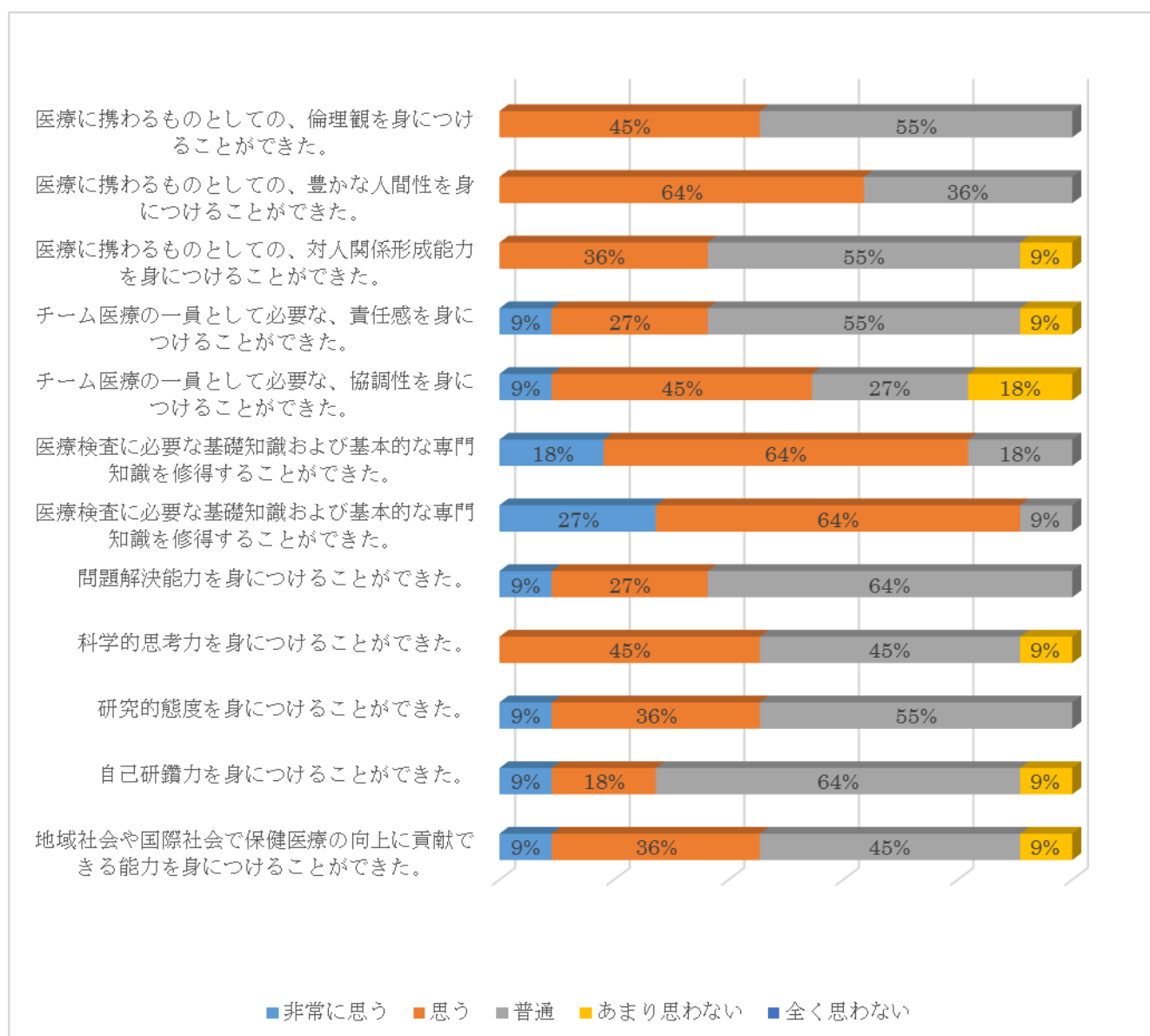
「B7：医療検査の実践に必要な基本的技術を習得することができた。」

の 2 項目であった。

特に評価の低かったもの（肯定的な回答が 30%以下のもの）は、

「B11：自己研鑽力を身につけることができた」

の 1 項目であったが、91%の卒業生が 5 段階評価の 3 以上と回答している。



グラフ 1. B:教育目標の達成度に関する設問の回答

また、

「B3：医療に携わるものとしての、対人関係形成能力を身につけることができた。」、

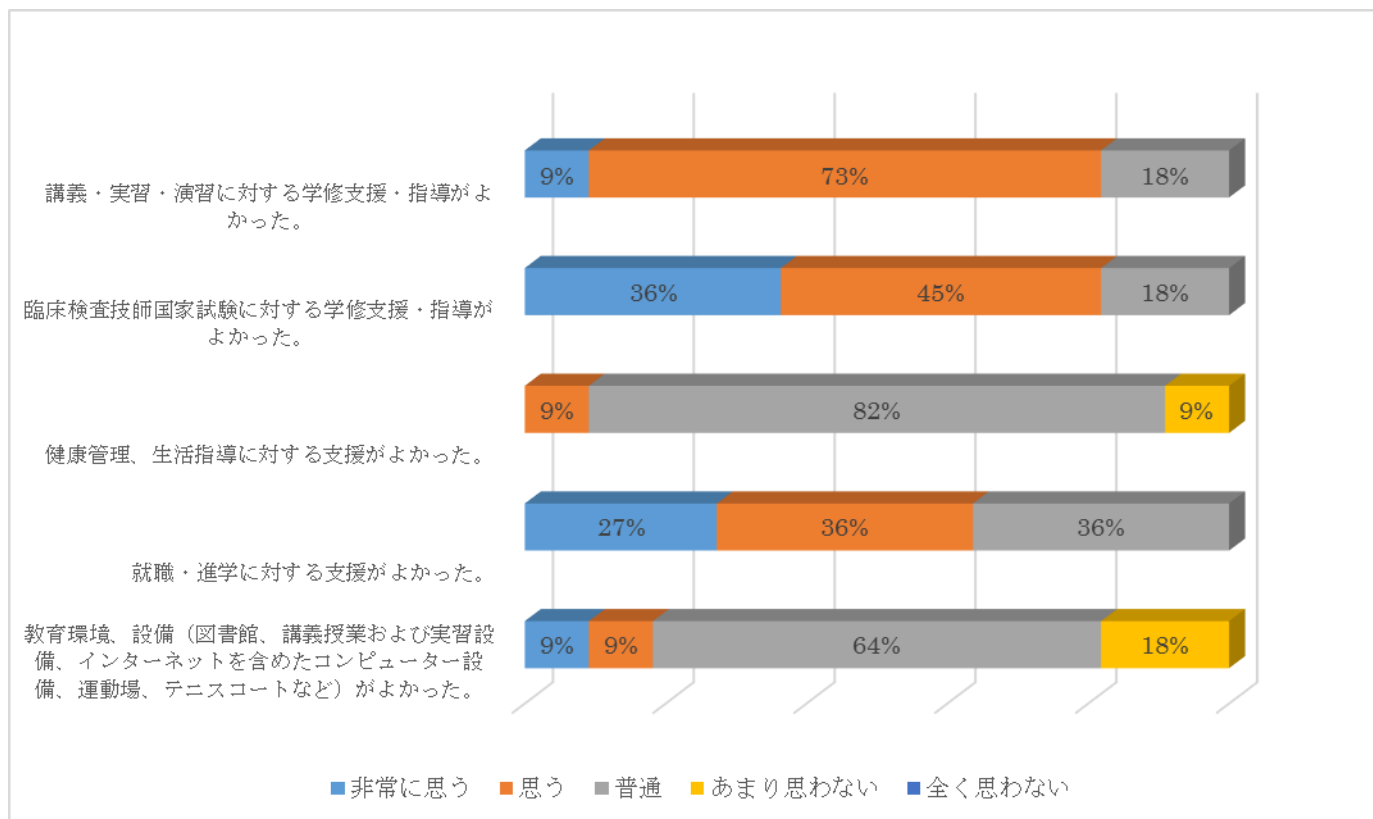
「B4：チーム医療の一員として必要な、責任感を身につけることができた。」、

「B5：チーム医療の一員として必要な、協調性を身につけることができた。」

については、30%以上の肯定的な回答を得ているが、昨年度と比べその割合は30%以上低下している。

しかしながら、いずれの項目も80%以上の卒業生が5段階評価の3以上と回答しており、昨年度を上回る結果となっている。

C) あなたが学生時代に大学から受けた支援等について答えて下さい。



グラフ 2. C : 大学で受けた支援に関する設問の回答

特に評価の高かったもの（肯定的な回答が 70%以上のもの）は、

「C1：講義・実習・演習に対する学修支援・指導がよかった。（講義等に対する支援）」

「C2：臨床検査技師国家試験に対する学修支援・指導がよかった。」

「C4：就職・進学に対する支援がよかった。」

の 3 項目である。

特に評価の低かったもの（肯定的な回答が 30%以下のもの）は、

「C3：健康管理、生活指導についての学生支援がよかった」

「C5：教育環境、設備（図書館、講義授業および実習設備、インターネットを含めたコンピューター設備、運動場、テニスコートなど）がよかった」

の 2 項目である。健康管理では昨年度 50%から 9%へと大きく低下し、環境設備においても昨年度 41%から 9%へと大きく低下している。

しかしながら、いずれの項目も 80%以上の卒業生が 5 段階評価の 3 以上と回答しており、昨年度を上回る結果となっている。

卒業生アンケートの結果を教育改善に活かすための取り組みと考察

平成 27 年 3 月、4 月の学科会議にて卒業生アンケートの結果を教育改善に活かすための取り組みと考察について話し合いを行った。

評価が高いものは、臨床検査技師にとって必要な知識・技術など授業が自分自身にとってどうだったかという設問である。

評価が低いものは、対人関係形成能力や問題解決能力、倫理観や責任感などに対するものであり、自分自身の積極性や行動に対する設問であった。つまり受けた授業は臨床検査技師になるための国家資格取得に大いに役立ったが、自らが積極的に考え行動するまでには至らなかったという結果であると言える。

今後はこれらの能力についても、学生が「自身の成長を感じられる」教育プログラム・教育方法や、学生自らが考えることを身につけさせる教育が必要である。

授業形式も受け身にさせるのではなく、考える方法（アクティブラーニング）を多く取り入れていく。それには授業を積極的に聞く態度を身につけさせる事から始める必要があり、例えば「大事なことは口頭でしか言わないから学生自身でノートに書き取るように」、「分かりやすい詳細まで書いてある資料は作らず、授業中に学生が書き込んでいく資料を配布する」などが考えられる。

対人関係能力や責任感、協調性などは、今ある授業（医療コミュニケーション演習、対人援助技術演習、チーム医療論など）を軸に、学生自身が成長・成果を感じられるような授業を行う。各センターの行っている事業を活かし、ボランティアや地域交流への参加を促すことで、学生に達成感、自身の成長を感じられるようにするなどが考えられる。

健康管理、生活指導については、健康保健センターの充実や、センター自体の PR 活動も必要ではないか。

設備面では、徐々に視聴覚設備も充実してきてはいるものの、まだまだ改善すべきところは多いと考える。学生食堂や売店、学生の憩いの場などの不足、自己学習するためのスペースがないなど、まずは学生が生活しやすい環境・設備を整えるのが急務であると考えられる。

今回のアンケート回収率が 12.8%と低く、一部の卒業生の意見であり、全体を反映しているとはいえない。低下した要因として、例年卒業生が就職した職場へアンケートを送付していたが、今回のアンケートは自宅へ送付しており、回収率が低下してしまったのではないかと推察される。回収率向上を図るため、平成 26 年度卒業生に対して卒業式後に学科長から卒後アンケートへの協力依頼を行った。今後、回収率を上げるために manaba の利用やインターネットを利用したアンケートなど、アンケートの取り方自体を見直す必要があるのではないか。

2. 看護学科 卒業生へのアンケート調査結果報告

調査方法

調査の対象は、平成 26 年 3 月卒業生（3 期生）

結果の概要

1. 回収率

卒業生アンケートの発送数、回答数、回収率を表 1 に示す。回収率は、16.0%と、一昨年、昨年と比べても最も低かった。

	送付数	回答数	回収率
平成 26 年度	75	12	16.0%
平成 25 年度	74	19	25.6%
平成 24 年度	70	13	18.6%

2. 調査結果

質問項目別に、集計結果を示す。

A あなたの卒業時の進路についてお答えください。

① 病院	12
② 診療所	0
③ 保健所・市町村	0
④ 学校	0
⑤ 企業	0
⑥ 福祉施設	0
⑦ 進学	0
⑧ その他	0

B あなたの現在の所属についておたずねします。

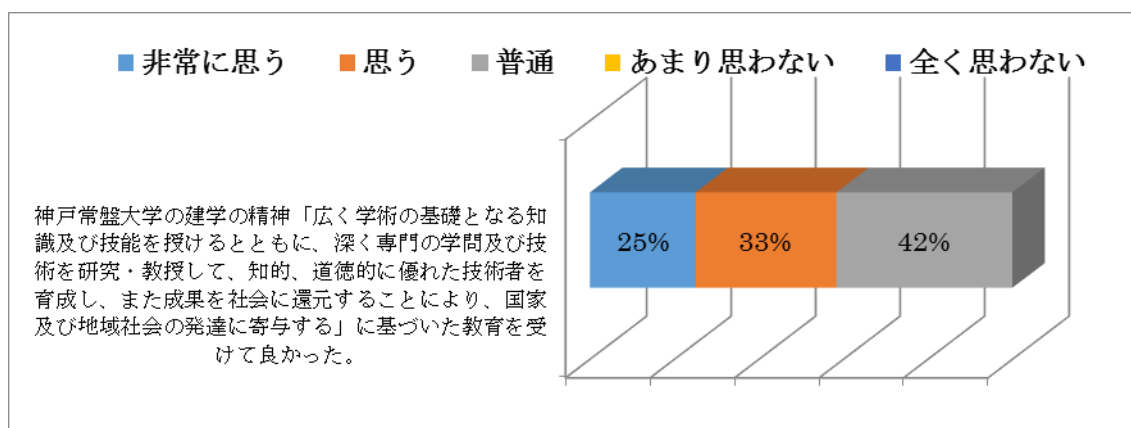
⑨ 病院	12
⑩ 診療所	0
⑪ 保健所・市町村	0
⑫ 学校	0
⑬ 企業	0
⑭ 福祉施設	0
⑮ 進学	0

⑯ その他	0
-------	---

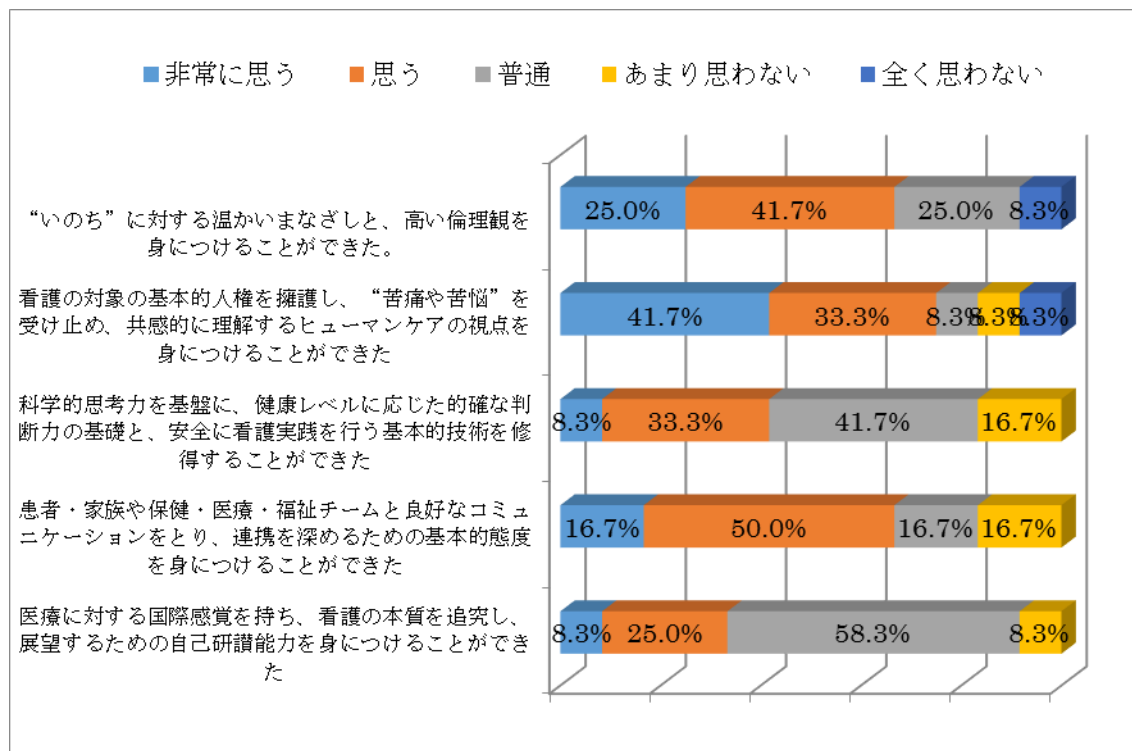
C あなたの現在の職種についておたずねします。

① 看護師	12
② 保健師	0
③ 養護教諭	0
④ その他	0

D 神戸常盤大学で教育を受けて良かった

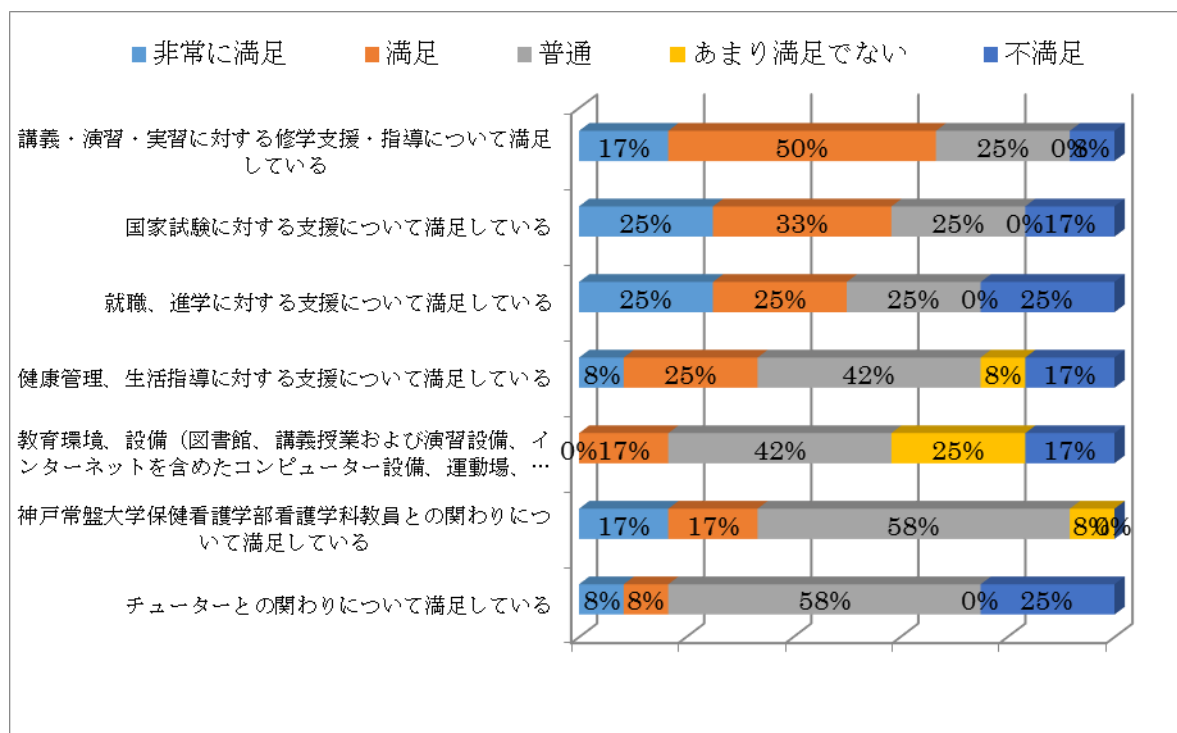


E 大学で以下のもの（ディプロマポリシー）を身につけることができたと思いますか

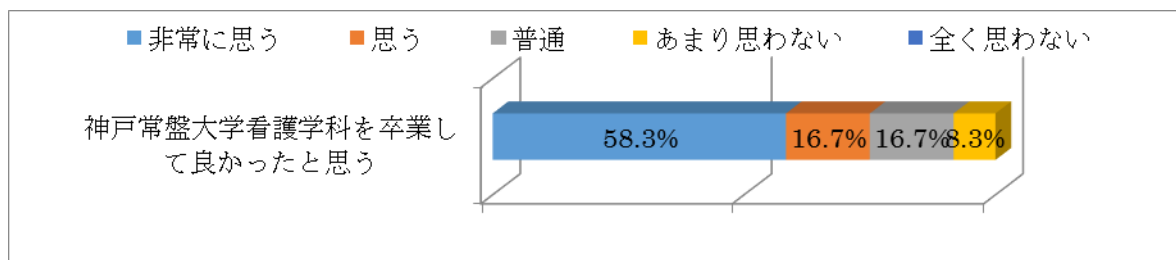


ディプロマポリシーについては、非常に満足、満足を選択したものが多く、肯定的に自覚していると考えられる。

F 学生時代に大学から受けた支援等について教えてください。



G 神戸常盤大学看護学科を卒業して良かったと思う



神戸常盤大学看護学科を卒業して良かったと思う理由について、6人の自由記載があった。

・大学で学んだ友人とは今でも会って一生の仲間になったし、実習や研究などしんどかったけれど良い経験になり、今にいかせると思う。

・学友がとてもよかったから

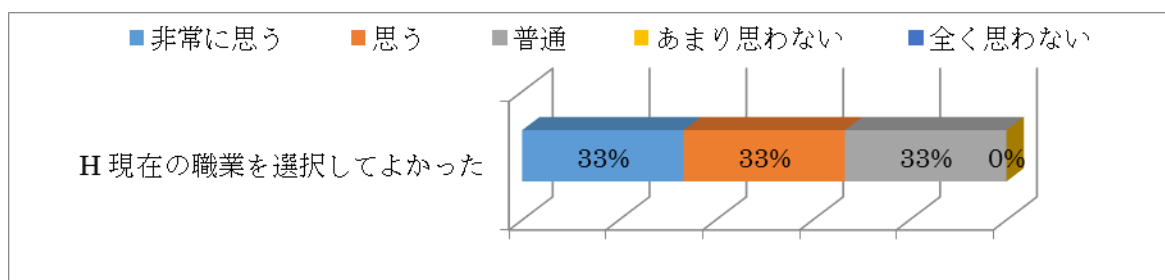
・他大学のことをよくわからない。比較するものがないのでよくわからない。

・勤務先での評価が良かったため

・たくさんの仲間に会えたから

・同じ目標をもつ学生がいたからこそ看護師になれたから

H 現在の職業を選択してよかったと思う



I 看護学科に対する要望、後輩へのアドバイス

2人の自由記載があった。

・研究の先生と色々なお話ができて、この学校に来てよかったなと思いました。

・実技の練習を増やすと良い。将来に役立つ。イメージが付きやすい。

卒業生アンケートの結果を教育改善に活かすための取り組みと考察

学科会議で、アンケート結果をもとに意見交換を行った。回収率が低下している点について、アンケートの時期が卒業して6ヶ月～9ヶ月の時期という、時期が不適切という意見が多かった。さらに大学教育の真の効果を測りたいのであれば、卒業生全体に拡げるべきであろうという意見も多かった。

3. 口腔保健学科 卒業生へのアンケート調査結果報告

調査方法

調査の対象は、平成 26 年 3 月卒業生

結果の概要

1. 回収率

	送付数	回答数	回収率
H26 年度	61	12	19.7%
H25 年度	70	15	21.4%
H24 年度 23 年度卒生	54	11	20.4%
H24 年度 22 年度卒生	52	13	25.0%

2. 調査結果

A : 勤務先

病院	3	11%
診療所	8	57%
その他	1	32%

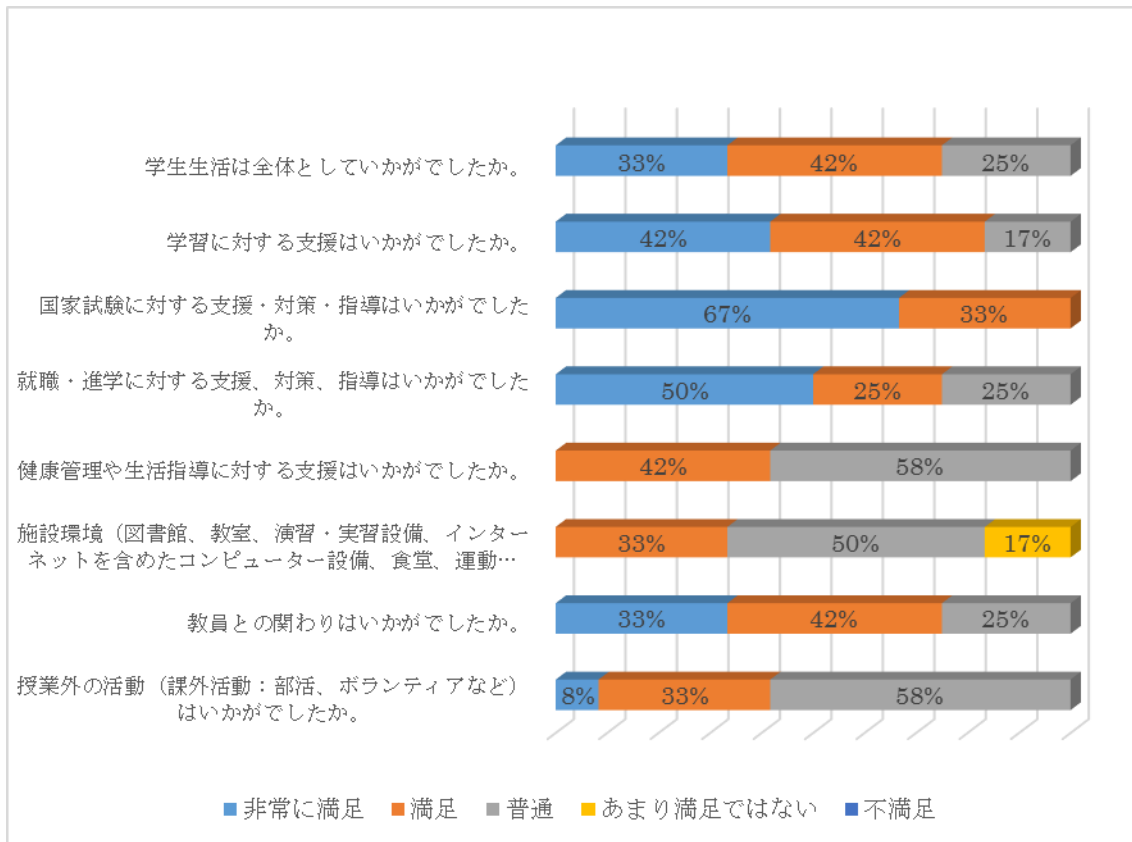
B : 本学の各種支援

※回答は B・C 共通で 5 段階評価

- | |
|-----------------------------|
| 5 非常に満足 または 非常に当てはまる |
| 4 満足 または 当てはまる |
| 3 普通 どちらともいえない。 あるいはわからない |
| 2 あまり満足していない または あまり当てはまらない |
| 1 不満足 または 全く当てはまらない |

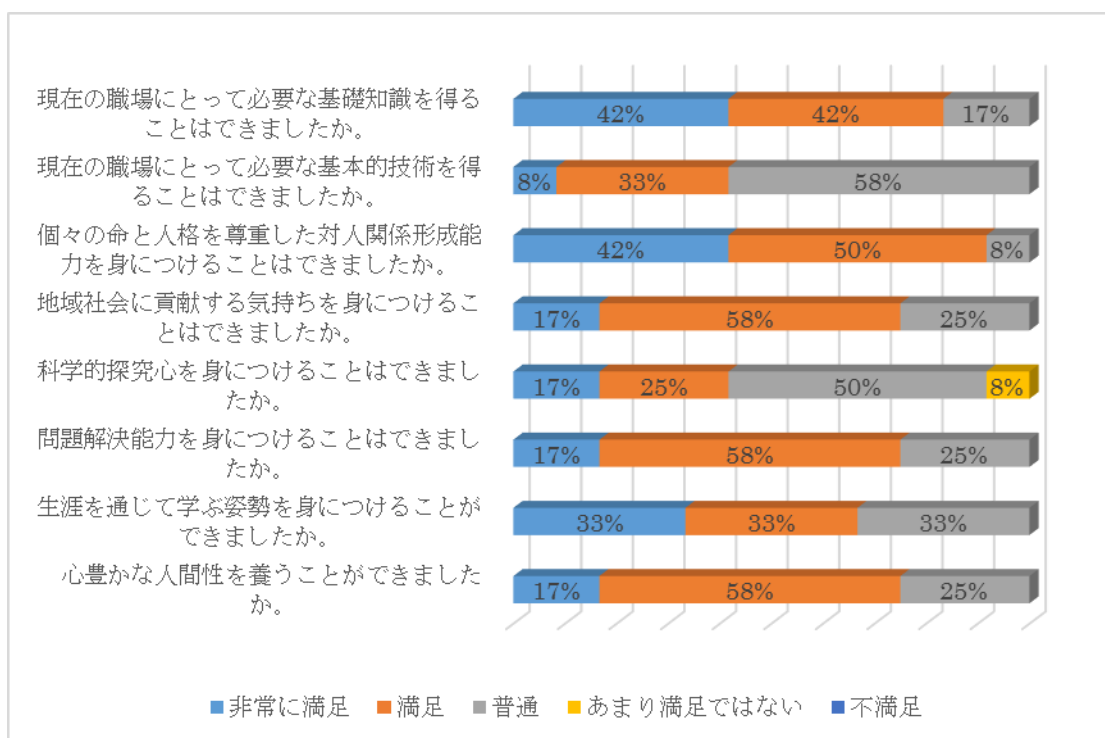
<調査項目>

B：本学の各種支援についてお答えください。



<調査項目>

C：本学で身に付けたことについてお答えください。



卒業生アンケートの結果を教育改善に活かすための取り組みと考察

(1)回収率について

回収率は、全ての学科で昨年度よりも低下した。通信課程以外はもともと 21～26%程度の割合であったものが、20%以下にさらに下落している。このことは、深く憂慮すべき問題である。口腔保健学科は他学科に比較して下落幅は最も少ないが、依頼文の差出人を学長や学科長に変更するなどといった小手先の策ではなく、本学で学んだことを誇りに感じ、大学の名前を耳にするだけで心躍る思いを抱く同窓の志が育まれるような教育内容（カリキュラム）の抜本的な改革が急務であると考えます。

(2)調査結果 A：勤務先

母数が少ないため昨年度との比較や評価は不可能。

(3)調査結果 B：各種支援

本学の各種支援について設問ごとの平均値を表 1 にまとめた。

学生生活 全体	学習支援	国試支援	就職支援	健康生活 支援	施設環境	教員との 関わり	授業外 活動	平均値
4.08	4.54	4.92	4.77	3.81	3.52	4.5	3.2	4.17

表 1

5 段階評価ではあるが、卒業生は母校に対して悪い評価はつけにくいと思われるため 3 は「普通」ではなく「やや悪い」評価としてとらえる必要がある。評価 4 を下まわっているのは、「健康管理・生活指導に呈する支援」と「施設環境」、「授業外の活動」であった。健康管理や生活指導については学科による対応ではなく、大学全体の支援として心のケアも含めて健康管理センターが担うことになっている。しかし、専任者がおかれていない状況では、必要な時に必要な指導ができず、適確な対応が困難であると思われる。施設環境は毎年評価が低い項目である。とくに口腔保健学科においては、学生数に比較して教室が狭いという苦情が授業評価でも毎回指摘されている。広い教室を新たに作ることも考えられるが、むしろ少人数の授業を増やすといった授業内容の改善などの工夫で対応することも必要であろう。授業外の活動についても、ボランティアなどをやみくもに勧めるのではなく、授業で奉仕や文化交流の重要性を学ばせる一方でボランティア活動が出席や単位に換算できるような課内・課外を一体化した仕掛けが求められている。

(4) 調査結果 C：身につけた能力について

本学で身につけた能力などについて設問ごとの平均値を表 2 にまとめた

基礎知識	基本的 技術	対人関係 形成能力	社会貢献	科学的 探究心	問題解決	生涯学習 する姿勢	心豊かな 人間性	平均値
4.15	4.42	4.85	4.54	3.62	3.38	4.34	3.4	4.09

表 2

4 未満の項目は「科学的探究心」、「問題解決能力」、「心豊かな人間性」である。前 2 項目は本学科のような知識と技能（テクニカルスキル）が称賛される職業をめざす教育に

最も欠ける項目であり、社会に出た後には最も希求される能力でもある。初年次教育から卒業まで継続して、全ての授業の中に取り入れていくべきものであることは承知であるにもかかわらず、毎年のようにこの項目の自己評価が低いのは、授業内容のアクティブラーニング導入への舵切りが全学科的（全学的）な方向性として必要であることを物語っている。「心豊かな人間性」教育については十分に遂行できているように思われるが、実際に学生が社会に出てその希薄さを痛感すると答えているのである。課内外の学びを通じノンテクニカルスキルの向上をむしろ第一義にすべきであると考ええる。

一方で、「個々の命と人格を尊重した対人関係形成能力」は他学科と比較して突出して高い評価である。問われている能力をどの程度身につけたのかは、主観的なものでありかつ過去（入学前）の自分の能力との相対評価でもある。個々人が非常に伸びたと感じてくれるのはうれしいかぎりである。

(5)まとめ

回収率からは、地域や大学を愛する気持ちや本学の卒業生である誇りが感じられないことから、授業やその他の大学生活が「おもしろい」と感じさせる教育の在り方を模索する必要がある。調査 A の「学生生活全体」の評価が 4.08（昨年度 4.2）と低く、ここを上げていく努力が求められる。

調査 A からはカリキュラムの改革、調査 B からは授業内容の改善が必要であると思われる。ノンテクニカルスキルの向上に向けて、学科内 FD の充実が望まれるところである。

4. 看護学科通信制課程 卒業生へのアンケート調査結果報告

《調査結果概要》

1. 回収率

アンケートの発送数、回答数、回収率を表1に示す。回収率は昨年度とほぼ同じであった。

表1

	発送数	回答数	回収率
H 2 6 年度	195	67	34.4%
H 2 5 年度	167	58	34.7%

2. 回答者の背景

回答者の背景について表2の1)～4)に示す。

1) 性別および年齢

	女性(人)	男性(人)	合計(人)
30歳代	12	2	14
40歳代	33	4	37
50歳以上	16	0	16
合計	61	6	67

2) 就業の状況

	人数(人)
働いている	65
働いていない	1
無回答	1
合計	67

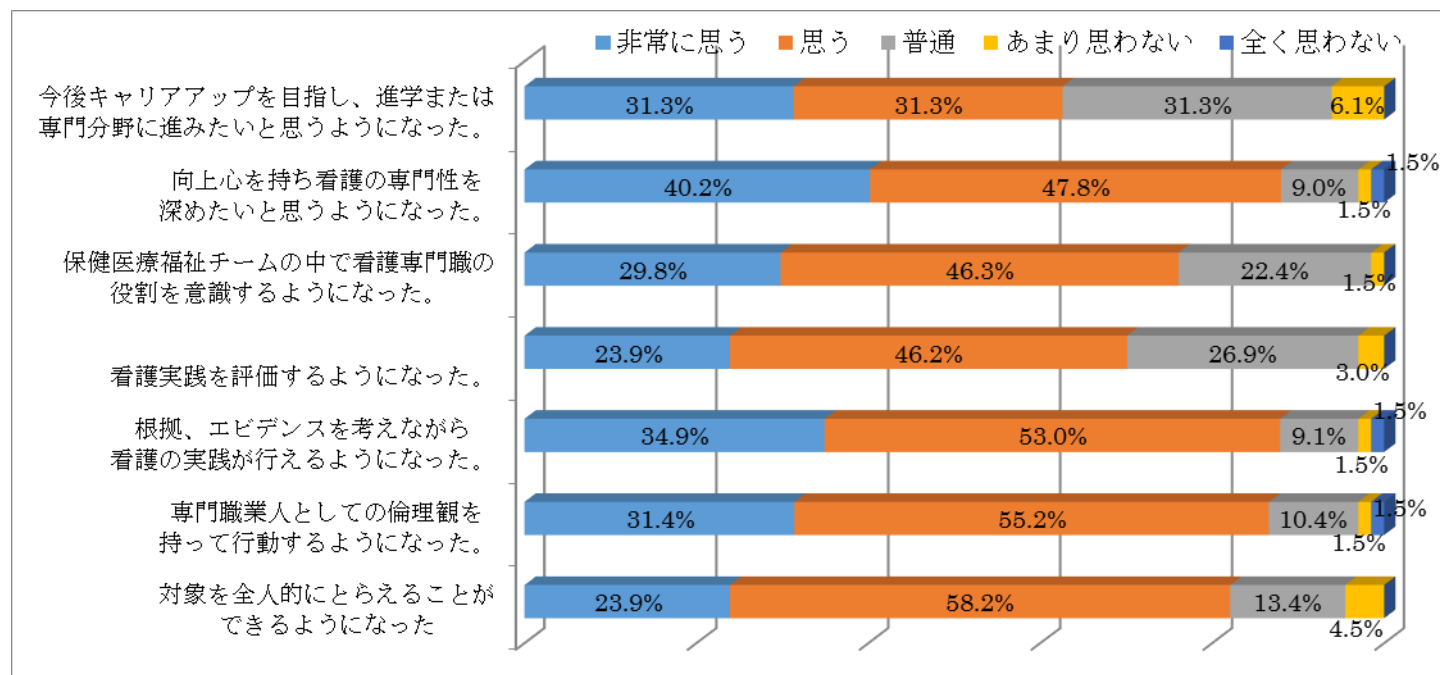
3) 勤務場所

	人数(人)
病院	49
診療所または開業医	5
老人保健施設または特別老人ホーム	8
その他	2
無回答	1
合計	65

4) 卒業後の職場

	人数(人)
勤務先が変わった	21
部署が変わった	1
役職に変化があった	5
看護職以外に転職した	0
変わっていない	38
合計	65

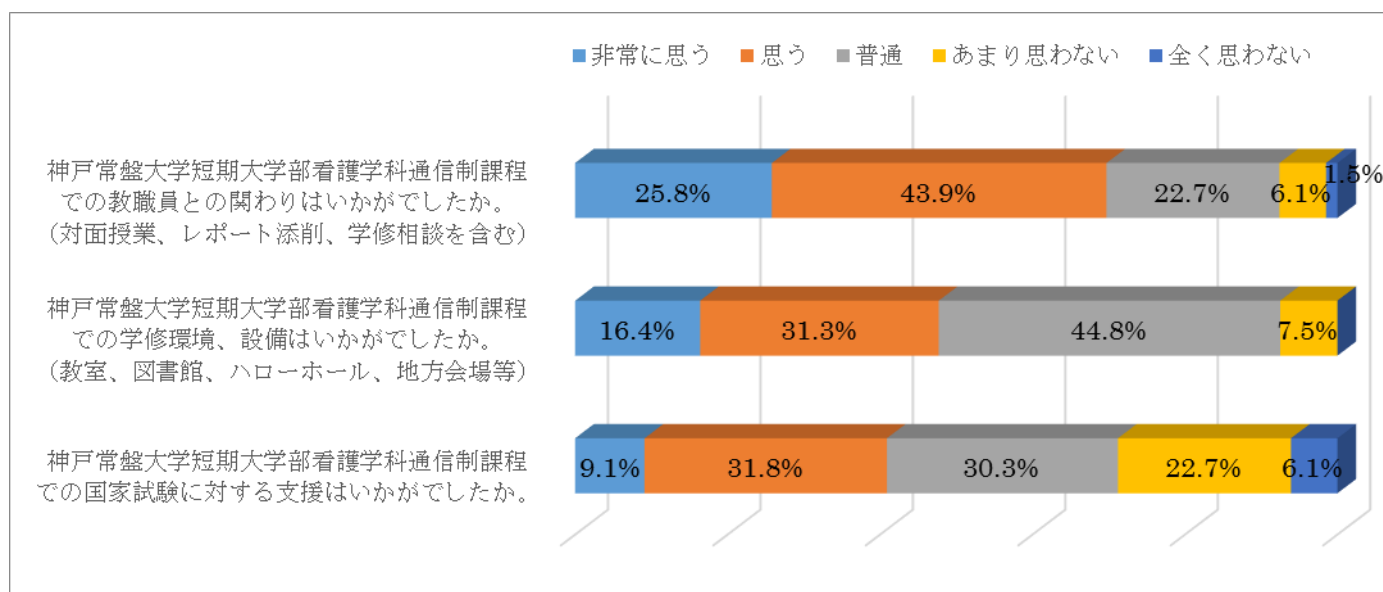
3. ディプロマポリシーの視点からご自身についてお答えください。



ディプロマポリシーの視点からの質問に対しては、すべての項目において肯定的な回答（非常に思う・思う）が60%を超えていた。中でも最も肯定的な回答の比率が高かったのは「向上心を持ち看護の専門性を深めたいと思うようになった」でついで「根拠・エビデンスを考えながら看護の実践が行えるようになった。」「専門職業人としての倫理観を持って行動するようになった。」であり、8割近い卒業生が肯定的にとらえていた。比較的、肯定的な回答の比率が低かったのは、「今後キャリアアップを目指し、進学または専門分野に進みたいと思うようになった。」で、昨年のアンケート結果と同様の傾向が見られた。

自由記述では、「根拠を考えながら看護をするようになった。」「実践の評価を学んで今までの自分の実践が自己満足であったことを思い知らされた。」「自分自身は意識が高まった。」「前向きに何事にも取り組み自信をもつことができました。」など自身の変化について語られていた。また、キャリアアップでは「家族を支援していけるようカンセリング等の勉強をしたい」「認定看護師になりたい。」「大学に進学したい。」「NST 専門療法士資格取得を目指したい。」など明確に自身の今後について意識されている記述がみられた。同時に要望として「こういった手段があるのか学校側から積極的なアドバイスが欲しかった。」「在学中にもっと教職員と関わりをもって学習相談をすべきであった。質問しやすい雰囲気にしてほしい。」などがあった。

4. 大学の支援に対してお答えください。



大学からの支援に関しては、教員とのかかわりが最も肯定的で 69.7%であり、昨年の 46.0%と比較すると 23.7%増えている。自由記述では、「看護免許以上の『大切なもの』を頂きました。」「通信制課程でありながら、大変よく考えて頂き、個人の気持ちを考えて下さったことに感謝しています。」など、教員とのかかわりを肯定的に評価している内容が多く見られた。

最も肯定的な評価が低かったのは国家試験に対する支援の 40.9%であったが、昨年の 27.0%と比較すると 13.9%肯定的にとらえる学生が増えている。記述内容には、「レポート課題が国家試験に繋がった。」「先生のコメントを思い出し、状況設定問題に臨んだ。」「レポートを書くことで学力が上がった。」などの意見が聞かれた。今年度は、昨年のアンケートの記述内容を参考にし、学生が国家試験対策の年間計画を実施した。特に国家試験対策講座や模試の開催時期や内容の検討、オリエンテーションの充実などを図ったことが、肯定的な評価につながったのではないかと考える。

要望として「国試対策をもう少し取り入れてほしい。」「学校の授業内にとりこんでほしい。」「教科別国試対策があれば良いと思いました。」「関東圏内でも実施してほしい。」などの意見があった。

5. 卒後評価を教育改善に生かすための取組みと考察

今回の卒業生からのアンケート調査結果を今後の教育に生かすことを目的に看護学科通信制課程として以下の取り組みを行った。

1. 国家試験対策委員との共有と活用

国家試験対策委員とアンケート結果を共有した結果、昨年の国家試験対策に加え、以下の内容についても検討した。

1) 関東方面の学生に向けた国家試験対策の計画と居住地域での国家試験対策講座などの情報提供

2) 既卒生への国家試験対策の強化として、「既卒生のための国家試験オリエンテーション」の計画

- 3) 教員による講義を設けてほしいという要望に対しては、各科目の中で国家試験の対策も意識し、学生にもレポート学習内容が国家試験に繋がっていることを意識させる努力をする。

2. アンケート結果の課程会議での報告と検討

アンケート内容に関して、年度末の課程会議において提示し協議をした。

1) 卒業生の動向について

卒業生の動向については、在学生のモチベーションを上げる効果もあり、今後、全卒業生について、その後の動向を調査する必要性も含め検討していく。

2) キャリアアップを目指す学生への支援

通信制課程では、その教育体制の限界から学生の要望にどこまでこたえられるかという問題があるが、キャリアアップを目指す学生からの要望を考慮し、対面授業の際の交流や質問コーナーがもっと学生にとって利用しやすくなるような工夫、学修相談や卒業生を囲む会などの活用を総合的に進めていく必要があると考える。

今回のアンケート結果に関しての協議を継続して、教育改善に努めていきたいと考えている。

第 5 部 神戸常盤大学の平成 26 年度大学認証評価結果について

はじめに

神戸常盤大学では、平成 26(2014)年度に公益財団法人日本高等教育評価機構による第三者評価（大学機関別認証評価）を受審いたしました。

前回、神戸常盤短期大学として受審した平成 18 年当時は全ての学科が短期大学であったため、衛生技術科（現保健科学部・医療検査学科）、看護科（同保健科学部・看護学科）、幼児教育科（同教育学部・こども教育学科）の 3 学科が(財)短期大学基準協会を受審し「適格」と認定されました。今回は大学設置 7 年目として 2 学部 3 学科（保健科学部・医療検査学科と看護学科および教育学部・こども教育学科）が対象となりました。両学部とも大学としては今回が初めての受審となりました。また、平成 25 年度には神戸常盤大学短期大学部が(財)短期大学基準協会による第三者評価を受け、「適格」と評価されています。

公的第三者による大学の認証評価は、共通の認証基準に基づいて大学の状況を点検・評価することができ、自己点検・評価活動にとって大きな意義を持つものです。

なお、本学ホームページ（<http://data.kobe-tokiwa.ac.jp/>）および（財）日本高等教育評価機構のホームページ（<http://jihee.co.jp/>）に「大学機関別認証評価結果」が掲載されています。ここには日本高等教育評価機構による機関別認証評価結果の全文、および本学作成の「神戸常盤大学 自己点検評価書」の全文が掲載されておりますので、ぜひご覧下さい。

平成 26 年度大学認証評価（認証評価機関：公益財団法人日本高等教育評価機構）について ―受審終了までの流れとその概要―

平成 26 年に、財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価（以下「認証評価」とする）を受審した。対象は保健科学部・医療検査学科及び看護学科、教育学部・子ども教育学科であり、大学として初めての受審である。受審までの過程を時系列で概説する。

平成 23 年

4 月：日本高等教育評価機構（以下「機構」とする）によるセミナー説明会に出席

9 月：自己評価担当者説明会に出席

平成 24 年

11 月：認証評価準備委員会（以下「準備委員会」とする）を発足し、「自己点検評価書」作成および根拠資料（エビデンス）の収集・整理にあたった。

メンバーは自己点検・評価委員会および 3 学科から教務委員を中心として 2～3 名で構成され、認証評価に必要となる根拠資料 25 年 8 月 27 日までに 2 か月に 1 回のペースで計 6 回開催した。また、機構側のタイムスケジュールに合わせたタイムテーブルを作成し準備の遅滞をなくすように努めた。

「自己点検評価書」の基準Ⅰ～Ⅳの各領域、および大学が使命・目的に基づいて独自に設定した基準（以下「基準 A」とする）についての記述責任者を決定して記述および根拠資料収集作業などを進め、ALO が全体を統括する形を採ることとした。

基準 A については本学で既に「社会連携」と決定しており、以下の 2 項目とした。

「A-1 大学が持っている物的・人的資源の社会への提供」

「A-2 国際社会との交流・協働活動」

平成 25 年

4 月：機構側による認証評価セミナーに出席

今回の認証評価における要点や注意点などを準備委員会のみならず全学的に周知し共有を図った。また、短期大学部における第三者評価（短期大学基準協会）では、紙ベースで作業したため最終的な自己点検・評価報告書作成までに多大な労力を要した。

このため今回の認証評価における自己点検評価書作成に当たっては、記述者がウェブサイトで書き込みができ、文書ファイルで保存できるサービス（SkyDrive）を活用し効率化を図った。

7 月 29 日：代表者連絡会の発足。

ALO を中心に、理事長、学長も含めた組織の長（学部・学科・事務局・各課など）、委員会委員長、センター長、準備委員会、自己点検・評価委員会などからなる総勢 45 名の全学的な受審準備体制であり、2 か月に 1 回のペースで平成 26 年 1 月までに計 4 回開催し、自己点検評価書作成等を全学的に進めた。

平成 26 年

2 月以降は基準責任者が中心となって自己点検評価書の校正、追加された根拠資料の整理などを行った。

3 月末までには全体の整合性・エビデンスとの整合性などもチェックし体裁を整えた。

今回の認証評価のための自己点検評価書の記述では、アドミッションポリシー、カ

リキュラムポリシーおよびディプロマポリシーのいわゆる「3つの方針」および自己点検・評価など全てにおいて PDCA サイクルが十分に機能しているかを基本に、機構側が示す「受審のてびき」に従って記述した。最終的な記述の完成を待ってエビデンス集に集められた根拠資料並びに備付け資料のナンバリングを行い「平成 26 年度自己点検評価書」を完成。

6 月 27 日、機構側に必要資料一式を送付した。

9 月 17 日付けで機構側から送付された「書面質問及び依頼事項」に対する本学の回答を、9 月 24 日に機構側に送付した。

10 月 30 日（木）・31 日（金）の両日、評価チーム 5 名（責任者 1 名、評価員 4 名）および機構職員 2 名の計 7 名による実地訪問調査（以下「実地調査」とする）を受けた。面談に関しては特に大学側からお願いや想定質問の例示などをするようなことはなかったが、評価員からはいずれも高い評価であった。

平成 27 年

1 月 9 日：機構側から総評及び基準 4 についての「調査報告意見書案等」が送付されて来たので、担当する取りまとめ役が回答したものを 2 月 9 日に「意見申し立て返答書」および「語句修正依頼書」として機構側に送付した。

3 月 10 日付で機構より「神戸常盤大学は、本機構が定める大学評価基準を満たしていることから平成 27 年で適合と認める」との機関別認証評価結果を得た。

機関別認証評価結果では、「3つの意見」として（1）優れた点、（2）改善を要する点、（3）参考意見があるが、いずれも改善を要すると判断される事項に関しては「該当なし」との評価を得た。

この認証評価結果を踏まえ、大学のウェブサイト「大学機関別認証評価結果」と「平成 26 年度神戸常盤大学自己点検評価書」を掲載した（平成 27 年 4 月現在掲載済み）。

詳細は大学ホームページを参照されたい。

おわりに

今回、公的財団法人日本高等教育評価機構が定める大学評価基準を満たしていることから「適合」と認められ、「神戸常盤大学は、本機構が定める大学評価基準を満たしていることから平成 27 年 3 月 10 日付で適合と認める」との結果と「認定証」の交付を得ました。「平成 26 年度 大学機関別認証評価 神戸常盤大学評価報告書」にも「改善を要する点」、「参考意見」などは全くありませんでした。ここに今回の受審に際して深く関わっていただいた全ての教職員の皆様に対して深く感謝するとともに敬意を表したいと思います。特に「自己点検評価書」作成に関わっていただいた教職員の皆様には厚く御礼申し上げます。

7 年後には再び受審することになりますが、今回は本当にお疲れ様でしたとともに有難うございました。

平成 27 年 4 月吉日

ALO 森松伸一

謝 辞

おかげさまで平成 26 年度の年次報告書を刊行することができました。皆様方のご協力に心より感謝申し上げます。

年次報告書は、平成 24 年度分までは冊子として配布していましたが、情報公開の観点から大学ホームページ（HP）への掲載をめざして準備を進め、平成 25 年度年次報告書は、教員個人の活動記録を除いたものを大学 HP に掲載し、これまで通り教員個人の活動記録を含む全内容を冊子として配布いたしました。

平成 26 年度年次報告書は、前年度同様、教員個人の活動記録を除いたものを大学 HP に掲載し、教員個人の活動記録は HP の学内サイトに掲載いたします。

大学 HP では、情報公開のページに「自己点検・評価」の欄を設け、ここに平成 25 年度以降の年次報告書だけでなく、学外評価機関による認証評価結果も掲示しており、本学の自己点検・評価活動が見て取れるようになっていきます。

年次報告書は毎年実施する本学の自主的な自己点検・評価活動の記録です。これに加えて、平成 26 年度は、4 年制大学になって初めて外部評価機関（高等教育評価機構）による認証評価を受けました。これにより、年次報告書による取り組みだけでは困難な組織の枠を超えた全学的自己点検・評価ができ、大変有意義であったと思います。おかげさまで「適合」との評価を得ることができました。

今後は、年次報告書による各組織内での自己点検・評価活動に加えて、認証評価の経験を活かして全学的な課題・目標に取り組むことのできる活動をめざしたいと思います。

平成 27 年 6 月

自己点検・評価委員会	委員長	井本しおん
	同 副委員長	松元英理子、金川治美
	ALO	森松伸一
	同 委員	澤村暢
		井上清美・奥野久美子
		柳原利佳子
		足立了平
		近藤みづき
		中村忠司
		坂本啓
		平澤仁
		小谷伸一
		猿渡康博
		堀田佳子
		平川愛恵
		内海英樹
		中川朋恵